

産政塾

XVII



產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

● 産政塾Ⅶの発刊によせて

（財）中部産業・労働政策研究会

小田桐 勝巳

● きづき ～第17回産政塾に参加して～

全ユニー労働組合

荒居 昭治

1

● 産政塾を振り返って

名古屋鉄道労働組合

石田 保志

9

● 産政塾を通じて気付いた自分の殻

丸栄労働組合

伊藤 絃子

17

● 新たな刺激が自分を変える

トヨタ車体労働組合

井戸田 章弘

23

● 格好よいおっさん

アイシン精機株式会社

岩田 将弘

29

● 産政塾に参加して

東邦ガス労働組合

大澤 秀樹

37

● 産政塾を振り返って

トヨタ自動車株式会社

大橋 俊介

45

● 「殻」と「鎧」と「産政塾」

刈谷市役所

加藤 章子

53

● 「自分に負けるな！」 61

全トヨタ労働組合連合会 加藤 明人

● 「意識」と「行動力」 67

デンソー労働組合 木村 匡伸

● 刺激を求めて 73

アイシン労働組合 古賀 博義

● 共に「楽しむ意識」さえ有れば 81

豊田市役所 近藤 邦博

● 「殻の外に踏み出せたか!?」 87

東海理化労働組合 佐々木 澄和

● 「産政塾を振り返って」 91

トヨタ紡織株式会社 塩谷 武司

● 『殻』ってなんだろう? 99

豊田工機労働組合 志岐 宣浩

● 産政塾を通して学んだ「殻」 109

株式会社松坂屋 品川 誠一郎

● 「自分を振り返る」 117

アスモ労働組合 田中 光明

● 「全力疾走」 125

株式会社豊田自動織機 野田 雅子

● 「産政塾を通じて感じたこと」 133

豊田自動織機労働組合 長谷川 真次

● 「殻」ドコドコ？	東邦ガス株式会社	樋山卓造	141
● 産政塾に参画して	トヨタ車体株式会社	益田寛	149
● 知行合一	中部電力株式会社	増田裕介	157
● 「感謝」	松坂屋労働組合	松井正和	167
● 「産政塾を振り返って」	株式会社デンソー	松本雄一郎	173
● 産政塾で学んだもの	豊田合成株式会社	水谷雄一郎	181
● 「産政塾に学んだこと」	トヨタ自動車労働組合	三谷勝行	189
● 簡単なこと	中部電力労働組合	村井真一	197
● 「17期産政塾の感想」	中部産政研	松井英治	205
● 産政塾活動記録			217
● 歴代卒業生			233

産政塾XVIIの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十七期の活動を修了し、今年も二十七名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の時代を担う二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に赴いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。今回も産政塾への参加者は、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。第十七期にあたる二〇〇六年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「独創性」「チャ

レンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十七期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思ひます。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いであります。

塾長 小田桐 勝 巳

き づ き

～第17回産政塾に参加して～



全ユニー労働組合

荒居 昭 治

<プロフィール>

あらい あきはる (38才)

- 1968年2月 愛知県知多郡美浜町 生まれ
- 1990年3月 ユニー株式会社 入社
- 2004年9月 全ユニー労働組合 専従中央執行委員
現在に至る

<家族> 妻、子供4人

<趣味> ドライブ・寝ること

【今までの私】

労組の役員であるにもかかわらず、本当は今でも人と接するのがとても苦手なのです。中学生の頃までは（今では考えられないかもしれませんが）、人前で話をする事なんか考えられないほど、おとなしい自分であったとよく言われました。中2の春に突然父親が他界し、この頃から「他の人に迷惑を掛けないよう、自分が何とかしなくては…」と変わりだしたのだと思う。とはいえ、実際には母親に頼りっきりで苦労して兄妹を育ててくれたのであって、今ここに私自身が居るのは母に感謝したいと思う。

高校から専門学校に通った一番遊んだ時期には、仲間同士でバンドを組んでうまくはなかったけど演奏して人前に立つことで、緊張感と充実感（優越感？）を味わい、社会人となった。こんな私でも結婚してくれた妻もいて、4人の子供とともに今の自分がある…私の家族にも感謝したいと思う。

…なんて書いていますが、このような原稿を書くきっかけがなければ、多分、自分を振り返っていなかったことでしょう。

【どうして私が…】

平成18年9月に労組の役員改選、役割の委嘱があり、「…で、産政塾は…荒居」ということで、私が「その人」として選ばれました。知らない人たちと話をすすめていかなければならないという、最も苦手とする役割委嘱だったため、困惑していたところへ、「卒論」というこれまた苦手なおまけも

付いていて、私の当時の気持ちの不安定さも重なって、正直ひどく落ち込んでいました。こうして、私と産政塾との出会いが始まったのです。

【開塾式】

第1回 2006年1月23日（月）

「終了したら4000字の論文提出」先輩から話しを聞いて、これは大変なことになったという不安いっぱいでも開塾式に参加しました。また、産政塾は「楽しいよ、いい体験にもなるし絶対いいよ！」とも聞かされており、この開塾式で初めてその話が理解でき、何とかやっつけていけそうだ、楽しいこともありそうだと感じました。みんなで話を進めていく中で、どなたかが「大丈夫、大丈夫、この会合には『失敗』はないから…」と話していました。この一言は妙に新鮮で、何か目の前の霧がスーッと晴れていく、そんな自分に気づきました。

【ユーモア・笑いについて学ぶ】

第2回 2006年4月20日（木）

正直言って、開塾式以降、仕事の上でも精神的にもどん底にある状態が続いていました。思うとおりに片付かない仕事と、それをやりこなせない自分にイライラする…そんな中でのこの企画は、しばらくの間、腹の底から笑っていない自分に気づかせてくれました。テレビも見ていなければ、子供たちとも触れ合っていない自分。朝、家を出て、遅く帰ってきて寝るだけの自分。何ともつたない時間を過ごしているのだろうと教えられたような気がしました。

笑いのもたらす効果は、病気をも癒すことができるとの話しを聞いて、今の自分のどん底状態を変えることができるのではと、少し楽になった気がしました（結果としては、その通りにはならなかったけど）。笑いのある生活の大切さと健康の大切さを痛感する会合でした。

【命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ】

第3回 2006年5月17日（水）・18日（木）

この会合のみ出席できず大変残念でありました。昨年11月に同僚が仕事で知覧を訪ねた報告の中で、彼が涙ながらに報告していたことがとても印象的で、是非自分の肌で感じてみたかったのですが、どうしても業務上参加できませんでした。気づく機会を1回失ってしまった、そんな気持ちでした。

【伝統工芸の技能伝承に学ぶ】 第4回 2006年6月10日（土）

伝統工芸の継承は、流通業界での技術やノウハウの継承にも通ずるものがあり、大変勉強になりました。熟練者の持つている経験やノウハウは、例えば、ボタン1つ押してパソコンから、接客技術が身につくものではないということを感じがつかされました。マニュアルをつくりさえすれば技術が伝えられる、マニュアルを見るだけで技術を盗み取れる、確かにそんな気持ちはどこかにあったな、と。

「背中を見て育つ」「同じ釜の飯を食う」という言葉は、何度となく聞き理解していたつもりでしたが、人との関わりなくしては、マニュアル、形式知では伝わらないこと、短時間では継承できな

いことなど、言葉のもつ本当の意味をきちんと理解するということは、こういうことなのかと思いつけられた。言葉の奥に本当の意味をきくと理解するということ、こういうことなのかと思いつけられた。

また、この会合での陶芸体験は、日頃の気持ちのもやもやを忘れさせてくれたとともに、最近の自分の集中力のなさに気がつかされました。

【民間ノウハウをいかした空港のチャレンジから「殻を破る」秘訣を学ぶ】

第5回 2006年6月27日（火）

この企画はなんと言っても、班のメンバーである岩田さんの先輩がお勤めであったことから実現できたものであり、人とのつながりの大切さをあらためて教えられました。今あるものを踏襲して、企画をたてることは簡単ですが、何もないところから、また、法律に触れること以外は何をやってもいいという企画づくりは、仕事上ではなかなかできるのではなく、本当に貴重な経験をさせていただきました。

メンバー5人のリーダーシップやメンバーシップをいかにお互いが引き出して、理解し納得し、私たちの企画の実現をすることができました。講師の尾頭さんのお話にもあったセントレアのチャレンジは、今思うとまさに産政塾で私たちが体験したことなのではないか（大袈裟かな？）と気づきました。本当にグループのみなさんには感謝したいと思います。ありがとうございました。

【豊かな生活とは？】 第6回 2006年7月14日（金）・15日（土）

心が豊かであるほど幸せなことはありません。今の自分の働き方がいかに偏っているか、そして、自分にとっても家族にとっても幸せな暮らしとは何かを考えるきっかけとなった会合でした。携帯電話も通じない、テレビもない、エアコンもないという体験は本当に久しぶりでした（ここ2〜3年で友達と行くキャンプは、バンガローにテレビもエアコンもあるところを選んでいたので）。食事を作るときも、食べるときも、片付けるときも、寝るまでの時間も、自然とみんなでいろんなことを話して、コミュニケーションを深めることができました。

スローライフ・スローフードはコミュニケーションを育む上で、とても大切な手段なのではないかと感じたのは、私だけでしょうか。本当に楽しく過ごせ、久しぶりにリラククスできました。

【閉塾式】 2006年8月23日（水）

いろいろと刺激になった産政塾が終了するのは、とても残念。もつとみなさんといろいろ話したり、考えたりして自分を伸ばしていきたくかった。なにせ、何事にも流れに乗るのが遅く、ようやく慣れたところだったので…。ただ、必ずどこかで役に立つ経験をしたので、これからもこの経験を活かしていきたいと思います。とても楽しく体験させていただいた、第3回会合での陶芸体験作品をいただき、記念にもなりましたが、第17回の産政塾が今日で終わることも実感しました。

【おわりに】

小田桐塾長をはじめ、事務局の松井さん、Cグループのみなさん、そして塾生のみなさんには、とても貴重な経験や体験など、本当に多くのことを学ばせていただくとともに、大変お世話になりました。この場を借りましてお礼申し上げます。ありがとうございました。そして、この出会いを、つながりを大切にしていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

【これから私】

こうしてみると大袈裟な言い方ですが、産政塾の経験がなければ、ここに記したような、気づかなかったことがたくさんありました。普段の生活や仕事の中で、当たり前のように自然に過ぎ去っていくようなことも、何かのきっかけで、それが新鮮に感じたり、おかしいなと思ったり、また、いろんな人に支えていただいている、と教えていただいたような気がします。いつの間にか、知らず知らずに自らつくってしまっている「殻」。他を寄せ付けなかったり、失敗を恐れその一步を踏み出さなかったり…。

これからの私は、この産政塾で学んだことを活かして、自分の中に殻ができた気づくよう、また、気づいたときに、打ち破ることのできる自分でいたいと思います。この産政塾では、少なくとも6回の「きづき」の機会を与えていただいたことに、今一度感謝いたします。ありがとうございました。

[Illegible text]

[Illegible text]

[Illegible text]

[Illegible text]

[Illegible text]

[Illegible text]

産政塾を振り返って



名古屋鉄道労働組合

石田保志

<プロフィール>

いしだ やすし (41歳)

- 1965年9月 名古屋市で生まれる
- 1984年4月 名古屋鉄道株式会社入社・名古屋駅勤務
- 2002年9月 名古屋鉄道労働組合専従
現在に至る

<家族> 妻、長女 (13歳)、次女 (11歳)、
長男 (7歳)

<趣味> ゴルフ、スポーツ観戦

はじめに

先ずもつて、第17期産政塾に参加させて頂きありがとうございました。

閉塾式が終わって2ヶ月が経つ。それ以降、毎週毎週休みになると、「塾誌を書かなければ…」と
思いながら、先送りをしていた(苦手な事をやりたく無かっただけである)。ついに、松井さんより
塾誌の締め切りのメールがきた。その時点では、一行も書いてない状態であり、思わず松井さんに何
とか締め切りを延ばしてもらえる様にメールを返信してしまった。このまま状態では11月中旬にある
第8回産政塾(懇親会)に顔を出せなくなる事と、塾誌の発行が遅れると第17期塾生に迷惑が掛かる
と思ひパソコンに向かった。文才の無い自分が書けるのか不安ではあるが、自分なりに産政塾を振り
返つて見たいと思う。

きっかけ

私が産政塾に参加する事になったきっかけは、自ら進んで参加したわけでは無く、突然、上司から
参加してほしいと言われ、断る事もできず参加する事になった。

入社して22年、組合役員になって4年になるが、職場でも組合役員になってからも、それなりに経
験を積み重要な役割を任せられ自分なりに仕事をしてきた。しかし、まだまだ勉強不足な所や、職場で
の馴れ合い、居心地の良さに満足して「チャレンジ精神」を無くしてしまった自分があつた。

産政塾の案内を見て、これに参加すれば、異業種の人達との交流で色々な考え方に触れたり、物事

を違った角度で見る事により自分の視野が広がるのでは無いかと思ひ積極的に参加する事にした。

第1回「開塾式」

不安と期待、そして、自己紹介があると聞いていたので緊張して開塾式に臨んだ。参加している方の顔ぶれを見ると、自分より若い人が多く、自分が参加して本当に半年間、みんなの行動について行けるのかと益々不安を感じてしまった。そんな思いの中、事務局説明、塾長の挨拶、緊張した自己紹介、そして、グループごととに別れての企画と、時間が経つにつれて不安が消えていった。夜の懇親会の時には、すっかり不安もとれ、参加するからには前向きに何でも取り組もうと思った。

第2回「漫才の実践を通しユーモア・笑いを学ぶ」

最初、企画書を読んだとき、すごく興味が湧いた。私の会社でも心の病で休んでいる人が増えているからである。笑いとメンタルヘルスが、どう結び付き影響を与えるのか、また主な原因は職場の間関係にあると言う所にも興味が湧き、大げさかもしれないが自分で何かできる事が見つければと思つたからである。

金城学院大学の森下教授から講演はとても面白く、笑いの効用について具体的なエピソードを交えながら話があり、最近医学的に笑いの効用が証明され「ユーモア療法」「笑い療法」が心身医学に取り入れられている事に大変驚かされた。職場の中で笑いのある明るい雰囲気を作る事により、コミュ

ニケーションが生まれ良い人間関係となり、心の病で休む人が減るのは無いかと思った。

体験学習では、「自由にコンビになって漫才の実演をして頂きます」と言われた瞬間、やりたくないと思ってしまった。何故かと言うと、人前に立つと緊張してしまい、一番苦手な事だからである。しかし、産政塾のテーマである「殻を破る」を思いだし、苦手な事に挑戦しなければいけないと思い、積極的に挑戦した。実際は、緊張して、何をどうやったか殆ど覚えていないが、自分なりに楽しくやれた事が良かった。

第3回 「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」

泊まりで、みんなと懇親をより一層深められる事と、鹿児島というなかなか行く事のできない場所であったので楽しみであった。数年前に知覧平和会館には訪れた事はあったが、観光であったので、あまり印象が残っていない。今回はテーマを持つての見学となるので、戦争を知らない自分、平和が当たり前だと思っっている自分に「命の尊さ」「平和の大切さ」を学ぶ良いチャンスだと思っただ。

見学をする前に、特攻部隊に所属していた方からの話を聞く場があり、わずか20歳前後の青年達が特攻隊員として、恐怖心と戦い、どんな気持ちで空に飛び立ったかなどの生々しい話を聞いて、「命の尊さ」「平和の大切さ」を伝えて行かなければならないと思っただ。その後、知覧平和会館を見学し、若者たちの家族への思い、国への思いを綴った遺書を読んで、今までに無い感情が湧いてしまった。

翌日は、自衛隊の鹿屋航空基地の見学であった。昨今、北朝鮮によるミサイル発射、核実験など私達の生活を脅かす出来事があったが、自衛隊員の方から自衛隊の役割と責任について説明を受け、改め

て重要な役割を担っている事を認識できた。

現在私達は、平和が当たり前であると思つて生きているが、当たり前だからこそ平和の重要性を自覚して、子供達にも平和の重要性について伝えて行かなければならないと感じた。

第4回「日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ」

組合行事があり、参加する事ができなかった。この企画が陶芸体験と聞いて、何かを作るという事が好きな自分としてはとても残念であった。閉塾式にみなさんの作品を見て、「自分専用のコップを作り美味しいビールを飲みたい」と思つてしまった。本当、残念…。

第5回「挑戦者の横顔〜見えない気流に打ち勝つ翼を求めて〜」

組合の会議があつたため、途中参加となつたが、民間ノウハウを活かした取り組みや、民間ならでの発想を持つてチャレンジしているなど、注目されている中の空港を開港させた話を聞き、並々ならぬ努力があつたのだろうと思つた。また、目標を達成した時の喜び、それを乗り越えた時の自信が更なる挑戦に繋がるという話は、自分は職場での馴れ合い、居心地の良さに満足して、自分に一番足りないものではないかと思つてしまった。

第6回 「豊かな生活とは、心豊かなライフスタイルを創造・体験しよう」

我がEグループの企画である。開塾式にテーマを決め、それ以降、何回かEグループで集まり話した。しかし、企画の話は30分と続かず、日頃の仕事の話や趣味の話で盛り上がってしまった。自分としては色々な話が聞けてとても良い時間であった（皆さんもそう思っていたのでは……）。しかし、松井さんから「もう時間がない。早く内容を決めないと」と言われてからは、手前味噌かもしれないがEグループ団結力と行動力には驚きました。あつという間に誰が何を留意して、何を担当するまで、決まってしまった。後は、いつもの様に一杯飲んで楽しく……。（ただ飲むのが好きなメンバーだったのか？）当日、泊まりのキャンプにみんなが本当に集まってくれるのか心配であった。集合時間近くになると次々とみんなが食材を片手に集まって来たので一安心した。グループ毎に究極カレーと一品を創意工夫して真剣に創っている姿を見て、ここまで手間隙を掛けるのかと感心するばかりでした。料理を食べさせて頂きましたが、グループ毎に個性があり美味しかったです。夜にはキャンプファイヤー・花火などをして盛り上がり、開放的な空間で、夜遅くまで飲み、塾生の仲間と交流が図れた事が自分の中では一番良かった。皆さんご協力有り難うございました！

第7回 「閉塾式」

1月から始まった産政塾が、あつという間に閉塾式となってしまった。色々な企画を体験して、「殻」とは何だろうと考えながらの半年間であった。みなさんと意見交換して、グループ毎の発表を

聞いていると、それぞれが「殻」に対する考え方、思いがあり、この半年間、皆が目標を持って取り組んでいた事を改めて実感した。

最後に

今回、産政塾に参加して、「殻の外へ踏み出そう」という大きなテーマの中、企画に参加して、自分が殻の外へ踏み出せたかと言うと、正直いってできていないと思う。しかし、各グループの企画に参加して、普段では経験できない事を現地まで行って体験する事ができ、必ず自分にとって役に立つのではないかと思った。今後、この経験を活かし、自分の殻を破る答えを見出すチャンスがあると思う。そのためには、何事にも受け身の姿勢ではなく、自ら進んで行動して「チャレンジ精神」を忘れない事が大切だと思う。また、産政塾で、たくさんの人と知り合い、色々な考え方に触れた事により、視野が広くなり考え方も少し変わったような気がする。今後も、人との出会い、人との関わりを大切にしていきたい。

最後になりましたが、塾長はじめ事務局の松井さん、そして第17期塾生のみなさんに、貴重な体験をさせて頂き、大変お世話になった事を感謝しています。ありがとうございました。

産政塾を通じて気付いた自分の殻



丸栄労働組合

伊藤 紘子

<プロフィール>

いとう ひろこ

- 1977年 三重県四日市市生まれ
- 2000年 ㈱丸栄入社
- 2002年 丸栄労働組合 名古屋支部執行委員
- 2005年 丸栄共済会出向
- 2006年 丸栄労働組合 本部執行委員
現在に至る

<趣味> 沖縄好き・ドラゴンズ応援

各グループで、テーマを決め企画を考える：産政塾でお世話になった数ヶ月は「考えて、実際に行動に移す」という大変充実した日々になりました。私たちのグループは「伝統工芸における技能伝承」をテーマに取り組みました。テーマ設定の所以は企業の中核を担っている団塊世代の労働者が一気に定年を迎えることによりノウハウ・体験等の技能の流出及び消滅が危惧される、いわゆる「2010年問題」を課題と考えての事です。産政塾メンバーは製造業出身の方が比較的多く逼迫した課題と捉えられたのではないのでしょうか。私は小売業出身ですので仕事における「技能」というと少しニュアンスが違うのかもしれませんが、可視化されていない独自の「my情報」を部下・後輩に伝える必要性と難しさは日頃痛感している所であり、何百年も絶やす事なく伝承し続ける伝統工芸にヒントがあるのではないかと思つた事と日本古来の美しくも厳しい師弟関係を垣間見たいという野次馬根性から強く興味を持ちました。

水谷リーダーの下、何度も打合せを行い「技能伝承のノウハウをお聞きするのに最も相応しい場所講師の方をどうするか」を考えました。2回目会合、3回目会合の内容が素晴らしかっただけにそのプレッシャーは計り知れないものがありました。もともと負けん気の強いB班です。(第6回会合のカレー対決判定でも大人げない行動が窺えました。)プレッシャーを力に変えご多忙のK氏参加により初めて全員揃った打ち合わせにて「伝統工芸といえば京都、その地にある伝統工芸専門学校の先生と生徒さんをお訪ねしよう。また、参加メンバーにも伝統工芸を体験してもらおう。」と決まり、無事当日を迎えることができました。

京都伝統工芸専門学校・工藤先生のご講義はわかり易くおもしろいお話で生徒さんを思う熱い気持

ちがこちらまで伝わってきました。先生になつての一番のご苦労は、言葉の曖昧さを認識しながらも、ご自分の技術を言葉に変えて指導しなければならぬ事ださうです。先生は実際の授業でも生徒に自分の気持ち伝わる様に例え話・擬音などを使い工夫されているさうです。また、技術を見本として披露する時も、最高の技能を朝飯前という風に見せなければならぬ、生徒を圧倒すれば、黙つても生徒は付いてくるのだとも教えて下さいました。特に印象に残っているのは伝え手も必死で伝えないと相手に伝わらないというお言葉です。指導者がどれだけ強い思いを持つているかが生徒にも伝わるのださうです。話し手の真剣味が伝わつて初めて聞き手の心に響くのでしょう。私事になつてしまひ恐縮ですが、昨年春、うつ病で体調を崩し休職して以来、職場会議を始め人前に立つと異常な緊張が起き、さらに緊張が緊張を呼び、冷静にご意見を承ることが出来ない情けない組合役員になつてしまつたように思います。情報を伝える事も意見をお聞きする事も苦手になつてしまつた私は工藤先生のご講義を拝聴しながら、「真剣に伝えたい」という強い思い、そして、自分が伝えたいことについての深い知識を習得しておく事、心がけひとつで、もしかしたら何とかなるのかもしれないと一縷の光が差した思いがした事を覚えています。

また、京都大学の塩瀬先生による「師匠と弟子の関係を科学する」では、伝統的な師弟制度において一見非効率に見える「慣習」(例えば、「同じ釜の飯を食う」という伝達方法が、実は味加減、熱い・ぬるい等の感覚・価値観を共有でき、師匠と弟子の形容詞・副詞のニュアンスの差を埋めて行くことに目的がある等)の大切さと、その叡智を科学的に説明する必要性をご講義頂きました。効率だけでは説明できない先人の知恵を科学的に見つめることが出来、新たな視点を与えて下さいました。熟

練者ももっている経験やノウハウなど容易には伝えるのが難しい知識「暗黙知」をマニュアルやデータ化された「形式知」に変換していくことで、多くの人に技術を伝える事が出来る。また、先の例の様に技術ではない慣習がとても重要な意味を持つ場合もあり、どのような慣習が技術の伝承に必要なのかを明らかにする「伝承の科学」を確立することも大事だと教わりました。

人が流出すれば、知識もノウハウも流出し、企業はまさに「人財」を失ってしまいます。技術を伝承し、企業が発展していくためには、多くの部下に技能を引き継ぐマニュアル化された「形式知」を整理すること、マニュアル化出来ない個人のコツや経験などを如何に後継者に伝え活かしていくかがポイントになるのではないのでしょうか。どんなにマニュアル化しても、結局は人と人でしか伝承できない事があるということです。まさに「企業は人なり」を痛感しました。

再々、自分の話になつて恐縮ですが、この度、結婚しました。経験された方は皆さん同じ様な苦労をされたかもしれませんが、結婚するにあたって親の考えていた事と自分の考えていた事に木曾川の川幅レベルの隔たりがあつた時はショックでした。また、この隔たりが名古屋城のお堀の如く、全然埋まらない。特に気をつけなといけなひのは形容詞です。「早めに」、「簡単に」等はお互いの尺度が違う事が間々あります。「早めに」と言われて、1ヶ月前に産政塾誌を完成させた人もいるかも知れませんが、私の様に締め切り当日に初めて重い腰を上げて「早め」に取り掛かつたと主張する者もいる事でしょう。また、「簡単に」と言つたから全て省略したら、相手は一般的よりも少し劣る程度と考へていたりします。また、「普通」という台詞も恐ろしいです。各自の「普通・一般」を持つていて、その度合いが一人一人が全く違うのにも関わらず「私の普通」が一般的(平均)だと思ひ込ん

で「普通そんな事しないよね」とか、「あの人、ちょっと普通じゃないよね」とか「普通だったからこうするよね」とか決めてかかります。自分の思い込みを「常識の尺度」として相手と話すと思わぬ誤解や失敗を招く可能性もあるのです。30年近く衣食住を共にした親とこんなにも感覚が違ったのかと愕然としましたが、他人であればなおさらです。仕事現場において世代差や男女差もあり、少しの誤解が大きな事故やミスに繋がる緊張感の中、それでも伝えていかなければならないという事は何て難儀な事なのでしょう。私は接客業ですから他人とコミュニケーションをとることは得意だと自負しておりましたが、とんでもない勘違いだったのかもしれない。相手と正確な双方向のコミュニケーションをとる為には曖昧な表現や独りよがりな表現を避け、相手に伝わっているかを確認しながら進めなければならぬのです。「相手に正確に思いを伝える」という作業はとても難しい」と認識したあの日から組合発刊のニュースや報告書などを作成する際は読む人、聞く人の事を思い遣りながら表現するよう心がけています。成果はまだまだ発展途上ですが、(この稚拙な文章でバれていきますよね) プライベートでは育った環境の違う夫との新生活に活かし、相手はそもそも考え方が違うのだという認識の下、今のところ喧嘩も最小限に食い止めているつもりです。

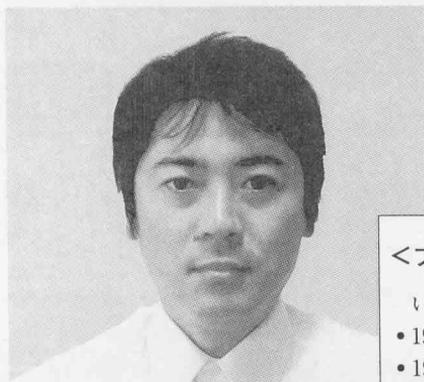
産政塾で学んだ間、多くのコミュニケーションを大勢の方と取りました。職種も性別も違う、まだ出会って数日というメンバー達と漫才をしたり、ノミニケーションに行ったり、打ち合わせで真剣に意見をぶついたりする間に少しはコミュニケーションのコツがわかった気がします。そのコツとは「自分の常識を捨て、相手を理解しよう」と努力しながら誠意をもって会話する事」だったのでないかと思えます。産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」ですが、私の「殻」とは「自分の常識」・

「思い込み」でした。「絶対そうに決まっている」とか、「絶対無理だ、出来ない」とか自分で決め付けて殻を形成してしまっていた事に気付きました。自分の殻の外界は様々な意見や考え方があるのに、それを受入れることはおろか、違いを認めることさえも以前は出来なかつたように思います。

産政塾の同期メンバーの皆さんは有能な方ばかりなのにも関わらず、気さくで肩の力が程よく抜け、話していても相手を思い遣りながら会話ができる素晴らしい方々でした。嘗ての私はダーウィンの進化論よろしく人生はずっと進化していくのだと思いついていました。精神的な余裕・ゆとりを持つ事、リラククスして生きる生き方、人生の楽しみ方、を会合に取り組む皆さんの姿勢を拝見する中で教わりました。私の常識なんて、たかが30年位の経験で培われたものです。産政塾とメンバーの皆さんのお陰で殻に少しヒビが入りました。私がこれからパカッと殻を破ってリニューアルする日まで、まだもう少し修行が必要ではありますが、せつかく平均寿命も延びました。ワークライフバランスを大切にしている方も生まれてきました。私のこれからの人生は色々な道が開けている様な気がします。

「リニューアル後の人生をより意義ある充実したものに出来る、するぞ！」と前向きに一步一步進んで行くことをお世話になりました皆様に誓言し、文章を締めくくりたいと思います。

新たな刺激が自分を変える



トヨタ車体労働組合

井戸田 章 弘

<プロフィール>

- いどた あきひろ (40歳)
- 1966年10月 岡崎市生れ
 - 1985年4月 トヨタ車体(株)入社
 - 1986年4月 工機部 配属
 - 2004年9月 トヨタ車体労働組合専従執行委員
現在に至る

<趣味> スキー、ドライブ

はじめに

今考えてみれば産政塾に参加していなかったら自分が殻を被っていることに気が付かなかつただろう。また、どんなに辛い時も笑顔を続けたいと人は近づかないことや、コミュニケーションを図り信頼関係の元で指示が有効であり、人に指示をしながら意見をもらうなども産政塾の企画に参加してメンバーと語らなければ気が付かなかつた。この産政塾は何かを教えてくれるわけでもなく、自らが何かを自分の中に取り入れるセミナーかと閉塾式を終えて感じている。まだすべてを理解したわけではなく「何か」がまだ感じ取れていないが、その何かは今後自分自身で、長い時間かかるかもしれない感じ取つていこうと思つている。

自分が産政塾の参加に至つた経緯は、ただ単に順番だと今でも思つている。その当時は新しい仕事に就いたばかりで右往左往している中なので断りを入れていた。ところがそんなに仕事に集中せず、気晴らしのつもりで行つて来たらと笑顔で声をかけられた。当然このくそ忙しいのに行けるかと思つていたが、笑顔で語りかけてくるとさすがに断りきれず参加する運びとなつた。そのときは笑顔に負けたと思つた。

何はともあれ参加することになつたが、産政塾が何で、どんなことをするか一切理解せず、また、開校式に「殻の外へ踏み出そう」のテーマ案を持ち寄ることにも、自分は別に殻に包まれていないのと、心の中にモヤモヤとする思いが立ちこめる日々が続いた。

開校塾当日、いまだ何も知らない状態で参加し、自己紹介を経て見知らぬ6人が集まり「殻の外へ

踏み出そう」のテーマで論議が始まった。はじめは手探りの状態だったが、論議していくうちにだんだん白熱し、時間の経つのも忘れるくらいになった。まったくと言って良いくらい利害関係の無い6人でのディスカッションがこれほどまでに素直に本音で論議できるとは思ってもいなかった。十分すぎるほどの手ごたえで開校式は終了した。

自グループの企画を論議

京都工芸会館を訪ね、『日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ』

我がグループのテーマの論議内容だが、技能伝承が殻を踏み出すことと繋がるかはともかく、手探りの状態で後世に今あるものを伝えることを主なテーマに置き、現代はデジタルが横行しているが、アナログとか技能伝承（匠の技）口では言い表せないもの、自然などをいかに継承することが対象になった。技能伝承は大昔から受け伝わっている日本伝統文化を、宮大工から学ぶこととか、自然からは「ロハス (Lifestyle of health and sustainability)」を取り上げ、熊野古道の保全を学ぶなど意見が膨らみまじめ真剣に論議が続いた。メンバーで都合を付け合い何度も懇親会を兼ねて論議を続け、最終的には技能伝承を教育として教えている京都伝統工芸専門学校の門を叩き、ご指導をいただくことになった。

京都伝統工芸専門学校は現代の名工、日本を代表する匠が一流の技を授ける専門学校で、その中の陶芸講師の工藤良健教授に我々のテーマである技能伝承について講演をいただいた。技能伝承は形

式・知識だけでは伝えることはできない。言葉も曖昧で伝わらないことが多く、人から人への阿吽（あうん）の呼吸は同じ屋根の下で寝食などを共にして細かなことを伝承することが重要であり、そこには教える側と学ぶ側の情熱があつてこそ実現する。また、匠の講師は基本を満足行くまで何度も繰り返し行なわせることや、物づくりはどれだけ周りに気を使うか、細部まで気を使えるかを大切に教えていることを知り、「ものづくりは、人づくり」であると共に「人づくりの大切さ」を改めて実感し、技能伝承と物作りの原点が少しかつた気がした。

更にここでは「つくる」の技術を伸ばす・高めることは「実習」を重視しているところから、参加者にもあるテーマを持ち自ら考え苦労しながら、陶芸づくりを行なった。作品はどれも力作だったが、何よりも作っている時の童心に戻った顔が何よりも輝いていた。

他グループの企画に参加

他グループのいろいろな企画にそれぞれ刺激を受けたが、知覧と鹿屋航空自衛隊を訪ね『命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ』は衝撃だった。戦争についてのテーマはどんな時も否定的で、戦争は歴史上で不の遺産だと思つている。また、多くの方が命を落とし、遺族の方を思うと触れてはいけない領域だと思つており、心の中はモヤモヤした気持ちではあつたが知覧の地を訪ねた。



ラーメンどんぶりを作つたつもりが…

自分の知識の中ではお国のために命を投げ出すことは当時の日本では絶対的なことだと認識していたが、知覧町の平和記念館での説明の中で、当時まだ若い青年が特攻隊として片道の燃料のみで戦場に向うその夜の寝床は、一晚泣き続いたと見られる涙で濡れていたことや、何通も展示してある身内、多くはお子さんに残した手紙は自分がいなくなったあとのことをゆだねる内容とか、感謝の内容などを読み続けると当時も今も同じで絶対的では無く言葉に出せなかつたと感じ、強烈な衝撃が体中に響き渡った。そして記念館の写真・資料などを一通り閲覧すると、傷心すると共に決して同じ過ちを繰り返してはいけないと痛感した。また、特攻部隊であつた外園徹さんから講演をいただき活字では表せない、わずか二十歳前後の青年達が恐怖心を押し込め、並々ならぬ思いを持って上空に飛び立っていったその思いを当時の経験から語って頂き、外園徹さんのように言い伝えることの大切さを身にしみた。そして今まで間違つた認識に気が付き、触れてはいけないことでなく触れ方を間違えないように亡くなった隊員の方や残された家族の思いに触れ、命の尊さを知り、日本が平和であることを感謝して平和を永久に継続する大切さを知つた。

次の日は知覧で傷心した心を引きずりながら鹿屋航空基地を訪ねた。自衛隊の航空機を間近で見ると、戦争当時の戦闘機と照らし合わせてしまう。ただ、現代国家は風通しが良く何でも話し合い、結論を出す日本なので自衛隊は防衛の観点で世界の平和の安定に向け、昼夜隔たり無く災害活動や救助活動の任務に務めてくれているのだと感謝している。絶対無いが、自衛隊も一歩間違えると驚異的な集団になる。そうならないためにも、リーダーは決して道を踏み外してはならない。決断はしなければいけないが、いかなる時も周りの人の意見に耳を傾けなくてははいけない。今回の企画でいろいろな

思考、思想が自分の中で変化した。

最後に

楽しいことは時間が早く進むことはいつものことだが、産政塾もすぐに閉塾式を迎えることになった。「殻の外に踏みだそう」のテーマを意識して、我が・他グループの企画に参加してみると、殻と言われるものは人それぞれ少しずつ違うことが少しわかった気がする。また、冒頭でも触れたが殻を被っていることにも気が付かない人もいると思う。殻を破る方法はいろいろあると思うが、殻に気がつかなければ、長い年月で自分自身の成長と周囲の協力よって知らないうちに何事も無く自然と破れていく場合と、殻を意識して短時間で踏み出そうと、その時々にもがき苦しむ場合など、いろいろあると思うが、殻を意識することは人生にとって大事なことだと認識した。今後殻はいろいろなものに変化していくと思うが、現段階では『壁』にあたるものではないかと思う。そしてその殻を踏み出すキーワードは『チャレンジ』だと感じた。この先いろんな殻に囲まれると思うが、現在の殻も含め様々な方法で踏み出していかなくてはならない。そのためにはチャレンジをして様々な経験を積み重ね、実践していくことを報告し、産政塾を終了する。

最後にこの産政塾に笑顔で送り出した職場の方や、いろいろなことにお付き合いをいただいたBグループの皆さん、第17期産政塾のメンバの皆さん、事務局の皆さん貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございます。そして、今後ともよろしくお願ひします。

格好よいおっさん



アイシン精機株式会社
岩田 将弘

<プロフィール>

- いわた まさひろ (29歳)
- 1977年6月4日 西尾市生まれ
 - 2001年4月 アイシン精機入社
 - 2001年7月 人材・安全衛生部
リクルートG配属 (2年半)
 - 2004年1月 人材企画G
就業管理Tへ異動 (2年半)
 - 2006年7月 賃金Tへ移動

△プロローグ▽

入社して6年目に入った。特に人事部では若手のローテーションを積極的に行っているためか、採用を2年半、労務管理（時間管理をメイン）を2年半、そして現在は賃金関連の業務を行っている。特に採用と労務管理の5年間はそれぞれの業務で時代の変換点を迎えており、新卒・中途採用の急拡大や新サブロク協定などバタバタと走り回るように仕事をしていた。

一生懸命仕事をしてきたのであるが、仕事しかしてこなかったのである。あとでお話するが、これが私の殻を作ってしまったのかもしれない。そんな私に殻を認識できるチャンスを与えてくれた産政塾の仲間と、行っておいでと言ってくれた上司、それを認めてくれた同僚のみなさんに感謝、感謝である。

△きっかけ▽

それは上司のこんな一言から始まった。

「岩田君、産政塾に行っておいで。今まで忙しいかったし、ちよつと視点を変えることも大事だよ」
当時の私には?????頭の上でクエッションマークがいくつ出ても足りなかった。取りあえず上司からの指示であったため、その段階で承知の旨を上司には伝えた。産政塾は同じ人事の中にも卒業生が何人もおり、そのメンバーからは「楽しい」ということしか聞いていなかったのである。

確かに今までは忙しく、最近になってやっと自分のペースで仕事ができるようになっていた。そのため多少の余裕が出来ていたのは事実であるが、業務命令で「楽しい」ところ、それも上司からそんな言葉を言われて行ってこいと言われても「？」としか思えなかったのである。

取りあえず、上司の指示のため、その「楽しい」ところに参加することになったわけだが、まわりの同僚に伝えると「いいなあ」と言われるばかりである。本当に自分が「楽しいところ」に行ってもいいのだろうか？

へいよいよ産政塾のはじまり▽

初日、グループに分けられ各グループで企画を検討するという作業、各グループは順調に進んでいるようだ。私も2つ素案を持ってきたのでそれを小出しにしながら議論をし、企画を進めていった。しかし発表を行っているうちに我がグループだけは事務局の松井さんからダメ出しされてしまった。なんとなく不安を感じながら、でもとつても人のいいメンバーに恵まれたことに感謝しながら帰宅したことを覚えていた。

あつという間に時間が過ぎて第1回のグループの勉強会が開催された。

結論から言えば、「楽しかった」である。「笑い」をテーマとし、大学の教授からの講義の他に、漫才を自分たちで演じて「笑い」を体感するという企画であった。主催者のグループの努力も大変なものだったであろうが、事前にほとんど会ったことが無いメンバーが、それぞれの個性を発揮し、ス

ムーズに会が進行していく様はなんとも小気味がよくテンポが感じられた。

正直、産政塾に集まったメンバーの能力の高さに驚きを感じた一日であった。

その後、我がグループも小生の案を基に企画を進めていき、「殻を破る」に多分もつとも忠実な企画を作り上げたという自負があった。

しかしながら6月の初旬頃からであろうか、自分たちの企画案によくわからない不安を覚え始めた。しかもそれは、毎回各グループの企画を体験して「楽しむ」たびに大きくなるものであった。

その後も着々と我がグループの企画を詰めていったのだが、どうしてもその不安を振り払えなかった。何かが欠けているのではないか、そんな思いを抱え込んでしまったのである。結果的には企画に欠けているものがあつたのではなく、小生に欠けているものがあつた、いや殻があつたのである。なぜならば、実際に我がグループ主催の企画には、業務の都合で携われなかつたため、後日談で聞くより他はないが、セントレアの尾頭部長のすばらしい話が聞けたこと、またセントレアの担当者からは予想外の意見などが飛び出し有意義だったとみなさんから感想をもらっているからである。企画としては、それなりのものができていたと思つている。それなのに何故不安をぬぐいきれなかつたのだらうか？答えは案外すぐに別のグループの企画で発見できたのである。

△花火大会にて▽

実は小生の「欠けているもの、殻」は最後の勉強会、あの「キャンプ」でやっとわかつたのである。

もつと正確に言えば、花火大会、それもいい大人、というか敬意を含めて呼ばせていただければ、「おっさん達の花火大会」で発見できたのである。

30歳を大きく上回る大人が、小生を含めてあんなに花火ではしゃげること、心の底から笑えることはそんなには無いのではないか。産政塾と我々当事者の保身のため、読み手である貴殿へ何があつたかを伝えるのは差し控えさしていただが、当時を思い出しながらこの原稿を書いているため、小生の口元は相当ゆるんでいるに違いない。

あの花火大会、なぜ小生の殻に気付かせてくれたのかを振り考えてみると、私より10歳以上年上の先輩方が、我々後輩が見ている前であんなに無茶苦茶に一生懸命楽しんで、3時、4時まで語り合いつつながら、疲れた顔ひとつ見せずに翌日も朝早くから小気味よいテンポで朝食の用意や片付けをしている姿が強烈に印象に残ったからだと思われる。

オンもオフも「普通」。私の普通は、会社で行っている考え方・対応が普通になっており、私の思考回路は常にそんな形で動いていた。しかし「おっさん達」は違ったのである。彼らは周りの状況に合わせてまじめにやるときはとことんまじめに、但し楽しむときは本当におもいきり楽しんでるように見えた。そして自分たちだけではなく、その周りの人にも十分な配慮をしながら一緒に楽しませようとしており、彼らの人としての魅力を存分に発揮していたのである。

それに引き換え私はどうであつただろうか。実は以前にこんなことがあつたのである。

ある日、女性からの電話で「仕事の相談」を受けた。私は業務で行うように「なぜ?」「そもそも、それって……」などまともに返してしまった。結果、彼女は泣きながら電話を切ることになってしまつ

たのだ。その頃の私は真剣に彼女の相談に向かいあったのになぜ泣かれて、電話を切られなければならぬのか理解できなかつた。それにその議論も「言い負かした」というものではなかつたし、冷静に今考えてもその問題に対して間違つたことを言っているとは思わなかつた。

いま小生の女性への対応を述べたが、「わかっているいなねえ」と思つた貴殿はきつと女性の心を驚かす、彼女が「仕事の相談」に乗つて欲しかつたのではなかつたのである。本当の意味で彼女への十分な配慮があればそれに気がつきたはずなのに残念ながらその頃の私には気付かなかつたのである。

△自分を見つめなおす▽

何が、私の殻であつたか。それは、いつしか頭の切り替えができなくなつていたことではないだろうか。前述しているが、入社してずっとバタバタしてきた。一生懸命仕事に向き合つてきた。少しは自信もつてきた。しかし、いつの間にか頭の切り替えが下手になつていたのである。そのことに気がついて、実際に私の周りを見てみると産政塾の仲間を含めてステキだと思ふ諸先輩方は状況に合わせて、適確な発言をするだけでなく、しつかりと遊び心を持っており、仕事も遊びもとても充実しているように見えた。

諸先輩方は頭と行動の切り替えがうまく、メリハリがしつかりついているのである。

殻なんてすぐには破れるなんて思つていない。でもこの産政塾に入り、わずかな期間であつたにも

関わらず、自分の人生を豊かにしてくれるヒントに気付けたのだからそのチャンスを活かして過ごしていきたい。そのためにも仕事は今以上に情熱を注ぎ、今以上に遊びに夢中になれるように、少しずつ自分の殻を破り、メリハリのある人生を歩んでいきたいと思う。そして、いつか魅力ある格好いい「おっさん」になれるように修行を積んでいきたい。

ということ、今日は金曜日ですので、メリハリをつけるためにも産政塾の松井さんにこれを提出したあとは名古屋の街に繰り出し、魅力ある格好いい「おっさん」になるための修行を積んでくることにします。

追伸 以前泣かせてしまった女性はもうすぐ私の妻になります。

産政塾に参加して



東邦ガス労働組合
大澤 秀 樹

<プロフィール>

- おおさわ ひでき (30歳)
- 1976年2月 愛知県名古屋生まれ
 - 1998年 東邦ガス(株)入社
 - 2005年 東邦ガス労働組合執行委員
現在に至る

1、はじめに

「殻の外へ飛び出そう」をテーマとする産政塾。参加することが決まった時点では、正直、よくある研修会の一つ程度に考えていた。与えられたテーマに沿って、グループディスカッションをし、発表をするといったことの繰り返しと半ば決め付けていたところもあった。

しかし、参加してその考えは一変した。この産政塾は、一般の研修会とは全く異なり、「殻を破る」という目的達成に向けては、「何をやっても自由」であり、自由に楽しい反面、逆に言えば「何をなすべきか、全て自分たちで決め、実行しなければならぬ」という良い意味での厳しさもあったのではないか。

さらに、他の研修会と決定的に異なるのは、「実体験」を通じて学習する研修会であったことである。会議室の中だけで行うのではなく、何処であろうと、現地へ赴き、参加者全員で体験を共有していくことも大きな特徴であり、この研修を意義のあるものに行っていると感じている。

産政塾の全ての企画に参加することは残念ながらできなかったが、塾誌の作成にあたって、参加した企画の感想と、「殻を破る」ことについて自分なりに考えたことについて書いていきたい。

2、各企画に参加して感じたこと

(1) 開塾式

おそらく、参加していた誰もが少なからず感じていたことだと思うが、私も産政塾のイメージがあ

まり沸かない中で、何をやるのか、どんなメンバーなのか、自分はこのメンバーの中で上手くやっていくことができるのだろうかといった「一抹の不安」と、異業種の方々との新しい出会いがあり、楽しい面があるのでないかとの「若干の期待」を抱えながら参加した。

会議が始まり、自己紹介、メンバー編成、懇親会と進み、参加者の皆さんと会話をする中で、それぞれの業種の特徴や考え方など様々な話を聞くことができ、こうした異業種のメンバーとの情報交換ができるだけでも、参加する価値は十分にあると感じた。

その一方で、自分にとって「殻を破るとはどういうことなのか」について考えていたが、この時点では、何かイメーজがあるわけではなく、例えば、それほど社交的とはいえない私が、こうした研修会の中で、初対面の人も上手にコミュニケーションが図れるようになることといった程度に、漠然と考えていた。

(2) #1企画 「明るく・楽しく・元気よく、みんなで職場を明るくしよう」

これは、自分たちAグループの企画でもあり、やはり最も印象に残っていて思い入れも強いものとなっている。企画の内容は、①笑いと健康についての講演②笑いの実践であった。

なぜ、今回の企画となったかといえば、着想の原点は、二つ。一つは、近年、メンタルヘルスは企業において取り組みを進めていくべき大きな課題の一つとなっており、その主な原因は職場のコミュニケーションの希薄化であるとの調査結果もあることから、私たちは、メンタルヘルスの問題を解決するためには、職場コミュニケーションを充実することが大切と考え、そのために有効であるとされる、「ユーモア・笑い」に注目した。リーダーが職場コミュニケーションにおいて果たす役割は大きく、今後、リーダーを目指す私たちが、「ユーモア・笑い」について学ぶことは意義あることと考え

たのである。

もう一つは「塾生企画の第一弾であり、17期塾生がみんなで楽しむことができ、一体感が生まれるような企画にしたい」という、メンバーの想いであった。

笑いと健康についての講演では、金城学院大学において「社会学・ユーモア論」で、「笑い」を「真剣」に研究し、関連する著書も多く執筆されている森下伸也教授に依頼し、「笑いやユーモアの効用」について講演していただいた。笑いが健康に好影響を及ぼした具体的なエピソードや、科学的な裏づけなどを紹介していただき、教授の人柄とも相まって楽しい講演となった。教授からは、「笑いとは、お金もかからず副作用もない万能な薬であり、神様から人間だけに与えられた素晴らしいプレゼントである。その笑いを、たくさんの人に与えて欲しい。そうすると笑いは自分に戻ってくる。そんな繋がりが、笑顔の輪を広げ、明るい未来に導く」とのメッセージをいただいた。

笑いの実践では、「漫才の実演」を行った。塾生全員がコンビを結成し、みんなの前で漫才を披露した後、現役の吉本興業所属の芸人さん二人から講評を受けた。参加者の皆さんは突然自由にコンビを組めと言われ、また台本はあるものの練習時間は僅かという状況でさぞかし困惑されたことと思うが、全員が本番ではそれぞれの個性を存分に発揮し、大いにみんなを笑わせていたのには驚かされた。顔を合わせて間もないにも関わらず、長年の友達のようにボケてつつこむコンビ、パフォーマンスが妙にハマっている人、自らのキャラクターそのまま勝負する人など、一人ひとりが、真剣に笑いを考え実践していた。また、見ている側も舞台にいる人たちを応援し、温かく見守り、笑っていた。そんな姿を見た時に、17期塾生の一体感を感じ、この企画の目的の一つは、達成できたと感じた。

#4 企画 日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ

この企画では「ものづくり」について学ぶというテーマのもと、京都において陶芸（ろくろ）体験、その後京都伝統工芸館の見学と、京都伝統工芸専門学校教授の講義などを受けることができた。

私は、当初陶芸についてさほど興味もなく、当然体験したこともなかった。ところが、実際に体験すると、その面白さに感動していた。工房の方に実演をいただいたときには、土が生き物のように動き、僅かの間に形になっていった。私自身は、思い通りに形を整えることなどできるはずもなく、わずかな力の入れ具合で、形が崩れはじめ、厚みがなくなったりかと思うとすぐに遠心力でちぎれてしまふといった失敗の繰り返しであった。しかしながら、ろくろに乗せた円柱形の土に手をかけ、少しずつ、少しずつ形を作っていく過程では、他ごとは何も考えずに、ただ集中して、時間の感覚がなくなる程であった。普段、カタチあるものを作ることからは、程遠い生活を送っている私にとって今回は、新鮮な価値観、「ものづくりの楽しさ」を感じることができた。

その後、京都伝統工芸館の見学と、京都伝統工芸専門学校の教授の講話をいただいた。ここでは、真摯に作品づくりに没頭する学生と、熱意をもって指導する先生との交流が感じられた。学生も教授も職業としての技術を学び、また教えており、工芸や芸術といった言葉からは、ひらめきやセンスといったものが重視されると想像していたが、実際に学んでいることは、基本の徹底的な繰り返しであった。そこには、私がろくろ体験で感じた「楽しさ」とは別次元の感覚、ものづくりの厳しさがあつたように思う。

3、殻について考える

(1) 殻とは

「殻」とは、単純にいえば、自分自身が安心できる内側の領域と、その外側の領域とを仕切っている存在で、これまでの経験などから、意識的にまた無意識に作り上げている自分自身の限界である。その殻を破って自身の領域を広げていくことが、自分の成長となるが、一方で、殻を破ることなく、常に自分が安心できる領域に安住していると、年月とともに殻はだんだんと厚みを増していき、自身の成長を妨げていくのだろう。

また、自分の殻には3つの部分があるのではないだろうか。例えば、①自分自身の過去の失敗や経験の蓄積によって作られた部分（＝弱みと認識している部分）②一般常識や知識の蓄積によって作られた部分、そして③自分では意識（経験）していない部分という具合に。

そうだとした場合、自分自身の殻とはどのような形をしているのかと考えると、①の部分が最も厚く、②の部分が中程度、③の部分が薄いような気がしている。（過去の失敗を引きずるタイプのため。）

(2) 殻の破り方

こうした殻を破る際には、①の部分には目標と強い意志、②の部分には批判的・論理的思考力、③の部分には好奇心・冒険心といった道具（＝能力）が必要であると思う。また、殻を破る際に破りやすい部分だけに偏ると、殻の形がいびつになってしまいうことから、これらの道具をバランスよく組み合わせることも必要なのだろう…。殻を破るのはかなり困難な作業のようである。

しかし、殻を破ることは、私にとって、決して不可能なことではないと感じている。それは、産政塾への参加を通して、殻を破るうえで最も大切で基本となる「チャレンジする意識」、「変化を積極的に受け入れ、楽しむ意識」を実感することができたからである。

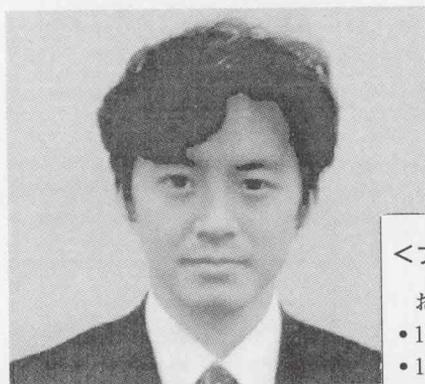
何をやるのも自由で失うものがないという環境の中で、新しいことに積極的にチャレンジし、これまで知らなかった価値観に出会ったり、自分自身の弱みを克服しようとトライすることができた。この過程の中で、自分自身の変化を楽しむという経験ができたと感じており、この経験は今後も大切にしていきたいと考えている。

4、最後に

産政塾に参加し、第17期のメンバーとの交流が図れたことは、貴重な財産となった。こうした財産を手に入れることができたのも、事務局の方々、塾生の皆様のおかげであると感謝している。せっかくの出会いを大切に、今後も一層交流を深めていきたい。

以上

産政塾を振り返って



トヨタ自動車株式会社
大橋 俊介

<プロフィール>

おおはし しゅんすけ (32歳)

- 1974年4月 東京都生まれ
- 1998年4月 トヨタ自動車株式会社入社
人材開発部配属
- 2003年1月 人事部へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男(1才)

<趣味> テニス、スキー、読書

■はじめに

今回、縁あって産政塾に参加させていただいた。半年というわずかな期間ではあったが、大変貴重な、楽しい経験であった。本稿では、産政塾の中で体験したこと、考えたことを綴ることとしたい。

■第1回企画 明るく・楽しく・元気良く、笑って職場を明るくしよう！（4月20日）

激しい競争、目まぐるしく変化する社会情勢の中で、日本人は様々なことに耐え忍び、大変な努力を積み重ねてきたのだと思う。しかし、擦り減るばかりで心身ともに疲れきっており、本来の力を発揮することが難しくなりつつあるのではないかと感じることもある。日本が、日本人が、将来に渡り活力を持続していくためには、擦り減った分だけ、充電しなくてはいけないのではないか。そういった意味で、「笑って職場を明るくする」という取り組みは、現代社会において不可欠な、本質に迫るテーマではないかと思う。

今回お越しいただいた金城大学の森下教授からは、笑いが健康増進につながることをお教えいただいた。その内容に納得したのはもちろんだが、ユーモアを交えた楽しいご講話に引き寄せられ、夢中で拝聴したことを覚えている。恐らくあの時、自分の体内でβエンドルフィンが大量に分泌されるとともに、NK細胞の活性化によりガンにかかる確率が低下したに違いない。森下教授のご講話は、単に勉強になるだけでなく、ユーモアの実践と、医療行為まで内包しているものと理解した。

その後、名刺交換をしたばかりの方とコンビを組ませていただき、漫才をすることになった。なんとか台詞を覚え、一応、形にはなったと信じているが、気恥ずかしさ一杯であった。私は、お笑い番組を見るのが好きで、最近では芸人の講評さえするのが、見るのとやるのでは大違いであった。そんな中、多くの塾生が、身振り手振り・アドリブ付きの漫才を披露していたことが印象的であった。中でも、誰よりも多くのアドリブを発し、本筋に戻れないほどであったのは、小田桐塾長だったように記憶している。初回の企画から、非常に楽しい時を過ごさせていただいた。

■第2回企画 命の尊さ・平和の重要性について学ぶ（5月17・18日）

第2回は宿泊企画。初日は鹿児島県の知覧特攻平和会館を訪れた。戦争について、一応の知識はあったが、歴史の授業を聞くのと、実際に現地に赴き、元特攻隊員の方のお話を伺うのでは、臨場感が全く異なる。知覧という町では、21世紀になった今も、戦争の悲しさが語り継がれ、誰もが命の尊さを肌で感じているように思われた。

会館には、「疾風」・「飛燕」といった特攻機のほか、隊員が特攻前に家族に宛てて綴った遺書・手紙が展示されていた。これらの多くは大変前向きな内容で、残してゆく家族に対する思いやりに溢れるものばかりであることに感銘を受けた。20才前後の若者が、祖国や家族のためと信じて、自らの命を投げ出す心境とは、いったいどんなものであろうか。あまりにも想像を絶することであり、適切な言葉が見当たらない。しかし、少なくとも言えることは、今の平和は、こうした人々の犠牲の上に

成り立っている、ということ。それだけは深く実感することができた。

2日目は、海上自衛隊鹿屋航空基地を訪問した。航空自衛隊の組織体制や任務についての解説を伺ったほか、基地内の見学をさせていただいた。中でも、哨戒機を間近（真下）で見学させていただいたことや、救難機（ヘリ）の操縦席に座らせていただいたことは、個人ではなかなか実現できないことであり、大変思い出深い。（しかし、誰よりも興奮していたのは、観光バスの運転手さんであった。これもまた、良き旅の思い出。）

自衛隊のあり方については、多くの議論がなされており、自分としても、国防について思うところがないわけではない。しかし、今回の訪問を通じ、自衛隊員の方々が使命感を持って働いている姿を垣間見て、自分の考えが浅かったように思われ、妙に反省させられた。

以上、重いテーマについて深く考えさせられた2日間であった。自分も企画チームの一員であったことから、ともあれ無事に終了したことに肩を撫で下ろした。余談だが、ビール一辺倒であった私が、鹿児島訪問以降は芋焼酎も飲むようになった。美味しく、経済的で、悪い酔いしない。思わぬ収穫であった。

■第3回企画 日本伝統工芸の技能伝承に学ぶ（6月10日）

まずは案内状を見て驚いた。日本地図の真ん中あたりに印がついているだけ。一応、都道府県の境界線が記されていたので、辛うじて京都府であることは判明したが…。こうしたところに、産政塾生

が殻を破りつつある片鱗を見たような気がしたものである。

さて、午前中は瑞光窯で陶芸体験をさせていただいた。「自分の殻を破る」というテーマの作品を、とのオーダーであったが、そう言われてもどうしようもなく、とりあえず、自宅で使えそうなビールジョッキ兼、湯呑み茶碗を作ることにした。ろくろを使うのは初めての経験であったが、少年時代から美術・工芸は得意分野であり、若干の自信はあった。しかし、自分なりに完成させた後、インストラクターの方に微修正をお願いしたところ、完成度が数段高まった。少々ショックであった。やはり、匠の技はそう易々と真似出来るものではない。

午後は、京都伝統工芸専門学校を訪問した。ここでは、若い学生の方々が木彫刻や竹工芸、蒔絵等の制作に熱心に取り組んでいる姿を拝見した。身勝手なもので、自分自身は伝統文化を継承するつもりはないにも関わらず、母国の伝統文化は未永く残って欲しいと思うもの。そうした学生諸子の姿や、彼らの見事な作品を目にして、安堵するとともに、頼もしく感じたものである。

また、京都大学大学院塩瀬様のご講話は、人材育成に携わる者として、大変参考になるものであった。とりわけ、形式知化の落とし穴（一旦形式知化してしまうと、それ以外のことが出来なくなる危険性がある）や、デジタル的伝達媒体（技の抽出↓記録↓伝達↓再生）とアナログ的伝達媒体（「師は黙して語らず」、「同じ釜の飯を食う」）の比較は、大変示唆に富むものであった。昨今、団塊世代の現役引退が進む中、技能伝承の重要性がクローズアップされているが、企業としても、こうした研究から多くを学ばなければならぬと感じた。

■第4回企画 挑戦者達の横顔 ～見えない気流に打ち勝つ翼を求めて～（6月27日）

続いての題材は、セントレアであった。言うまでもないが、同空港は、不可能とも思われる工期短縮と、大規模な事業費削減に成功したことで大変有名である。しかし、訪問前の私は、2つの誤解をしていた。1つはセントレアが成功した理由。新聞報道等を通じ、民間企業のノウハウを活かしたところそが、成功要因であると認識していた。2点目は、成功の持続可能性。開港当初は大成功をおさめたが、それは一時的な話題性と万博効果によるところが大きく、いつまでその成功を継続させることが出来るか、といったことについては、若干の疑問を抱いていた。

しかし、中部国際空港株式会社尾藤様のお話を伺うとともに、現場で働いている方の姿を実際に見ることで、それらの認識が誤りであることを知った。実際には、空港建設経験のある官と、効率化や営業のセンスを持つ民が、それぞれの長所を発揮したことが成功の要因であって、官のみ、あるいは民のみで良い空港は作れなかった、というのである。また、開港は目的ではなく、あくまでもスタートであり、これから長い期間をかけて空港を育てていくつもりであること、また、CS世界一を目指し、日々、改善努力を積み重ねていることを伺った。セントレアの今後のさらなる発展を期待したい。

■第5回企画 スローライフ・スローフードを実践し、心の豊かな生活を体験する（7月14・15日）

最後の企画は、森の中でのキャンプ。締めくくりに相応しい、打ち上げのようなイベントであった。

飯盒炊爨も、キャンプファイアーも、もはや何年ぶりのことか分からない。仕事を忘れ、童心に帰り、心から楽しませていただくことが出来た。それはきつと、私だけではなかったであろう。参加された塾生は皆、いつも以上に、心からの笑顔を見せてくれていたように思えた。普段、息をつく間もないほど忙しい日々を過ごしていると、時折、多忙な日々こそ、充実した日々であるという錯覚に陥ることがあるが、今回の企画に参加して、やはりそれは錯覚に過ぎないということに気付かされた。慌しい日常から離れ、頭を白紙にしてリラククスすることが、どれほどの癒しになるか、そして、それがどれほど大きな活力につながるかということ、改めて思い出すことが出来た。

第1回の笑いの企画に参加した時と同様、人間が本来の力を持続的に発揮するためには、擦り減った分だけ自らに癒しを与えることが必要であることを、強く実感した一泊二日であった。

■おわりに

今年の産政塾のテーマは、「殻を破る」ということであった。しかし正直なところ、「殻」とは何かも未だによく分からないし、自分に「殻」があるのか、ないのかといったことも全く分からない。また、数回のイベントに参加するだけで破れるような「殻」であれば、目標設定としては少々低いのではないか、というようにも思える。

しかし産政塾に参加させていただくことで、日常生活において関わることのない物事を見聞きし、体験することが出来た。そして、多くの個性的な塾生との出会いがあった。「殻」を破れるかどうか

は分からないが、少なくともこうした経験を積み重ねていくことで、人生は、より一層豊かな、実りあるものになると感じた。また、もし仮に「殻を破る」ことが出来るとしたら、それはこうした経験の積み重ねによつてのみ、実現することが出来るのではないかと思えた。

最後に、今回、こうした場をご提供いただいた小田桐塾長はじめ中部産政研の皆様、様々なイベントを企画してくれた同期の皆様、共に企画を行なったDチームの皆様、また、産政塾の日になると、決まって嬉しそうに会社を出て行く私を暖かく送り出してくれた職場のメンバーに、心より感謝を申し上げたい。

「殻」と「鎧」と「産政塾」



刈谷市役所

加藤 章子

<プロフィール>

- かとう あきこ
- 1968年 愛知県刈谷市生まれ
 - 1990年 刈谷市役所入所 市民部市民課配属
 - 1995年 福祉部児童援護課配属
 - 2001年 福祉健康部健康課配属
- 現在に至る

<家族> 両親・兄夫婦・兄夫婦の子2人

<趣味> 茶道・バレーボール・食べ歩き

今の私にとって「殻」とは何だろう？

覆われる事により守られ：居心地が良い、だから飛び出したくないけど、いずれは破らなければならぬもの。漠然と考えたが、やっぱり何だろう？

常識的すぎるかもしれませんが「時間を守る」という当たり前なルールを、どうも私はやぶり勝ちで、いつも期限ギリギリな行動をしていました。期限をその時（節目）までの猶予と考えてしまい、違う事に手を出してしまう。そのため、結局期限を守る事が精一杯になってしまっているのです。そんな私が殻（課題）として密かに考えたのは「時間に遅れない。ゆとりを持って動く」でした。研修中は何とかクリア出来ましたが、最後の難関は今。塾生誌の原稿提出です。殻が固いのか？柔らかいのか？分からないまま、つれづれなるままにパソコンをうつのでありました。

§1 出会いと刺激を求めて

去年の春、職場で応募研修の案内を頂き、その中に産政塾がありました。研修内容には「様々な分野に活躍する人や、同世代の異業種の仲間とともに、様々な考え方と議論を交わすなかで、切磋琢磨し自らを磨く」。

社会人になって十七年。自分が公務員ボケしていないか？すら感じとれていない私にとって、同世代の様々な分野で活躍されている方から社会人として刺激を受けて、ボケているのかいないのか？その答えを求めたく思いました。研修を申し込みさせて頂きました。さあ、いざ行かん。

§ 2 出合い（開塾式）から

この塾が官民の貴重な交流の場と考えますと、公務員が不祥事で新聞等メディアを賑わせている中、自分の動きが官の印象の窓口になって、「こんな人が」というマイナスイメージを与えてしまわないだろうか？その責任感に開塾式は、少々緊張いたしました。そう考える自分は既に無意識に公務員らしくという「殻」のような、身を守る何かを覆っていたようですが、いや「殻」というよりも、「鎧」でしょうか？どちらかという、世間を渡るという戦闘のための防具に近い物だったかもしれせん。

開塾式、一人持ち時間2分の自己紹介の中、皆が今の生活状況や研修会への思いを上手くまとめて自分をPRされ、驚いたものです。今後は、行政（法の発令者）と手を組み、社会動向に合った動きをされたい旨を言われた方もみえ、何となく先手を打たれた気分でした。

グループ討議では、自分達の班が、今後いつ頃どのような内容で研修を実施するか？の検討でした。と、幸か不幸か、自分達のグループがトップバッターになってしまいました。最初に苦労して、後のはのんびり参加しよう！を合言葉に、我が班のテーマは「笑って職場を明るくしよう！」。内容は、次の打合わせで何とかなるでしょう！かなりポジティブな打合せになりました。

個人的には自分の仕事から、健康づくりに役立てられる内容になったら！と考えて臨んだので、少々敗北感にかられたものの、笑いは健康の源であり、免疫力アップにつながる。これは結果オーライ。楽しい企画にと期待いっぱいでした。ただ、次回の研修はもう本番。タイムリミットは3ヶ後の

4月。今日初めて顔を合わせた6人が、無事に研修実施に辿り着けるのか？

データ収集に長けた方、話術に長け説得力のある方、分析力に長けた方とグループは個性派揃い。さて、どうやって笑いを起こそうか？

§ 3 「笑い」の実践に向け

笑いを職場に持ち込むためには、笑いはなぜ起こるのか？を理解し、またその効用を知り、自分から笑いを生み出せるようにならなくては…。

さて、まず何を学ぼう？誰から学ぼう？どうやって学ぼう？「？」の連続でした。そんな中、「笑い」と言えば、やはり上方演芸、「吉本」でしょう！という意見がグループ内で盛り上がり、吉本へアプローチをしました。

プロの芸人、しかも吉本興業の方が企業の学ぶ場の講師になって頂けるものなのか？日帰り前提の研修を考えると、名古屋まで出向いて頂けるのか？我がグループ一の交渉能力者が、吉本へ研修実施目的等含めて依頼を打診しました。しかし、講師料一〇万円の金額を出すやいなや即断られ、玉砕。中部、いえ日本経済を担う大企業の自負を少なからずとも持つ身として、こんな話しにならない扱いをされる事は、実際思いもしませんでした。簡単に考え過ぎていた…。

体制を整え、HPで情報を再度収集し、第二案の大阪府が関係するワッハ上方という機関に連絡をとってみました。吉本の話を見せて頂いたところ「そりゃもつともだ」と一笑されましたが、何とか

のワッハ上方さんが間に入って下さり、吉本の芸人さんと呼んでの今回の研修につながったのです。また、笑いの効用についての講演も、事務局の松井さんのおかげを持ちまして、笑いの権威、金城学院大学の森下教授にご講演をお願い出来ました。まさに犬も歩けば棒に当たる…いえ、情報活用と人脈、やる気の成果であったと思います。

§ 4 自班の企画を終え

自分達で研修を企画するにあたり、一番の収穫はメンバーとの打合わせの時間だったと思います。生活（職場）環境の違う者同士が、相手に理解を得るためにグループテーマの「笑い」を真剣に意見を出し合う事は、なかなか得がたい機会と思います。しかも、職場への不利益を考えずに、自分達が学びたい事をテーマに時間を使えるなんて、なんと贅沢で貴重な事でしょう。

人それぞれ、普段扱う情報量の違いや適性もあると思いますが、グループメンバーの中に意見の集約能力が素晴らしく早く上手な方もみえました。自分は日頃の仕事から、同じような内容の繰り返しで、情性の如く一部の脳しか使っていなかったと実感…。打合わせは、想定外の視点から飛び出す意見に、心地よい緊張感でいっぱいでした。

何はともあれ、笑いの実践の中で、各塾生の個性を引き出し、そして笑いから同期の一体感を生むことが出来たことにより、自分達の企画の成功を実感でき、胸をなでおろすとともに最高のガッツポーズの気分でした。塾長、夫婦漫才最高でした！

意識はしていなかったものの、見えない一つの殻を破ったような…。

§ 5 塾にて

「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」

自国を守ることに喜んで自分の命を差し出す人は、今の日本では皆無と思われるですが、戦時下では死への恐怖を感じながらも、お国のために死んでいくことが自分の道として教育されていました。これが教育の歪みと受け止めようか、国を守るための国民としての責務を全うしたと受け止めようか、今の時代に生きる私には判断がつかず、唯うなってしまうました。今の時代が出来るために捧げられた命。今の時代を知った時、こんな時代作りのためなら死ぬんじゃないかと…と言われたいためにも、平和は尊く、戦争が繰り返されないように、日本は被爆国として、世界をリードして平和維持に努めるべきと思いました。

命の尊さを伝える事は、命を助けること、親身に人を思いやることにつながると思います。こんなに思いに触れることができ、D班に感謝します。

「挑戦者たちの横顔　　～見えない気流に打ち勝つ翼を求めて～」

この内容は、どうやってもらい、どうやって使いきるか？と考える官と、どうやって削り、どうやって利益を生むか？の民との予算に対する考えの違いを目の当たりにし、立場上、利益を追求できませんが、削るための工夫、同じ投資の中でのサービスの向上に向け、これからの予算（税金）の有

効活用をもっと厳しく考える必要性を強く感じさせられました。

空港は、自分も何度か足を運んでいる身ですし、中部地区の世界への大きな玄関の維持のため、経営不振で閉ざされないように、自分達に出来ることを考えたいと思います。

ところで、フーのパートナーはまだ現れませんかね(笑)。

「豊かな生活とは、開放的な空間、最高級の料理を創作してみよう！」

緑の中で汗をかきながらの調理、素晴らしい体験でした。自然の中では益々人も自然に近い動きになったような。駅から道をさ迷いながら2時間歩いて会場にきた松本さん、ナイスタイミングで料理が出来た頃に到着された品川さん、料理はほとんどした事がないと言われながらも野菜を切って下さった大澤さん。あくせくせず、時間がそれぞれのペースに合わせて与えられた気がします。

出来上がったカレーライスの味は最高でした。事務局の松井さんも、お手伝いありがとうございました。共同で一つの物を完成するだけで、幸せを味わうことができました。

§6 一から

研修テーマでありました「殻を破る」、このことについて、自分の中で結局殻を何とも決めずに、いえ、殻が何か分からないまま研修に臨んでしまった気がします。もし竹に節目が出来て、次の節目まで伸びるように、殻が内と外の間という物でなく、何層も重なった物ならば、今回の研修中で、100

枚くらいある中の、2、3枚は破った気がします。要は、自分の殻を意識し、殻を破る努力はしたが「殻を破った」と公言できる自信が無いのです。

考えれば、この自信を持って立ち向かう姿勢こそが、私の殻だったかもしれません。外からの刺激を受けて彷徨わないように、迷わないように、鎧を着けられるだけ着けて意気込む自分を今回の研修に参加して感じました。ただ他人から見られて、そんな鎧は感じなかったと言われるかもしれません。殻も外から見られた殻と内側から見た殻とは、感じられ方が違いそうです。これからも殻（課題）を探し、破るといふチャレンジ精神を持ち続けたいと思います。日々是道場。

最後に、今回産政塾に参加させて頂きまして、立場、考え方の違う方と同じテーマで考え合う時間を頂き、また個性豊かな大勢の仲間と出会えました事に深く感謝申し上げます。塾長始め事務局の方々、大変お世話になりました。皆様、ありがとうございました。

PS次回お会いする時は、こんな姿もありで…。



『自分に負けるな！』



全トヨタ労働組合連合会

加藤 明人

<プロフィール>

- かとう あきひと (36歳)
- 1970年5月 愛知県豊橋市生まれ
 - 1989年4月 (株)豊田自動織機製作所入社
(現在は、(株)豊田自動織機)

<家族> 12月9日に結婚

<趣味> スポーツ観戦、ゴルフ

―はじめに―

今回参加させていただいた産政塾においては、とても貴重な「出会いと体験」をさせていただき感謝しております。この塾誌を書きながら残念に思うことが一つあります。それは、職場・上司の問題があつたにせよ全ての企画に参加できなかったこと。また、最後の閉塾式にも出られずに自分ひとりがかやの外にいた感じが否めず後悔しています。しかし、今回の体験と交流を振り返ることで自身を振り返るべくこれまでの歩み・これからの自分について正直に書いていきたいと思う。

―学生時代―

自分自身の学生時代、特に、中学から高校を振り返って見ますと、「他力本願と成り行き」に任せた生活をしていたと思います。親の躰が厳しかったおかげで、休むとか遅刻などは一切なく皆勤賞が当たり前（熱が出ていても）だと通学していました。その他の物事・行事をするにしても自分自身へのこだわり・信念がなく日々平凡に暮らしていました。ただ、部活動では陸上をしていました。特に中学生の時は成績が伸びませんでした。毎日、休みなく走っていたことを覚えています。しかし、高校に入ると練習が「量から質」に変わったためか、突然、記録が試合のたびに伸び愛知県内で一ケタに入る成績を得ることが出来ました。この時は自分自身でも中学の時の練習が生きて来たのか、成長期なのか信じられない気持ちで一杯でした。しかし、今思えば、記録自体は伸びていましたが、「更なる上を目指そうといった前向きな気持ち」を何故出さなかったのかと思います。

― 社会人 ―

高校を卒業し、社会人としてのスタートきり早18年が過ぎようとしています。入社して配属されたのは、カーエアコンの製造部組立課。ここでは、想像もしていません（自分は事務職希望）でしたが仕事がライン作業でした。しかも、一台を造るのに18秒（当時）。これには大変たまげました。その上、勤務体系が昼夜二交代、バブルの時期（カーエアコンの事業部が立ち上がりはじめ）というのもあり土曜日も出勤といった忙しさでした。何度か、やめて実家に帰ろうかとも思いましたが、豊田自動織機といった大手の企業に入れた感謝と将来の安定を考えないと気持ちがとどまりました。ここにも、「冒険をせず、安定、安心」を求めてしまう自分の性格が出てしまっているように思います。そしてもう一つ、どうしてもライン作業といった繰り返し作業がイヤでしたのでどうしたらよいか自分なりに考えました。ふと作業をしている自分の後ろを見てみるとライン外といった先輩、上司がいるのです。（見た目ですがいいなあ楽そうで：（笑））よし、「この人達みたいになればこのライン作業の苦しみから逃れられる」と思い、それからというもののライン外もしくは役職になるのだと目標を持ち嫌なことでも進んで行い日々努力をいたしました。その結果、様々な先輩方からご指導いただけたりともあり年代ではトップで班長といった大役もいただきやりがいも持ちながら働いていました。人間というのは欲が出るもので、次の目標として自分の『組』を持ちたくまりました。

今振り返れば、ライン作業が嫌だからといった安易な気持ちから始まりましたがこのあたりから、少しずつ自分の気持ちに変化が出てきたのだと思います。しかし、仕事に夢中になりだした時に自分にとっての大きな変化点が訪れるのです。それは、労働組合の役員をやってくれないかと誘われたこ

とです。その当時は、正直、組合って？俺が出来るの？といった感じを持っていたので、一度は断りました。がまあ役回りとして二年間だけやればいいんだと安易な気持ちで引き受けました。そこで、一年間がなんとなく過ぎ、後一年だと安易に考えていたところ一人の上司と出会うことになりました。僕自身が壁や苦手なことにぶつかると「どうしたら出来るかな、考える前からどうやってやればいいのかな」などすぐに諦めてしまう為、この上司からは、とにかく「自分自身に限界をつくるな」と何度も何度も叱られました。この言葉が今現在の基本姿勢にもなっていますし、また、自分が納得できる時間の過ごし方をしていくことが現在の目標です。

―最後に―

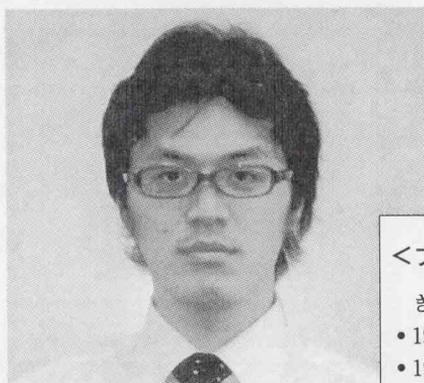
今回、産政塾を卒業するにあたり、これまでの自分を振り返る機会を持つことが出来たのは大変貴重なことでした。学生時代から社会人としてのこれまで生活の中から自分が感じてきたことを書いて見ました。産政塾の基本理念である、「殻の外に飛び出そう！」という言葉からは様々な意味を読み取ることが出来ると思います。殻とは自分を取り囲んでいる環境とも考えられるし、自分の内面の考え方や捉えることも出来ます。今回、私は自分を振り返る中で、自分にとつての殻とはなんだろうと考えました。先ほどもふれましたが、「自分自身に限界をつくらない」そして、外に飛び出そうとはいかなる環境におかれるのにしても「行く前から悩まず、行ってから悩む！」ことだと捉えています。その上でとにかく「自分に負けない」ことを常に心に持ち続けて行きます。

最後に、半年間の産政塾17期活動の中で、企画を通じてメンバーの皆さんと様々な体験ができ、多くのことを語り合うことができたことは、私にとつて財産となりました。業種も立場も違う皆さんからの話は驚くことがあったり、自分と一緒にだと感じた充実した時間でした。一つの結論を導くのものにも、多くの意見があり、自分が気づかない視点があることを理解することの大切さはこれからも忘れずにいたいと思っております。

小田桐塾長をはじめ、中部産政研の皆様、特に事務局の松井さんには大変お世話になりました。様々な調整に骨を折っていただいたことに感謝しております。ありがとうございます。

また、産政塾17期の皆様（特にB班）には多くの刺激をいただきました。これからも、この縁を大事に皆様とお付き合いしていければと思っております。短い時間でしたが本当にありがとうございます。

「意識」と「行動力」



デンソー労働組合

木村 匡 伸

<プロフィール>

きむら まさのぶ (31歳)

- 1975年7月 東京都三鷹市生まれ
- 1998年4月 (株)デンソー入社
- 2004年9月 デンソー労働組合執行委員
現在に至る

<家族> 妻1人、息子1人

<趣味> 産政塾生活を救ってくれた“釣り”
と少々の“お酒”

はじめに

この第17回産政塾に参加することが決まった時、前年の参加者から「色々な業種の人と交流できるので、本当にためになるよ」という一言があった。こうした声を聞いて期待に胸を膨らませた一方で、非常に悩ましく。難解なものだと感じていたのはこの第17回産政塾のテーマである『殻の外へ飛び出そう』というものであった。

このテーマの『殻』と一口に言っても思いつくのは卵ぐらい。一般的に殻を破るということはよく耳にしてきたのだが、自分で殻を破るということを意識してきたことはこれまでなかった。ただ、参加していれば何か見えてくるだろうと軽い気持ちで開塾式に臨んでいた。

産政塾に参加して

自分が全ての回に参加できたわけではないのだが、数少ない参加機会を通じて感じたことを自分なりにまとめてみたい。

【第1回 開塾式】

まず強烈な印象を受けたのが最初の自己紹介。しっかりと自分を見つめていて、ユーモアを交えながら延々と話す塾生たち。「なんでこんなに堂々としゃべれるの？」全員の個性あふれる表現力とやる気に、正直、自分は気圧されて一言、二言……。兵（つわもの）揃いだと感じたのは確かである。

【第2回 「明るく・楽しく・元気よく」笑って職場を明るくしよう】

今考えると、ここが自分にとってひとつの転機だったと思う。回のテーマは『明るく・楽しく・元気よく』笑って職場を明るくしよう。まずは「笑いと健康について」ということで、金城大学教授 森下伸也氏をお迎えして座学。その後は、吉本興業のプロの漫才師が講師として、実際に参加した塾生がペアとなってみんなの前で漫才を披露するのだが、大の大人たちが本当に大真面目に取り組んでいた。それこそ本当にプロ並みのしゃべりを披露し、中にはアドリブまで入れてしまう塾生たちを前に、「こんなことやつてられない」「かっこ悪い」と正直、やる前は考えていた自分が恥ずかしく思えた。自分がやった漫才の自己評価は最低。これではいけない。来ている意味が無い。周りの塾生の真剣さに改めて自分の気を引き締めることができた回であった。

【第3回 「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」】

第17回産政塾としては唯一の遠征で、自身としては初の九州。そしてテーマが命の尊さ・平和維持ということ、これまで教科書の範囲でしかわかっていない戦争というものを実際に特攻隊隊員でいらつしやった方からお話を聞けるということ、ある意味、期待感と緊張感で一杯であった。

講師である深園さんのお話は、ある意味体験された方からしかお聞きできない大変貴重なものであった。ただ、今の日本がどれだけ平和かということが改めて理解できた反面、世界では未だに戦争が起きている現実とそれをTVから通じて人ごとのように感じている自分に不自然さを覚えていたのだが、翌日、自衛隊の方々のお話をお聞きしてことの重要性を再認識するとともに不自然さは解消された。自衛隊員の方から「日本上空から毎日24時間体制で監視を行っている。」と聞いた時に「本当

にこの日本で24時間体制で監視する必要があるのか?」という今思うと大変失礼な質問をしたのだが、隊員の方は毅然と「そのように考えて欲しい。それも国民の皆さんの安全を守る責任があるからです。」という一言の重み。我々塾生よりも若い隊員の方からこうした一言を聞いたのだが、平和ということを改めて考えさせられた一言であった。

【第6回 豊かな生活とは】

〜開放的な空間で、ゆっくりとした時間の流れの中で、最高級の料理を創作してみよう!!〜
企画最終回は我がEグループの豊かな生活を改めて食の観点から考えてみるという大義名分のもと、本当に他のグループの方にお世話になりっぱなしの『究極カレー11品の創作料理と作る』という企画だったのだが、正直、事務局が当日これほど楽にさせてもらっていいのかと少し不安になったが、結果的には大成功のうちに終了。塾生全員が協力し合って、創り上げた料理はどのグループのものも大変工夫の凝らされた、甲乙つけ難いものばかり。全員が協力し、助け合うことが非常に大きな成果を生み出すということを持って経験できた企画だったと自画自賛していた訳だが、自分自身としては事前準備に全く参加できず、同じEグループのメンバーには多大な御迷惑をお掛けしたことで、そして絶対に忘れてはいけけないものをその後、しばらく保管して頂いた松井さんにはこの場をお借りしてお詫びいたします。

今後、殻の外へ飛び出すためには

私はそれまで会社で8年間ほど働いてきて、一種の惰性が自分を覆っていることには気付いていた。

仕事を進める上で、いい意味でも悪い意味でも手を抜くことを覚えて、自分なりにうまいこと業務を回していたつもりだったがその反面、入社当時のやる気にあふれた、「何でもやってやろう」「これはこうやってみよう」「自分の担当製品については誰にも負けない」といった気概が薄れてきていたのが事実であった。

そんな矢先に、組合専従役員として異動。右も左もわからず、何とか1年間必死に走っただけ。自分を振り返る余裕も無く、何かを変えることもなく結局は流されてしまってきた。自分としては「このままでいいのだろうか？」と、漠然と考えていただけで、それを直そうとして具体的な行動に一步踏み出すようなことはしていなかった。結局のところ「面倒」「時間が無い」「やっても変わらない」といった屁理屈をこねて、言い訳をしてただ逃げただけなのが実態であった。

今、自分の殻は何だったのか？と振り返ってみると、こうした言い訳や妥協してしまう自分なのかなどと思うが、結局のところはよくわかっていないのが本音である。しかし、これを自分の殻と定義するのであれば、今の自分はまだまだ殻を破って捨てられてはいないと考える。ただ、この産政塾に参加してきた中で、殻の外へ飛び出すために気付かせてくれたこと・学ばせてもらったことがある。様々な業種の人が参加しているこの産政塾は、職場でも中心となる、仕事が多忙であろう人ばかりで、全員が多かれ少なかれ御苦労されながら参加していたと思う。しかし、そうした状況にありながら、『この今という時間を精一杯楽しもう・何かを吸収しよう』という塾生の意識の高さと、『誰かの指示を待つことなく、自ら積極的に動いてやり遂げようとする』塾生の行動力。こうした意識と行動によって、大いなる達成感・満足感を味わうことができるのだということを改めて気付かせて頂いた。また、どんなことでも現状に満足することなく、少なくともまずは第一歩を踏み出すこと、またその

きつかけを生み出すことの大切さをこの産政塾を通じて、塾生の姿勢から学ばせてもらった。ただ、この第17回産政塾に参加した一番の財産はこのようなかけがえのない同期塾生と知り合えたことだと思っている。

後記

産政塾17回の歴史では普通の人なのかもしれませんが、開塾式で「強烈な」キャラクターの持ち主が同じグループとして席が隣になった時は……。ビビっていた自分でしたが、本当に趣味は人を救ってくれるものです。と、こうして改めてメンバーの顔を思い出してみると、よくもまあこれだけ「個人的」な人ばかりが集まったものだと、正直、感心してしまいました。最初の自己紹介でその片鱗は伝わってきましたが、回を重ねるにつれて人となりが非常によく分かってとても有意義な時間を過ごさせて頂きました。ただ、自分に業務調整能力が備わっていれば、もっと参加して交流が深められたのと今でも後悔しています。

最後になりますが、小田桐塾長をはじめ、我々、Eグループの対応（特に私）に大変なお手間を取らせてしまった事務局の松井さん、第17期塾生の皆さん、そして我が「どうでもE」グループの皆さん、本当にありがとうございます。この縁は腐れ縁として、今後も引き続きよろしく願います。

刺激を求めて



アイシン労働組合

古賀博義

<プロフィール>

こが ひろよし

- 1966年 名古屋市生まれ
- 1989年 アイシン精機入社
- 2004年 アイシン労働組合 中央執行委員
現在に至る

<家族> 妻、長男（小5）、次男（小2）

<趣味> 南の島、育児、餃子

○ はじまり

2005年の秋の終わりに上司から、『さんせいじゅくに行ってみないか』と言われた。サンセイジユクってなんだ？ 政治に参加するという意味、だとすれば参政塾か…

実は募集案内を見るまで、『産政塾』という漢字すら知らなかった。『これは若手向けであって、年齢制限から外れるからNGですわ』『うるせー、関係ない』 そんなやり取りを経た後で申し込み動機を考えたのはここだけの話。

一度しかない人生、刺激を求めてとことんやってみようか…

○ 開塾式にて

豊田市山之手の全労災豊田会館での第1回目の会合案内が来た。テーマは「殻の外へ飛び出そう！」らしい。ならばなんで豊田市なの？ 名古屋方面からも豊橋方面からも刈谷方面からも電車で行きにくいじゃん。まずは事務局が豊田の殻から外へ出なきや。そんな思いを内に秘め、いざ会場へと足を運んだ。ほとんどが初対面の方。一見怖そうな人もいるぞ。いや、そういうふうに見えるのも殻のせいかもしれない。見方を変えればいい人かも。

○ 第2回会合に向けて（笑って職場を明るくしよう）

Aグループのテーマ『笑い』についての企画内容を打合せしようにもメンバーの日程が合わず、時ばかりが過ぎていく。文明の利器はずのEメールも返事が来ない。不安が募る中、情報を収集し始めた。すると、我々のテーマである『笑い』のもたらす効果を真剣に？考えている「日本笑い学会」とか、「笑うことで免疫のバランスが正常になる」とか、「老人ホームでの医療費削減のため笑いに取り組む自治体」とか、嘘のような話しがたくさんあった。（嘘と思ったのも殻の中にいたためかもしれない）Aグループでようやく集まる機会ができて、それぞれ収集した情報を持ち寄った。笑いはないかというものであり、職場でのコミュニケーションにもユーモアが有効であることは誰も否定しない。ただ、講師の話が聞けて全員が体験もできるプログラムはどうあるべきか、答えが一つではないだけに議論？はつきなかった。ワッハ上方という大阪の施設では体験漫才や落語ができるということ、ここで聞いてみる。ワッハ上方としては出張体験漫才の経験はないとのこと、で頓挫しそうになったが「笑いの文化を広く伝えることがワッハの使命ではないのですか」というデンソーの松本さんの一言もあって交渉成立。塾生全員で大阪に行くより、はるかに効率がいい。（いや、大阪に行きたかったという声もあったのは事実）

また、森下伸也という金城学院大学の教授が「日本笑い学会」の会員であり、講師を引き受けて下さるとのこと、事前打合せに行くことになった。普段立ち入ることのない金城学園に大手を振って立ち入る絶好のチャンスであったが、私自身は業務の都合で行けなかった。（我らのリーダーは写メ

に夢中だったと聞いている。

当日はまず、森下教授の話しに腹を抱えて笑い（それも教授が準備したDVDが再生できないというトラブルがあったにも関わらず、何ごともなかったかのように笑わせ続けていた。こんな先生なら学校での講義も飽きないだろうなあ）、ワッハ上方を通じて吉本興業から来て頂いた林家染介氏と西川まさと氏（西川のりお氏に次ぐ、西川きよし氏の2番弟子）の漫才で笑わせてもらった。（普段はコンビを組んでいる訳ではないと聞いて絶妙なコンビネーションに脱帽）その後、ワッハ上方が体験漫才で用いているDVDを見てから、いよいよ塾生による実演の時間。塾生だって負けてはいない。アドリブを加えながら塾長も交えて漫才で会場を沸かせた。おとなしく見えたけど、皆すごい人ばかりだ。（正直言うど皆さんがノッてくれるか不安だったけど、そんな心配はなんのその、皆さん輝いていました。この分野での殻なんてものは皆さんなかったのかもしれない。不安を感じていた自分は殻を割り切れていないのかも）

○ 第3回（命の尊さ・平和維持の重要性について）

自分自身、学生時代に4年間を過ごした鹿児島に行ける。知覧の特攻遺品館の館長（稲沢市出身）とは話したことがある。『みんなを案内したい』、なんて得意になっていたが、会館に着いてみると記憶の中と全然違う。会館の受付で聞いてみると十数年前に立て直して平和会館になったとのこと。確かに20年前の記憶であり、時の流れを実感させられた。当時の館長は現在稲沢市に住んでいるものの、

年に一度の慰霊祭には参拝に来ると言う。この元館長にとって時計の針は当時のままかも知れない。戦争中の話を聞かせてくれた外園氏や、会館の周りで当時の事を話して下さった数人の方からは『戦争の悲惨さを風化させてはならない。私が語りついでいかなければ』という義務感のようなものを感じた。冷静に考えて（自分の殻の中で考えようと）肉親が亡くなった事件を人に話す機会はありません。だるう。若い人にとっては「関係ないこと」「生まれる前の話」かもしれないが、戦争を二度と繰り返さないためにも戦争を体験した方々の「日本が犯した過ちを決して忘れないでほしい」という思いを大切にすべきと思う。会館の中には国のために死に行く隊員達が家族に残した遺書が多数展示してある。『今から自分は死ぬんだ』という気持ちの片鱗を垣間見ただけであるが、とても怖い時代である。果たして自分はその重圧に耐えられるのであろうか。どんなに批判されても逃げ出すと思う。そのようなことに悩む必要のない平和のありがたさを痛感した。

○ 第4回（日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ）

京都にある「瑞光窯」という工房に9時25分までに集合。現地集合なのは判るが、交通案内は『京都駅から電車で2分、○○駅から工房まで徒歩10分ほど』のみ。おいおい、○○駅ってなんだよ。（これも殻を破る仕掛けなのか？）京都駅から乗ったタクシーが道に迷い、最後は歩かされたもののように到着。ろくろ　なんて映画ゴーストくらいしか思い出せないが、とりあえず着手してみる。初めてのことで慎重に当たり障りの無い小皿を作ると、我らのリーダー（松坂屋の品川氏）から、

非常に気になる一言を言われる。「古賀さんって意外と器（うつわ）が小さいんだね」（なんだと？もう一度やらせてみやがれ みんなが驚くものを作ってやる）言いがかりをつけた我らのリーダーの器も小さいことを確認し、2作目を考える。上にいくに従って広がる形は簡単にできる。しかし、上が絞ってある形は難しそうだ。そこで思った。外見を徳利のようにすると、みんな勝手に『肉厚は一樣で中も相似形の空間がある』と考えるだろう。ところがどっこい、中は指の深さまで真っ直ぐ穴が開いているだけ。オチヨコ一杯分の酒が入る徳利なんて面白い。殻破りにもってこいだ。みんな驚くぞ。よし、これで行こう。作り始めると「肉厚が違いすぎるので焼いた時に割れますよ」と指摘された。「そこをなんとか」と頼んでみたが、許してもらえず断念。ならば仕方がない。普通の徳利のように上が絞られていて、肉厚が均一なものを作ってやろう。どうしたらいいものか、聞いたら実演して下さった。道具を借りて自分でも始めてみるが、うまくいかない。見かねた指導員の方が補助して（というか作り直して）下さり、徳利のような形ができた。但し、口元の仕上げは自分で行ったので、液体を注ぐにはあまりにも小さい穴（直径5mmくらい）となってしまう。失敗か？ いや、これを一輪挿しと考えればなんとかなるぞ。考えを少し変えただけで気分も上々：

○ 第5回（民間ノウハウを活かしたチャレンジから秘訣を学ぶ）

○ 第6回（スローライフ・スローフードを実践して心の豊かな生活を実感）



殻破り
形状



みんなの
想像

○ 第7回（閉塾式）

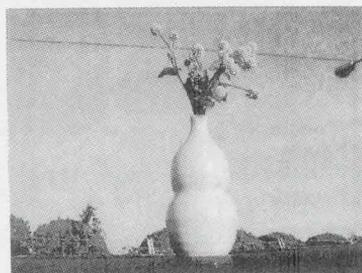
第5回〜第7回は、いずれも業務上の都合により参加できなかった。なぜか産政塾の会合がある日は単組の行事が重なることが多い。事務局の松井さん（同じアイシン労組）が単組の行事への参加を避けるためにあえて会合の日程を操作しているのではないかとさえ思えてきた。（笑）

○ まとめ

入塾して感じたことは『色々な人と接して様々なことを見聞する一つ一つの経験が新たな価値観を見出すことになり、その積み重ねが「自分の殻を破る」ことに繋がるのではないか』ということ。前例や常識にとらわれることなく、刺激を求め、新しい試みにトライして行きたいと思う。

○ 最後に

Aグループの皆様、企画、運営、まとめまで色々と、お世話になりました。また、我々の企画に喜んで参加して下さった他グループの皆様や、さらには各グループの企画実現のために日夜？努力して下さった事務局の方々から感謝を申し上げます。



共に「楽しむ意識」さえ有れば…



豊田市役所

近藤 邦博

<プロフィール>

- こんどう くにひろ (28歳)
- 愛知県豊田市出身 おひつじ座のA型
 - 夢が調理師・栄養士・家庭科教師と変わって
いく中で幸運にも行政マンとなる。
 - 市民課で印鑑登録、戸籍事務を経て、本業？
の栄養士として保育課で勤務

<家族> 妻1人、娘(2才半)1人、
しまじろう1匹

<趣味> 喰う・寝る・遊ぶ、飲み会、和太鼓、
スキー、バトミントン etc…

〔はじめに〕

今回、幸運にも産政塾の塾生として選考頂き、多くのことを学ぶことができました。この産政塾の学びの中で根幹に流れている精神、それは異業種27名の塾生同士の「仲間作り」にあったと感じます。この機会を与えてくれた産政塾に感謝すると共に、これからも豊田市から多くの塾生を送り出すことが今後の豊田市の未来をも変えるのでは…と思えてなりません。私の足跡を辿って一人でも多くの方が産政塾への魅力を感じ、挑戦していただければ嬉しい限りです。

産政塾の活動

〔第1回 開塾式、企画の検討〕 1月23日開催

「どんなメンバーなんだろう。何をやるんだろう」という期待とちよっぴり不安を抱えながらの開塾式。メインテーマ「殻の外に踏み出そう」の下、各グループで限られた予算・日程の中で企画の検討を行った。私自身が産政塾では是非とも実現したかった、世界のミクニと呼ばれる三國清ニシエフが行う、小学生向けの料理教室「キッズシェフ」への体験企画は企画会社との日程調整がわず初回から実現できないことが分かり、イキナリ凹む。しかし、同じグループメンバーと話していくうちに、「食に関する企画をしよう」となり、それ以後、平日の夜に何度も打合せを行うことに。

〔第2回 漫才の実践を通し、ユーモア・笑いについて学ぶ〕 4月20日開催

「笑いと健康について」のテーマの下、金城学院大学教授 森下信也氏のユーモア溢れる講演を聴くことができました。「大学教授のユーモアってつまらないんじゃないの？」という思い込みを見事に打ち砕く、お腹が筋肉痛になる程の×講演↓◎トークに改めて周囲の雰囲気を変える笑いの威力・メンタルヘルスにおける笑いの重要性を感じました。

その後、笑いの実践ということで吉本興業の若手？芸人の手助けの下、漫才をすることに。現在教育委員もされている小田桐塾長自ら先頭に立って漫才している姿を見て「流石塾長！自ら殻をやぶってるなあ」と関心してしまいました。

〔第3回 知覧と鹿屋航空自衛隊を訪ねて、命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ〕

5月17・18日開催

今期初の宿泊研修。鹿児島のを1泊2日という駆け足で第2次世界大戦末期の特攻隊基地である知覧で戦争の悲惨さと、鹿屋航空自衛隊基地で現在の平和維持のため、どのようなことが行われているかを学んだ。その夜の食事の際、ある塾生が「こういう場所に来るとみんな、戦争は悲惨だ、決して戦争は起してはならない。といい子ぶるんですよ。でもそれですぐ冷めちゃうじゃないですか。だから今回は一過性のものでなく、しっかりと心に留めていかなくてはいけないと思うんですよ。でなければ来た意味が無い。」と言った言葉がとても心に刺さりました。

〔第4回 京都工芸会館を訪ねて、伝統工芸の技能伝承について学ぶ〕 6月10日開催

伝統工芸に学ぶということで京都市にある瑞光窯という窯元でろくろ体験を行い、京都工芸の職人

を育てる京都伝統工芸専門学校にて職人を育てる先生の講演と、生徒の実演を見学しました。

「技能伝承とは、形式知だけでは伝わることはできない。やはり人から人への人伝いが重要であり、そこには教える側と学ぶ側の情熱があつてこそ実現する。そうしたプロセスを通じて『人間力』が形成されていく。」という言葉を頂き、『ものづくりは、人づくり』であり、かつ『人づくりの大切さ』を改めて実感しました。

〔第5回 中部国際空港を訪ね、民間ノウハウを活かした空港での

チャレンジから「殻を破る」秘訣を学び、実践〕 6月27日開催

『挑戦者達の横顔く見えない気流に打ち勝つ翼を求めて』というテーマで、中部国際空港(株)の尾頭様より、セントレアを建設するため、資材調達係の責任者としての苦労やアイデアをお話しいただきました。万博開催までに開港しなければならぬ時間的制約の中で、工期を短縮するために土地を細かく区分し埋め立てた土地から建設許可を取りながら建設したことや、埋め立ててから基礎のために掘り下げるといふ一般的な工法を金と時間の無駄を省くため、最初から必要な部分だけに土を盛るといふ逆転の発想で開港日に間に合わせたという話は「K A I Z E N」のトヨタ自動車出身だったからこそ、出てきた発想であつたと思えました。その後、塾生達で、顧客の視点で中部国際空港を隈なく観察し、セントレアがこうしたらモット良くなるのではと、各グループの提案をプレゼンテーションしました。刈谷市役所から来た塾生がセントレアマスコットの謎の旅人「ふう」に彼女を！ということで「はう〜」という名でデザインまで詳細に書いた発表には、市の職員でこんな柔軟な発想ができるとは刈谷市役所恐るべし…。と驚きでした。

〔第6回〕 『豊かな生活とはく心豊かなライフスタイルを創造・体験しようく』 7月14・15日開催

いよいよ我がEグループの企画がやってきました！紆余曲折あった中でまとまった答えはスローフード、スローライフ。すべてが便利で簡単になりつつある昨今。食べ物があつて当たり前の中、食への感謝、そして作り手への感謝、食事を食べるまでの人と人との協力。そういったものが希薄になっていっているのでは？本当に豊かで幸せな生活とは何か？を追求するために本当に不便なキャンプ場で1泊2日の体験学習を行いました。創作カレー十その他一品という課題に各グループ趣向を凝らした料理が登場し、塾生全員が思っていた以上に食に対する意識が高いことに気付きました。

今回の研修で一番感じたことは、どんな不便な状況、1人では怖くて居られないような状況であっても仲間と共に「楽しもう」という意識さえ持っていれば困難すらも楽しいゲームとなりえるということ。仲間の大切さ、楽しもうという意識を持ちつつづけることで、困難な仕事でも乗り越える力を貰えるのだというとても大切なことを学ぶことができました。

〔第7回 閉塾式〕 8月23日開催

あつという間に産政塾が終ってしまつて、残念だなという気持ちの中の閉塾式。最後に自分の殻とは？自分の殻から外へ踏み出せたか？についてグループごとで話し合いました。私達Eグループのメンバーは私も含め超個性的な人ばかりで構成されていましたが、根は本当に真面目なメンバーなんだなと今回のグループワークを通じて感じ、改めてこのメンバーでできたことが幸せでした。

で、殻を破れたのか

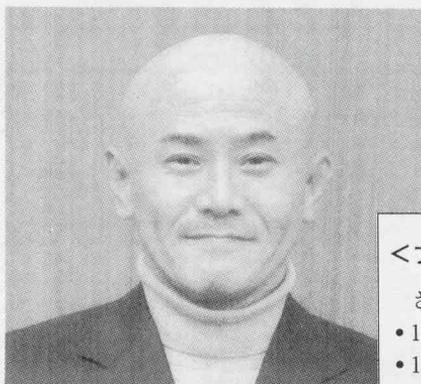
自分の殻とは何か？それは浮き沈みの激しいところ。問題があるとすぐ逃げだしてしまうところ。そして自分勝手なところ。産政塾ではそうした自分の殻に真正面から向き合うことができませんでした。

で殻を破れたのかといえは、破れていないでしょう。しかし、できていない自分という現実を逃げずに見つめることができました。そして仲間と共に学んだ研修の中から、どうしたら殻を破れるのか？というキツカケ・方法を学ぶことができました。

さあこれからどうする？どうなる自分。

現実を全て肯定し、そしてどうしたら殻を破れるか。それを学んだ産政塾。あとは実践するのみ。といつても自分に何ができる訳でもありませんし、相変わらず波の激しい自分です。只、産政塾が「一過性」のものであつてはならないと感じます。産政塾に心良く送り出していただいた職場の皆さん、そして人事課のみなさん、そして産政塾の松井さんを始めとする皆皆さんに心から感謝すると共に自己の成長でお返しできれば、イヤしていかなければと緊張です。異業種での仲間作りは、これからの豊田市をよりよくするための重要なポイントであると感じます。今後も豊田市役所から多くの塾生を輩出することを切に願いつつ自己の研鑽に努めます。本当にありがとうございます。

「殻の外に踏み出せたか!？」



東海理化労働組合

佐々木 澄 和

<プロフィール>

- ささき すみかず (38歳)
- 1968年2月 愛知県に生まれる
 - 1990年4月 ㈱東海理化入社
 - 1990年7月 S A F技術部配属
 - 1998年9月 東海理化労働組合 非専従執行委員
 - 2002年9月 労働組合を離れる
 - 2004年9月 東海理化労働組合 書記次長
 - 2006年9月 東海理化労働組合 副執行委員長
現在に至る

<家族> 妻・長女(10歳)・次女(5歳)

<趣味> 琵琶湖の湖上で魚と知恵比べ
(=BASS FISHING!!)

2006年1月23日 私は産政塾生になった。これから一体何をするのか？全く分かっていなかったことに不安を感じつつも、期待に胸を膨らませていた。今思えば、あの場に集った皆が、今では想像もつかないような真面目な顔で自己紹介をしていたことも、今思い出すと、結構笑える…。懐かしい…。この風貌の私が言うのも変!?かもしれないが、しかし、まあ、よくここまで個性の強い人間が集まったものだ。回を重ねるたびに、懇親会をやらねばやるほど、皆がどんどん個性を出し、どんどん仲良くなっていく、本当に愉快的な仲間の集まりだった。考えてみれば、1年も満たない間に数回しか会っていないのに、ここまで仲良くなれたのは何故なんだろう？会社も組合も業種も違う仲間の集まりである産政塾は、ある意味、日常から解放された場所であり、お互いを尊重しあつて付き合える場所だったからなのだろうか!?私にとつてもこの産政塾は、いつの間にかとても居心地の良い場所になっていった…。閉塾式の時、松井さんに「どうやら殻の外に踏み出すにはまだ時間がかかりそうなので、もう1年留年させてください」と言ったことを覚えている。真面目にもう1年、今の塾生でもっと幅広い活動をしてみたいと強く感じていた。

改めて、貴重な経験と体験の場を提供頂いた中部産政研に感謝！ありがとうございました！

…と、ここで原稿を終えてしまつては、あまりにも内容のない原稿になってしまうので、今一度、今回のテーマでもある「殻の外に踏み出そう！」について、自分なりの思いを書き連ねてみたいと思う。

そもそも「殻」とはなんだろう？閉塾式の時にも、1年間の活動を振り返りつつ、「殻とは何か？」を皆で考えてみていたが、今、改めて辞書で「殻」を調べてみた。すると、「殻」とは、「外界

から自己を守る壁。その壁に守られた世界」とあった。「守られた世界」いろいろな意味があると思うが、言い換えれば、「楽な世界」とも言えるのではないだろうか？

では、私の「殻」とはなんだろう？少し昔を振り返ってみたいと思う。

誰もが同じかもしれないが、会社に入社してから数年間、私は目の前の仕事をこなすことに精一杯だった。とにかく、結果を出すことに無我夢中になっていた。それこそ、36協定という言葉の意味さえ知らないころは、惜しむことなく時間を費やし、どんなに時間を費やしても、結果を出すこと、それが仕事のやりがいと思っていた。今思えば、自分にブレーキをかける術さえ知らずに突っ走っていた気がする。おそらく、その時期の私がこの産政塾に入っても、最後まで「殻」の意味を理解することは出来なかったと思う。

年を重ねるにつれ、徐々に周りを見る余裕もでき、ある時は自分の周りで起きる出来事に感じ、またある時は他人の生き方を見て、初めて客観的に自分を見つめることができるようになったと思う。

「忙しい」ことは良いことだと思う。忙しい中にいると、ある種の安心感さえ覚える。でも、忙しさのあまり、「忙」の字のごとく、一番大切な「心」を「亡」くしていたと今だから思える。人として成長するには、自分を知ることが大切だと思う。例えば「今のままで良いのか？」「自分はどこまでやれるの？」「自分の限界はどこ？」そんな自分への問いかけが必要だと思う。この産政塾は、そんな自分への問いかけを改めて行うとても貴重な場であった。

「殻」Ⅱ「守られた世界」Ⅱ「楽な世界」Ⅱ「知らず知らずのうちに自分自身で造りだしてしまった自分の限界」と私は思う。人と向き合う前に、まずは自分と向き合い、自分を知ることが必要だと改めて感じた。自分の強みと弱みを知ることによって初めて強みを伸ばし、弱みを補うことができるのだと思う。

私は「自分らしくありたい」と思う。「自分らしくある」ということはどういうことだろうか？自分がやるべきこと、自分が歩く道、その道を歩くということだろうか？その「道」とは何？おそらくその明確な答えはない。でも、いつもその「道」を問い続け、今の自分に自信を持つことが何よりも大切なんだと思う。偶然にも産政塾生になれたことを無駄することがない様に、「自分らしさ」を大切にしていきたいと思う。それが私の「殻の外に踏み出す」こと。

最後に、私たちの活動を最後まで温かく見守って頂いた小田桐塾長、中部産政研の皆様、そして最後の最後までご面倒をおかけしてしまった事務局の松井さん、本当にお世話になりました。

— ありがとうございます。

産政塾、万歳!!

『産政塾を振り返って』



トヨタ紡織株式会社

塩谷 武司

<プロフィール>

しおたに たけし (29歳)

- ◇1977年7月 愛知県大府市生まれ
- ◇2004年9月 アラコ(株)入社 人事部配属
- ◇2004年10月 3社合併(アラコ(株)・タカニチ(株)・豊田紡織(株))によりトヨタ紡織(株)となる
現在に至る

<家族> 妻、長女(4歳)、次女(1歳)

<趣味> 野球、お酒を飲むこと

はじめに

「産政塾に参加しないか？」と上司からの一言。『業務との両立』の不安が先立ち、正直なところ、面倒な事に巻き込まれたくないとの思いもあり、即答を避けた。

2004年9月に中途で入社をしたが、他にも経験年数が長い方が沢山いるのに、「なぜまた自分なのか？」と考えているうちに、締め切り期日が差し迫ってきた。なるようにしかならないと思い、渋々「会社の看板を背負って参加するのは少し荷が重いですが、人脈を作って来ます。」と上司に回答したのを今でも覚えている。

しかし、その気持ちは開塾式を終え、一掃された。以下、活動内容に沿って、自分の感じた事を綴っていきたい。

第1回 開塾式

『殻の外へ踏み出そう』をテーマに、27名が参加することとなった。自己紹介では、緊張のあまり、言おうとしていた事の半分も言えず、早速テーマとは全くかけ離れたものになってしまった。

しかし、グループ毎での企画立案や懇親会で、産政塾に対する抵抗感や不安が全く無くなり、期待感で一杯になっていた。

第2回 漫才を通し、ユーモア・笑いを学ぶ

「ユーモア・笑い」をテーマにした講演・漫才の実演が行われた。開塾式以来、2回目顔合わせであったにも関わらず、塾生同士で行われた漫才は、どのペアも以前からお互いをよく知り尽くしているかのように、息がぴったり合っており、正直驚かされた。

塾長自ら実践した夫婦コンビや、お笑いを意識した服装をしてきた野田さん、また個性豊かな発表が多く、初回の企画として、完全に馴染みきれいな塾生の雰囲気をも、一気に変えた企画であった。また、コミュニケーション不足による諸問題が浮き彫りになっている現在、コミュニケーションスキルの身に付け、実践していく事が大切であると感じさせられた。様々なコミュニケーションの取り方はあるが、今回学んだ『笑い』の観点は、一つのツールとして、最大限活用していきたい。

第3回 命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ

この企画は、私たちDグループの担当であったこともあり、最も思い入れのある企画である。

長谷川リーダーの下、2〜3回飲みながら企画案を練ったが、とても壮大なものに仕上がった。中国の前漢時代の書物「淮南子」には、『一生一、一生三、三生万物』といった記述がある。「一から二が生じ、二から三が生じ、三から、あらゆるものが生まれる。」との解釈のようであるが、Dグループは個性豊かなメンバーが5名いる。この記述通り、最高の企画が産み出せたと思う。また、それぞ

れの役割を主体的に取組み、非常にまとまりのあるグループであった。

さらに、企画をより成功させるために、事前にメンバー全員で現地を下見するほどの熱の入れ様であった。

今日の日本においては、「平和」が当たり前で、今日の延長線上に明日が必ずあるといった、錯覚に陥ってしまう。そのため、自分自身一日一日を大切に過ごせていないと感じる。今回の企画では、平和についてより深く考える機会となった。

特攻隊員であった外園さんからの講演、知覧平和会館での特攻隊員の遺書・遺品を前に、「平和を勝ち取るため」に犠牲を払ってきた方々の想いを肌で感じた。

当初、「靖国問題」において、「近隣諸国の関係が拗れるだけで、何故靖国神社参拝に固執するのか？」といった疑問を持ち続けていた。しかし、「九段（＝靖国）で会おう」と仲間と誓い合って、特攻して行った方々の遺書を見て、靖国は、非常に大切な場所であり、一方的に決め付けてしまう浅はかな考えでしかないなかつた自分が、正直恥ずかしかった。これを機に、一つの物事に対し、色々な視点で物を見るようにしようと思った。

翌日は、海上自衛隊鹿屋航空基地を訪問し、平和維持のため活動をしている自衛隊の任務に触れた。今の平和は、当たり前ではなく、歴史的な背景や現在も維持に努めている方々のおかげで成り立っている事を心の中に忘れずにおきたい。

第4回 日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ

現地集合で、非常に分かりにくい地図を手渡され、京都の町を歩きながら何とかたどり着いた瑞光窯。そこで人生で初めの陶芸体験をしたが、先生方の手解きの下やってみるものの、自分の思いどおりにならない。「殻を破る」とのテーマはそっちのけで、何とか形となるよう心懸けた。モノづくりの奥深さと難しさを実感した。

昼からの講演では、「技能伝承には、教える側の強い思いと受ける側の姿勢」が大切であり、そこには「信頼関係」が介在する。そうしたプロセスを経て「人間力」が形成されると伺った。「信頼関係」の根底には、コミュニケーションが必要不可欠であるし、「人材育成の大切さ」を改めて実感した。

第5回 挑戦者達の横顔 ～見えない気流に打ち勝つ翼を求めて～

民間のノウハウを活かして開港した中部国際空港を舞台に本会合が開催された。

営業部長の尾頭様より、今までのやり方を踏襲するのではなく、納期遵守（工程の工夫・埋め立て時の工夫）や、コストマネジメントフローを基に、徹底して行われた経費削減（土砂の流通経路の見直し等）を意識した開港であったと伺った。

決して官が悪いという訳ではないが、民間の凄さを再認識した。民間が入らなければ、今までどお

りのやり方を踏襲していただろうし、その結果、莫大な費用がかかっていたであろう。何事も今までのやり方が全て正しいと思ひ込まず、常に改善し続ける意欲を持ちたいと思う。

その後の発表会では、現地・現物を実践しながら今後の集客力についての課題・対策案を議論した。Dグループは、大橋さんの理論より「小物は追わず、人間の欲求を突く」をテーマに私が発表を行ったが、中部国際空港㈱の社員の方がいる前では、非常に冷静さを欠いた発表になってしまった。しかし、今までの既成概念にとらわれず、個人的にはよい内容であったと思う。

第6回 豊かな生活とは

「開放的な空間で、ゆっくりとした時間の流れの中で、最高級の料理を創作してみよう!!」

最近、「ワーク・ライフ・バランス」と言葉をよく耳にする。しかし、これまでその両者のバランスを積極的に取ろうと実践した事は無かった。

本会合は、定光寺のキャンプ場で開催され、「スローライフ・スローフード」の実践を通し、心豊かな「ワーク・ライフ・バランス」について考える機会となった。

グループ毎に分かれ、究極のカレー十一品以上の料理を創り、全員で味わった。普段、自分で料理を作る事は無いが、買出しから含め、本当に楽しく過ごせた。

また、普段は時間を気にする事が多いが、今回は全く気にする事も無く、気が付いたら午前3時近くまで語り合っていた。

心身のリフレッシュが図れたし、心の豊かさを、感じる事ができたひと時であったと思う。

第7回 閉塾式

約半年間の活動を経て、閉塾式をもって活動は幕を閉じた。本当にいい仲間巡り会え、名残惜しい気もしたが、同窓会の開催の予定もありそう？なので、今後職場でさらに自分を磨き、成長した姿を見せられる様にしようと心に誓った日でもあった。

やさいじ

産政塾に参加したことで、自分自身を見つめ直すいい機会となった。それは、色々な方々との交流を通じ、様々な考え方・意見に触れる事で、自分にとって、とても刺激となった。

発想の豊かさ、決して驕りではない自信、何よりも「良くしていこう」という、熱意・一体感があり、今回の活動の成功に繋がったと思う。

『殻の外へ踏み出そう』をテーマにし、活動を行ってきたが、正直、自分自身殻を破るまでには至っていない。しかし、殻を破るきっかけを与えられ、今後に生かそうとする自分がいるのは事実である。今の勉強は、全て未来へ繋がると思えた。

先にも述べたが、中途入社のため同期がいないのを寂しく思う事もあったが、産政塾17期生が自分

にはできまし、今後ともこの繋がりを大切にしたい。

今回の産政塾でお世話になった小田桐塾長はじめ事務局の松井さん、共に活動を行った。17期生の皆さん、このような機会を与えてくれた上司、送り出してくれた職場の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

『殻』ってなんだろう？



豊田工機労働組合

志岐 宣浩

<プロフィール>

しき のぶひろ (36歳)

- 1970年5月 福岡県生まれ
- 1994年4月 豊田工機株式会社（現株式会社
ジュイテクト）入社
（1年間の現場実習を経て）
- 1995年4月 営業業務部へ配属
- 1995年11月 トヨタ営業部へ異動
- 2004年2月 海外営業部へ異動
- 2004年8月 豊田工機労働組合専任執行委員
となり、現在に至る

<家族> 妻 由紀子（ゆきこ）？歳

長男 晃誠（こうせい）5歳

長女 彩佳（あやか）3歳

<趣味> バレーボール、野球、漫画喫茶通い

1、はじめに

いつも「余裕を持って取り掛かろう」とは思っているものの、ギリギリにならないと行動を起こさないという昔からの癖は変わっていない。「おそらく、同じような状況に陥っている第17期生も数多くいるにちがいない」と、このような状況に追い込まれながらも、妙な安心感で自分を納得させるのであった：（これって、自分の殻を破れていないっていうこと？）

それはさておき、慌しい日常生活の中にあつて、ふと自分自身を見つめ直すということは、そこに『非日常性』という要素がないとなかなかないように思える。1月から始まったこの産政塾での活動には、『非日常性』というエッセンスがふんだんに盛り込まれていたため、これまでの自分自身を見つめ直す一つのきっかけになったことはまちがいない。そこで、産政塾での活動を振り返り、『殻』とは何なのか？『殻の外に踏み出す』とはどういうことなのか？について考え、自分なりに思ったことを記してみたいと思う。

2、『殻』ってなんだろう？（使用前）

思い起こせば、産政塾の塾生募集の案内が届いたのは2005年の11月頃。ここ2年ほど職場のメンバーが15期、16期の塾生として産政塾に参加しており、「次はおそらく自分に声が掛かるだろうな。」と予想はしていた。案の定、予想は見事に当たった。参加するからには事前情報として、産政

塾ではどんな活動をしているのか、元塾生である職場のメンバーから話を聞いたり、16期の塾生が書かれた塾誌を読みながらイメージを掴もうとしてはみたものの、テーマが抽象的で、実際にどういうことをするのだろうかと思つたのが第一印象だった。このあと実際に活動に参加していくわけだが、まずは、参加する前に思つていた産政塾のテーマである『殻の外へ踏み出そう』とはどういうことなのか、『殻』ってなんだろうということについても触れておきたい。

自分自身が抱いていたイメージでは、『殻』とは、“周りから隔離された閉鎖的で硬い世界”であり、“周りを受け入ることなく自分を防御しようとする意識”といった、どちらかというとながタイプなイメージを強く持っていた。そして、『殻の外へ踏み出す』とは、“この閉鎖的で自己防衛的な世界や意識から自分を解放する”ということなのではないかと思つていた。例えばあまり適切ではないが、ちょうど“引きこもり”の人たちが自分の部屋から外の世界（≪社会≫）に一步踏み出すように。

3、産政塾での活動を振り返って（使用中）

今期は開塾式、閉塾式を合わせて、計7回にわたり活動を行ってきたが、活動に参加してさまざまなおことを知り、体験し、考えさせられた中で、果たして『殻』の外に踏み出すことができたのだろうか。一言ずつではあるが、活動を振り返ってみたい。

(1) 第1回会合（入塾式） 2006年1月23日

これから産政塾での活動を共にする塾生が初めて顔を合わせたこの日、「若い人が多い」というのが第一印象だった。17期生全27名の中で自分より年上はおそらく数人だが、自己紹介では全く年齢差を感じさせないほど自分らしさをアピールされていた。考え方や意識は、年齢を重ねることによって得られる経験に基づくとところが大きいだろうが、それだけではないということを改めて気づかされた。このあと、グループに分かれて企画討議をするわけだが、まずはグループ内での担当決め。いろいろと担当がある中、別に「書くこと」がどうしてもダメというわけでもなかったということと、おそらく誰もやりたがらないだろうと感じていたこともあって、グループ企画の活動報告を行う「フォーラム係」を自ら進んで引き受けることにした。しかし、これで後ほど苦しむことになる…

(2) 第2回会合（Aグループ企画） 2006年4月20日

○テーマ…『明るく楽しく元氣良く笑って職場を明るくしよう』

グループ企画の第一弾であるこの企画は「笑い」をテーマとし、まだお互いのことをあまりわかっていない時期に17期生同士が打ち解けるのには最も適した内容ではなかっただろうか。開塾式のあとの懇親会には業務の都合で出席することができなかった私にとっては企画後の懇親会も含めてグループ以外の塾生といろいろな話をするのは初めてだった。

さて、肝心の企画では、「人と人との関わりがあつて初めて形成される社会においては、コミュニケーションが不可欠である。そのコミュニケーションを円滑にするための潤滑剤的な役割を果たすものが「笑い」であり「ユーモア」である」ということを考えさせられ、また、実際に人前で

“笑い”の実践も経験することができ、収穫の多い企画であった。

(3) 第3回会合（Dグループ企画） 2006年5月17・18日

○テーマ…『命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ』

1泊2日の企画ということもあり、1/3程が参加できず、個人的には残念なところがあったが、“寝食を共にする”ことで得られるものが多くあったように思う。企画自体は、“平和”であることが当たり前だと思い、改めて“平和”について意識することが少なく、日常とは離れた内容だと思っていた。しかし、実際に当時のことを見たり聞いたりして得た知識、経験により、今のこの“平和”があるのは我々の先輩が礎を築いてきたからこそであり、我々はそれを引継ぎ、次の時代の人々に託していかなければならないということを再認識させられた。今の自分よりも10歳以上も若い特攻隊員が自らの命を懸けて守ろうとしたのは何だったのか図り知ることはできないが、自分がかような状況に立った時、果たして何を思うのだろうか自分自身に問いかける機会でもあった。

(4) 第4回会合（Bグループ企画） 2006年6月10日

○テーマ…『日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ』

自分たちのグループの企画ということもあるが、内容については、“産政研フォーラムNo.71”の“産政塾報告”の中でフォーラム係として報告させていただいたので、そちらをご覧いただければ幸いである。

企画のねらいなどは半ば強引に結び付けたところもあったが、この企画を通して、「モノをつくる」ことにより味わうことのできる喜びを実際に体験することで実感できたことは大きな気づきであった。また、人と人とのコミュニケーションが技術力だけでなく、人間力を培っていくという、ここでもコミュニケーションの重要性を教えられた。

余談ではあるが、実際に企画・運営するにあたり、事前にどれだけ段取りできているかで、その成果にも大きく影響するということを実感したことも付け加えておく。「段取りで8割は決まる」ということ。

(5) 第5回会合（Cグループ企画） 2006年6月27日

○テーマ…『挑戦者たちの横顔〜見えない気流に打ち勝つ翼を求めて〜』

セントレアが開港し、何度か「乗客」として訪れてはいるが、これまでとはちがった視点でセントレアの中を見て回るといふ新鮮なものであり、普段なら気にも留めないことについても、CSという顧客（＝相手）の立場に立って考えるという気づきを再認識させられた。

企画の中で行われたグループ討論の報告では、最後までまとまり切っていなかったにも関わらず、報告者になってしまったというサプライズなことがあった。せっかく自分たちの企画の時に実感した「段取り8割」が早くも崩れ去ることになった…

(6) 第6回会合（Eグループ企画） 2006年7月14・15日

○テーマ…『開放的な空間で、ゆつくりとした時間の流れの中で、最高級の料理を創作してみよう!!』
「スローライフ・スローフード」といった観点からのこの企画は、17期の企画を締め括るには最高(?)の内容であった(但し、この回も1泊2日ということで、全員が参加できないのが残念だった)。たっぷりある時間の中で一つのことには没頭するということは、なかなか日常生活の中では考えられないことであり、何だか妙にワクワクする気持ちにもなった。仕事でもそうだが、ONとOFFのメリハリは大事であり、そのメリハリがあつて初めてスイッチをONにできる。因みに2時間以上没頭して作り上げたバームクーヘンの出来はなかなかであり、苦労して作ったものはおいしいと実感できたのもこの企画のおかげ(?)

(7) 第7回会合(閉塾式) 2006年8月23日

振り返れば、7ヶ月というのは長いようで、あつという間でもあつた気がする。今までの企画を通して最後に改めて産政塾のテーマである『殻の外に踏み出そう』ということについて議論を重ねたわけだが、正解は一つではない。議論によって導き出された答えをこれからの生活の中で実践していくことができれば、それが正解であつたとわかるだろう。

4、『殻』ってなんだろう? (使用後)

開塾式、閉塾式を含め、7回にわたる産政塾の活動の中で何を学び、何を得ることができたのだろ

うか？

一つ目は『殻』とは何か、そして、テーマである『殻の外へ踏み出そう』とはどういうことなのかを改めて考えるきっかけを得たこと。『殻』とは何か？自分がこれまでの生活の中で培ってきた“常識”や“既成概念”も実は自分自身を守る『殻』になっているのではないだろうか？そして、その『殻』の中にいたのでは、外はどうなっているのか、また、どれだけの厚さがあるのかわからず、不安もますます大きくなるだろう。しかし、我々は“コミュニケーション”、“気づき”、“チャレンジ”という『殻』を破るための道具を持っている。これらの道具を駆使し、コツコツと少しずつでも相手や周りを認め（Ⅱ外の状況を知る）、自分を認めてもらい、自己を再認識すること（Ⅱ『殻』の厚さを知る）ができれば、決して破れない『殻』などないと思う。そして、その結果、『殻の外へ踏み出す』ことができるだろう。但し、一度『殻の外へ踏み出す』ことができればそれで終わりというわけではない。『殻』は我々が成長を続ける限り必ず必要不可欠なものであり、幾度となく『殻の外へ踏み出す』ことが成長の証となっていくだろう。そういう意味では、入塾前に抱いていた『殻』に対するネガティブなイメージは、上手く表現できないが、産政塾の活動を通して変化があったと思う。これも自分自身の成長（Ⅱ『殻の外へ踏み出した』成果の一つ）なのではないだろうか。

二つ目は、産政塾に参加しなければ得ることができなかった“同期”の仲間を得ることができたこと。仕事の中で知り合えることもあるかもしれないが、これだけさまざまな業種で仕事に従事している方々と考え方にちがいがいこそあれ、同じ方向に向かって取り組んでいく機会を得ることはそう滅多にあるものではない。私自身、“一期一会”という言葉が好きである。解釈の仕方は人それぞれがう

かと思うが、「人と人との出会いの中で、どんな場合においても同じ瞬間というものはないわけであり、その一瞬一瞬を大事にしていきたい」と思っている。また、その「人と人との出会い」というのは、極めて低い確率で生み出される偶然の産物であると思っている。そして、これを単なる偶然として終わらせるのではなく、その偶然を大事にして、自分が今まで持っていたネットワーク（人脈）をさらに広げていくことができれば、それが自分自身にとってかけがえのない「財産」となっていくであろう。

産政塾で得たこれら二つを今後の生活の中で活かしていつてこそ、これから先に幾度となく経験するであろう『殻の外に踏み出す』ことができるにちがいないと思っている。

5、わすじじい

最後になりますが、ほぼ1ヶ月に1回というペースではありましたが、約7ヶ月に及ぶ長期間、組合全体で労働組合統合というとても大きな仕事を進めていかなければならない真つ只中にあるにもかかわらず、快く産政塾の活動に参加させて下さった職場のメンバー、そして、個性的なメンバー（？）が多く集まった17期生のワガママ（？）な要求にも対応していただき、活動をサポートして下さいました事務局の皆様、心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

産政塾を通して学んだ「殻」



株式会社松坂屋

品川 誠二郎

<プロフィール>

- しながわ せいじろう (32歳)
- 1974年 名古屋生まれ
 - 1997年 (株)松坂屋入社
四日市店婦人靴売場配属
 - 2000年 外販統括部外商19課に異動
 - 2004年 総務部人事課に異動
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 音楽、スキー、ダンス

● はじめに

突然上司に呼び出され、「今年の産政塾は品川君が参加してくれ」。

何がなんだかさっぱりわからない。そもそも今私は新しく入社する契約社員の名簿を作成しているところ。「来たれ、意欲満々の若者達!」「第17回塾生募集!」と書いてある申込書を渡され、さらに募集対象者に「自己革新意欲のある方」。

産政塾って何だ?塾?まったく予備知識のなかった私は正直かなり戸惑った。そしてすぐに浮かんだのが自由民権運動。なぜか分からないが、明治維新の志士達が机を叩きながら語り合っている。「やれ、日本の将来は」「やれ言論の弾圧だ」、そんな光景だった。不安ではあったが、上司に勧められたこのプロジェクトを拒否するほど私の「殻」は薄くない。もちろん自己革新意欲もある。「わかりました、参加します」、二つ返事で了解した。

それからいろいろな人に話を聞き、産政塾は異業種交流研修の場であること、産政塾のテーマは「犯罪以外ならなんでもあり、殻の外へ踏み出そう!」であるということ、月1回の会合・飲み会があること、会合の内容は自分達で企画、実行することなどを知った。

今にして思えば、本当に貴重でかけがえのない経験を与えてくれた産政塾はこうして突然始まった。

● 開塾式

開塾式、案内状には「私服で：」と書いてあったが、会場に入るとほとんどの方はスーツ姿。さらに皆さんかなりの論客に見え、未来を憂う志士達の表情は硬い。「これはまずい！場違いかも！」綿パンにカジュアル服の私はまず驚いた。事務局の挨拶、メンバーの自己紹介と進み、続いて班決め。私はA班になり、さらにリーダーを任されることになった。そもそもリーダーが何をするのか分からない、まだ初対面同士のメンバーで何となくよそよそしくしているところに事務局の松井さんからどめの一言、「来月の最初の企画はA班でお願いします。」

●我々の企画

産政塾最初の企画、我々A班のテーマは「笑い」。閉塞感が漂う世の中で、何となく気をすり減らし、悲観的に考える人が増えてきた。これを打開するために、何も考えず、おなかを抱えて笑い、やるだけやったら開き直り、「なるようになれ」という前向きな考えができるようになりたい。それが創造性を生み出し、元気な職場になっていく。そんな考えからでてきたテーマである。リーダーの私を中心に（？）班員6名で意見をぶつけ合ったものだ。実施までの猶予期間は1ヶ月、久々の学園祭を思い出し、準備を進めた。就業場所、時間もそれぞれの6人、集まって話したのはわずか1回、金の居酒屋であった。何もないところからテーマを考え、さらに半日の企画を実行するということが最近していなかった我々だったが、このときは次々にアイデアが浮かんできた。酒の助けもあり、思いついたことをその場で確認、ある人は携帯で“つて”を探り、ある人は皆の意見を記録する。結局、

①笑いがもたらす健康について講師に話を聞き、②吉本芸人の指導で漫才の実践をする、ことに落ちていた。わずか2時間の話し合いであった。

産政塾全体のテーマ「殻の外へ踏み出そう！」の名のとおり、そのときの我々は確かに殻を破っていた。相手がどんな会社の人であろうが、こんなお願いは非常識ではないか、と思われることでもまったく気にしない。「とりあえず聞いてみて駄目ならまた考えよう」と次々に進めていった。通常の会社では議論を重ねて慎重に行うことだと思うが、猶予期間が短かったせいだろう。「どうせ笑いをするのなら吉本芸人に習いたい。でも大阪は遠いので、こちらに来てはもらえないか。できれば有名な人、費用は格安で、こちらが指定した日、時間に。」こんな勝手な話が電話一本、訪問一回で実現してしまった。もちろん我々A班だけの力ではなく、産政塾の事務局の方の力添え、先方の事務、そして芸人の方の多大なご協力あつての実現であつたが、この経験は貴重なものであつた。企画当日、金城学院大学から講師を招き、大阪から吉本の芸人に来ていただき、会場の刈谷市民ホールは笑いに包まれた。楽しそうに漫才を演じている産政塾のメンバーをみて感動した記憶は忘れられない。さらに先方のワッハ上方の事務の方に「今回を足がかりに出張漫才講習の企画をやってみておもしろいかも」と言っていたが、この企画の成功をA班全員で喜んだ。

「殻」というものもしかしたら「リスク」なのかもしれない。外へ出ることによって「今まで積み重ねてきた自分」に危機が訪れるかも。出なくても特に問題はないが、出ることによって何かが降りかかる。例えば、上司に叱られる、同僚への恥ずかしさ、異動、転勤等、こんなことかも。今回の我々が「殻」を破れたのは、もしかしたら「今まで積み重ねてきた自分」を知る人間がいなかったか

らかもしれない。

●他の班の企画

最初に企画をした我々A班のその後は気分的に楽だった。あとは他の班の方が考えた企画に参加して楽しむばよい。最初に厳しい日程をこなした特権であった。京都で「ろくろ」を回したのは初めての試みであったし、セントレアの裏側を見学できたこと、開港までの苦悩について知ることができたのは私の財産である。また、泊まりで鹿児島島の知覧、鹿屋基地も訪ねることができた。恥ずかしながら九州にすら行った事がなかったので、この企画は一番思い出に残っている。このD班の企画について少し振り返る。

この日の前日は本当に憂鬱だった。明日から一泊の交流会に行くというのに仕事がまったく進まない。私にとっては明日、明後日と産政塾の交流会だが、職場にとってはただの2連休。しかし、申し込んだ以上、参加するしかない。おそらく他のメンバーの方も同じように仕事がたまっているのだろうと勝手に決めつけ、「何とかなる」と、勢いで参加した。事前にレジメは渡されていたが、じっくり読んだのは行きの飛行機の中。知覧、鹿屋、名前だけは知っているがあまりピンとこない。ただ、驚いていたのはD班の実行能力。「よく鹿児島へ行くなんていう企画を思いついたなあ、我々は刈谷だったのに……」

知覧では正直びっくりした。飛行機の中でのやり残した仕事の不安は全部吹き飛んだ。10代の若い

特攻隊員が次々に命を落としていった現場、そこに最後の手紙、写真が保管してあった。2、3時間ではとても読みきれない数の手紙を順に読んでいき、また、当時訓練生であった方の話しを聞き、この企画のすばらしさを感じた。

「殻を破る」、この人たちの殻はなんだったのか。殻を破れずに死んでいったのか、もしくは殻を破って死んでいったのか。

「殻」とは時代、状況によって異なるものかもしれない。特攻隊員の本当の気持ちを理解しようとしても完全にはできないように、彼らも今の私の「殻」は理解できないかもしれない。

この企画はすばらしかった。ただ参加しただけの私であったが、その裏でD班の方たちの苦勞が容易に想像できた。旅行会社のような時間配分、関連する場所への手配、自前のバスガイド、何回も言うが、本当にすばらしかった。

職場に戻ったら何の事はない、皆さんお帰りと迎えてくれ、憂鬱であった仕事も先輩から「ああ、では、明日くらいまででお願い。」あらためて思った。参加してよかった。少しだけ殻を破ったぞ。

●殻の外へ踏み出そう！

「殻」とは何か？このテーマで産政塾を半年体験してきた。まだ分からない、はつきり掴めない、と言えばそうなるが、これでは自分自身が収まらない。半年もやってきたのだから、とりあえず勝手に決めさせてもらう。「殻」とは、今の自分の限界である。物事を進めるのに、これ以上はヤバイ！

と決めてしまった時。それは自分の状況によっても違おうし、明日の自分はまた違おう。何枚もあり、決して全部破ることはできないもの。否定的な意味で捉えがちな「殻」だが、一概にそうは言えない。今までの「殻」で、破ってよかったこともあったはずだが、破らなくてよかったこともあったに違いない。ただ、これからは「破りたいのに破れない、破った後のリスクが怖い」ということだけは避けたいと思う。

結果、他人から見れば所詮は大したことはない、理解できない「自分の殻」について、そんなに気にしないでどんどん破っていこう、というのが私の「殻」に対する結論だ。もちろん結論になっていないことはわかっているが、勘弁してほしい。約10年ぶりの卒論、そろそろ頭が回らなくなってきた。

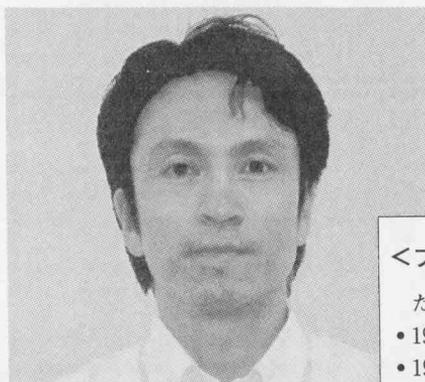
●最後に

突然始まった産政塾であったが、本当によい経験になったと思う。30歳過ぎの大人が何人も集まって企画をし、「殻」というテーマについて考える。夜の飲み会ではそれぞれの会社、仕事について語り合う。自分の会社の常識が他の会社の非常識。年齢、会社での立場は皆違うが、皆、そんなことは気にしない。この活動を通じていろんな方の価値観、情熱、そして「殻」について知ることができた。半年前の開塾式には「場違いかも」と思っていたことが、実は全員同じように思っていたらしい。ほとんどの方がスーツで来たのは、開塾式は平日で、午前中に仕事をしていたかららしい。憂鬱で残

してきた仕事は何とかなったし、絶対に無理だと思っていたこの卒論もあと少しだ。はじめる前はいろいろ悩むが、終わった後は全部よい経験になる。産政塾であらためて感じたこの考え、そして知り合うことができた方々を大切に、これからいろいろ果敢にチャレンジをしていこう、そして、破りたいたいと思った「殻」はとりあえず破っていこうと思う。

最後になりましたが、小田桐塾長をはじめ、事務局の松井さん、スタッフの方々、訪問先の方々、塾生の皆さんには本当にお世話になりました。ありがとうございました。

「自分を振り返る」



アスモ労働組合

田中光明

<プロフィール>

- たなか みつあき (36歳)
- 1969年11月 京都府生まれ
 - 1988年4月 アスモ株式会社入社
部品製造部 自動機
 - 2004年10月 アスモ労働組合 書記次長
現在に至る

<家族> 妻、長男 (8歳)、次男 (4歳)、
長女 (10歳)

<趣味> オートバイ、パソコン、

【はじめに】

私は、アスモ（株）へ入社して17年間ずっと製造現場で汗と油にまみれひたすら物作りに打ち込んでいた。そして、16年目に人生の転機が訪れ、労働組合の役員として従事することになった。「物作り」から「人創り」への挑戦。働く環境も¹⁸⁰違う中で戸惑いながら心機一転「慣れるより慣れろ」の精神で無我夢中に取り組んでいました。そして1年が過ぎ、そんな自分の中に少しずつ余裕がなくなり、現場にいた頃に比べれば自分の視野が広がったはずなのに行動は逆に空回りしていた。そこに産政塾というパンフの「殻の外へ」のキャッチフレーズが視界に入り、何をやるのか判らないがそのキャッチフレーズの言葉が今の自分を見つめ直すチャンスかもしれないと思い参加を希望した。

【産政塾に参加して】

第1回目は1月に開催され、期待と不安と言うより忙しさで気持ちの整理が出来ないまま産政塾へ挑んだ。熟生27名のほとんどが初対面で人事や組合出身、いろいろな業種、年齢も様々、この状況の中でどれだけ自分自身を見つめ直せるかと少しずつ気を落ち着かせ参加を希望した日の事を思い出しながら問いただした。そして、全体の話が終わり、これから半年間共に活動するグループ（私はAグループ）に分かれ、事前に考えてきた企画案を基にメンバーで企画検討。企画案の中には自分がやりたいことや会社の現状を踏まえ必要な事など、その中で「職場に笑いが無い」「冗談が言える雰囲気

気もない」という言葉はなんとなく何処の職場も同じように感じた。特に、メンタル面は社会的な問題として企業もメンタルヘルス等に力を入れているが、現状は事が起きてからの対策になっている。しかも、個人への対応しか出来ない現状である。出来ることなら問題となる前に手を打ちたいし、個人の意識の問題もあるが、その問題が起きない職場環境や人間関係にしていきたい。そんな思いから我がグループは「笑い」をキーワードに企画を検討することになった。参加する塾生に「何を得てもraithたいか」、「何が足りないのか」、「何を望んでいるのか」等、真剣に考えれば考えるほど非常に難しくなってしまう。でも、産政塾は自由に何をやっても失敗しても良い、自分達が納得出来る企画を全員でやる事が目的で結果的に参加者へ何かが伝われば良いのだと勝手な解釈で「笑い」について論議を深めた。しかし「笑い」は幅が広く、奥が深い。人を笑わせるセンスやしゃべりの技術は長い修行と努力である程度まで行くと思うが、やはり相手（聞き手）があつてのこと。相手の表情やその場の空気を瞬時に読み取るバランス感覚は天性に近い。そこまで追求する事は出来ないのです、その要素を兼ね備えている笑いの宝庫といえば大阪の吉本しかないと言ふことであつたり決まつた。また、笑いだけでは無く、更に、付加価値を付ける目的で笑いが医学的にも研究され健康面にも影響があるとふことで無理やりドッキングさせ、私たちが開催する第2回産政塾は「笑い与健康」の2つの柱で企画を進める事になった。そこからは、リーダーを中心に各地へアプローチ。怪しい集団の集まり「産政塾」の看板を背負い「吉本」へメンバー全員の思いを伝えるに大阪へ行くが、そこはやはり商いの町「大阪」話を聞いてあつさりで見積もり段階で不成立と出鼻をくじかれた。また、健康の名古屋チームは心理学を研究されている大学教授の下へ行き、こちらは事務局の配慮もあり簡単に契約が成

立した。「笑い」もメンバーの努力により何とか別の団体と契約が成立し、晴れて当日を迎えることが出来た。この企画の最大の落ちは、塾生同士がコンビを組んで漫才を体験すること。たかが漫才の実演であるが、その体験を通じて産政塾のキャッチコピーでもある「殻を破る」という体験が出来ればという浅はかな野望もあった。でも、実際にやってみないと判らないという不安の方が大きかったが、真剣に練習している塾生の姿はとても感動的だった。いざ、本番。もちろん、どのチーム素晴らしい漫才の数々、同じ内容とは思えないほど個性豊かで笑いが止まりませんでした。演技している方も観客として見ている方、共に表情はすばらしく、特に笑い顔は「最高」で見ている方も凄く良い気分だった。こんな笑い顔が毎日、職場で見られたらほんとに最高だと思う。自分だけでなく周りに与える影響も大きい。私自身、笑いを提供する事など無謀に近いが「笑顔」なら気持ち悪いけど提供できる。「笑顔で挨拶しよう!」と心に決意した。企画から開催までは期間も少ない状態で全員揃った打ち合わせも数回でしたが、個々の役割と責任感から成し得た結果だと思えます。結果的に振り返ると、このセミナーを通じて塾生同士の「輪」が広がったようにも感じた。

後は各グループの企画に参加するだけと安気にしていたが、自分のスケジュールの調整不足から参加できたのは第4回目の「日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ」の1つでした。この企画へは物作りの会社に勤める以上、必須セミナーと心に決めていた。技能伝承は企業でも深刻な問題とされており、ベテラン社員の技能が若い世代に伝承されていない。そして、職場のOJTが行き届かないほど高負荷が続ぎ、人材も不足している状態で職場も悩み苦しんでいる。このセミナーを通じて何処かにヒントがあるかもしれないと期待と共に挑みました。しかし、日本が誇る物作りの伝統工芸の伝承も受け継

ぐ人が少なく低迷しつつある事を知りました。このセミナーの舞台は京都の伝統工芸専門学校、講師の物作りに対する「熱い思い」や生徒の言葉から「自分の人生はどうあるべきか」「物作りとは何か」「物作りを通じた人創り」を改めて考えさせられた。伝統工芸は儀式や形式を大切にし「心」を引き締める為に「形」を重んじている。企業に置き換え考えた時、「形」が先走り「心」の部分の為では無くなつた。儀式や形式の意味を深く考えず無駄だと思ひ込んでいた自分の未熟さに呆れてしまい、17年間、私が思ひ描いていた物作りは「物作り」に毛が生えた様な浅はかな考えに過ぎないと気付くと同時に脆く崩れ去った。また、企業・組織として必要な「伝える」という事に対しては徹底的に力を入れている。「伝わらないのは伝える方が悪い」という事に對しては最後まで徹底的に伝える。組織として当たり前の事、それが一番難しくちゃんと出来ていない。その理由としてコミュニケーションが悪い等と言われているが、実際はちゃんと末端まで思ひを伝える事が出来れば、伝える事を通じてコミュニケーションは取れるはず。実際は、そこに主観的な考えや個人の感情が入り交じり複雑化し簡単な事なのに難しくしているのが現状。また、「ものづくりとは」の問いに對し「どれだけ周りに氣を使えるか」という講師の答えは、とても印象深く心に残っている。ある管理職さんの口癖で「人を大切にしない組織（企業）はダメだ」という言葉と合わせると、物作りに限らず何をするにも「人」との関わりは欠かすことが出来ないし、何をするにも「人」だと。人を思いやる事の大切さを改めて考えさせられた。後は、自分自身の腹にちゃんと落とし実践するのみである。更に今回は、伝統工芸を学ぶと言う事で陶芸に初めてチャレンジした。回転物の加工なら少しは仕事の感覚が残っているので余裕だろうと挑んだが、椅子に座り轆轤を回した瞬間、全然歯が立たず「物

作り」の技術まで崩れ去ってしまった。(笑い)

【殻】こつこつ

産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」。産政塾へ参加するまでは「殻」について真剣に考えた事はありません。ただ、自分の弱点や不足している所については考え、それなりに取り組んで来たつもりです。でも、やっぱり100%とは行かない。そこには方法や視点、志の違いがあるかも知れませんが、そこに何となく自分の中で出て行けないという事実と「殻」に関係があるかもしれません。そして、新しい環境や仕事の中で新たな気持ちで頑張っている、いつしか、今まで身に付いた考え方や物の見方に戻ってしまい失敗を経験している。そこにもその環境化の中で築き上げてきた自身の中にある「殻」と関係があるのでしょうか。そして、その「殻」について議論した時、いろいろな「殻」の考え方がある事に気付きました。ある人は「殻を感じたことない」や「自分の限界や弱点」等、人は十人十色と言われる通り様々な殻への考えがありました。また、「殻」を破る方法も同じく様々で「自分の分析や人からの後押し」等。その反面、時には「殻」を作りそれを理由に自分から逃げていく部分も正直言っているのも事実。殻とはなにか。その時の状態や体調、環境、意識にも左右され、強い思いや志があれば消え、中途半端や弱気だと現れプラスにもマイナスにも殻は心を変化させる。その殻を破る鍵は、「人」にあり、その鍵を使うのかどうかは自分自身「心」にあるのではと思う。

【最後に】

今回、多くの人との出会いや様々な人を通じた体験から新たな気付きや発見が沢山ありました。気付きや発見は自分と違う考え方や視点の違いと触れる事により変化が起こり、心にも変化が伝わる。しかし、その変化は一過性のものである事が多く、やはりちゃんと腹に落とし維持し続ける為には、「強い意志」と「人と関わる事の大切さ」を改めて感じさせられました。Aグループの皆さんを初め、第17期生の塾生の皆さんや事務局の皆さん、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

「全力疾走」



株式会社豊田自動織機

野田 雅子

<プロフィール>

のだ まさこ (27歳)

- 1979年 愛知県名古屋生まれ
- 2002年 ㈱豊田自動織機 入社
グローバル人事部配属 (採用担当)
- 2005年 部内異動 (育成担当)
現在に至る

<趣味> バレーボール、スポーツ観戦 (特に社内の女子ソフトボール部とラグビー部の応援)、ドライブ

● 出来事・回想 ▲ 新たな発見▽

10月9日（祝）朝7時半、青空。目的地のセントレアへ出発。片道40分の道のり。前日のF1第17戦日本グランプリを観に鈴鹿へ来ていた、学生時代の後輩を見送るため、愛知の仲間で現地集合する。沖繩行きフライトは9時発。早朝でまだ交通量の少ない知多半島道路を南へ向かう。途中で常滑方面へ右にカーブを切るあたりは、空に吸い込まれるようで気持ちがよい。

数ヶ月前に訪れた際のCグループ企画について、様々な光景がよみがえる。セントレアの営業部長の尾頭様がお話しくくださった、官民合同で新空港を造る様子や顧客満足度を上げる取組みについてのお話はスケールが大きく、興味深かった。パワーポイントの画面でグラフを滑り降りてきた、マスコットのかもめちゃんのユーモアには心をくすぐられた。準備段階から大変お世話になっていた高橋様に快くご協力いただいた景品買出しは、かつての修学旅行でお土産を選んだ時の感覚と同じでわくわくした。「セントレアにまた来たいと思わせるには」の課題に対する最優秀提案賞、Aグループ「フーの相棒計画」の加藤さんのプレゼン、景品をいっぱい抱えてうれしそうな品川さん松本さん。それから、私たちを和ませていただいた事務局の松井さんの「テレレ〜テレレ〜」演技。はつきり覚えていのに、はるか昔のことのように思える。

順調に走って、これで見送りにも間に合うな、と安心して駐車場入り口へ。ところが、なんとバイクの行き先が無い！P1通過、P2通過、P3・・・迷っているうちに場内を一周してしまった。遠くにバイクが停まっている駐輪場を発見、やれやれ。ところが、近づいて見上げると、看板には「従業員用」の表示が。警備員の人に尋ねてようやく辿り着いたのは、P1の一角にある、わずか15台納

まるかどうかの三角形の敷地の駐輪場だ。案内表示も直前まで無く、P1エリア内に入ってもしばらく不安だった。これではライダーに優しくない！名古屋方面から知多半島へは気軽にツーリングできる距離なので、止められるスペースとわかりやすい案内があれば、企画のキーワード通り「にっこり笑ってまた来たい」テーマパークだと思った。道の駅めぐりが好きな私には、いろんな食べ物や地元の特産が並び、様々な人々が行き交うセントレアは、ふと寄るのに魅力的な施設だ。数ヶ月遅れの私の提案は、「駐輪場の拡張と案内表示の改善」だ。実際帰る時には満車の状態だったことも証拠として付け加えておこう。自分達が企画したコンセプトの「視点を変えればアイデアが生まれる」を、思わぬ形で身をもって体験した出来事だった。

●ヒント1へ他者を知るV

「視点を変える」。これは私達Cグループがこだわったポイントだったが、その能力を磨くには、多様な考え方や生き方を知るのがベースになる。第17期産政塾に参加して、他社・他業種の方と仲間になれたのは本当に幸運だ。職場での顔と私たちが集まった時の顔は違うだろうが、こんな一面を持った方々が世の中を動かしているんだと思うと、「社会って面白い」と感じずにはいられない。学生と話をしていると、「社会人になると好きなことを出来なくなりますよね」とあきらめの境地で聞かれたことが多々あるが、17期の皆さんを思い浮かべても、そんなことないよね、と、自信を持って言える。産政塾の回を重ねるに連れ、もっと一人ひとりを知りたいと思い、私自身も遠慮なく発言し行動させていだいた。

実は、かつての私は自分のキャラを押し殺して周りに寄り添うスタイルだった。例えば、毎週一回児童と一日を共に過ごすという、学生時代の経験のこと。一人ひとりの言い分を聞いてみると、時間も体力もきりが無い。果てはしんどくなって、楽しみだっただけの時間が苦痛へと化してしまった。今思うと、当時は「人に嫌われたくない」「自分を否定されたくない」という思いが強く、八方美人だった。小学校6年生の通知表の教師からのコメントに、「やさしさはありますが、特定の友達をつくりましょう」というようなことが書いてあるほどだった。そんな私も少しずつ周りのお父さんお母さんや同僚の関わり方を観察し、そのうち自分のキャラを出して、私が楽しみたいと思うことに児童を誘えるようになった。

上述のことを思い出しながら、自分が興味あるものは他人も絶対興味を持つものだ、と大それた勘違いをしていたことに気づいた。自分の価値観が絶対で他はダメ（というより存在しない）。寄り添っているつもりが、実は「この子は今後こうあるべきだ」「こう対処しないと後で困るんだ」と、私の自分勝手な「相手の理想像」に引き込もうとしていたように思う。同じものに興味があつて一緒にやれば楽しいし、そうでなかったら横目で見ながら「あ、充実してるんだな」と感じてもらえれば良いことなのに。

現在も良くも悪くも「頑固だね」と言われることが多々ある。「他の人の考えだどうなるんだろう?」「どう変われるか楽しみだよね」という気持ちと余裕をもって「あ、そういう考えもあるんだ!」と受け入れることができたら変化を楽しく思えるだろうし、お互いもつと信頼もできると思う。自分以外のものを受け入れられないような「頑固さ」はどんどん破っていきたい。

●野田スタイルへ頑固に殻を破りにいく

自分の性格は「やると決めたらとことんやる」。おかれている環境とタイミングで没頭できるものを持っていることが出来たら幸せだなと思う。とことんやってみて、行き詰ったら周りを観察する。飽きたら周りを眺める。他に面白そうなものを探す。人によって「とことん」の度合いは客観的に見るときつとまちまちだと思うが、それは個人の主観でいいと思う。私の職場で向かい合っている席には社内のラグビー部のキャプテンがいるが、毎日毎日練習を積んで、人生をラグビーに注いでいる人の前で、「私も一年間没頭して女子ラグビーをやっていました」と言ったところで、きつと鼻で笑われてしまうだろう（から言えない）。けれど、確かに私は2004年1月から12月のちょうど一年間、ほとんど毎週日曜の練習と、そのための基礎トレーニングは毎日やっていた（補足…女子ラグビーは確かに存在するスポーツで、愛知には「名古屋レディーズ」がある）。今になるので告白すると、夏休みの一週間の休みはほぼ毎朝会社のまだ誰もいない芝のグラウンドに通った。ボールにボールをぶつけては跳ね返ってくるボールを拾って、またぶつけて、蹴り上げてダッシュして、そんなことを繰り返していた。確かに私の中では「没頭していた」時間だった。その前の私は、記録にも全く残らないレベルながらもバレーボールを小学校から学生まで続けてきた。ただ、就職して固定で所属するチームが無くなり、なんとなく「自分のレベルもここまでかな」と決めつけていたとき、女子ラグビーと出会った。何もかも初めてのことで、ボールの受け方や走り出すタイミングなど、少しずつでも感覚を掴めるようになるのとはとても楽しかった。覚える楽しさと、練習したいという欲求に徐々に駆り立てられた。現在はまたバレーボールのクラブチームに巡り会えて初心に戻り、以前より、今よ

り少しでも上手くなろうと、自分に挑戦するために練習している。チームメイトのレベルの高さに、ついていくのは大変だが、「次はどうしよう」「ここはこうしよう」などと考えて上を目指している今は本当に楽しい。

● ヒント2へ主体性V

産政塾全7回の会合のうち、第4回の京都「伝統工芸の技能伝承に学ぶ」を欠席して、考える機会を逃してしまったが、この「技能伝承」のテーマを考えるのにふさわしい機会を得た。香川県にて行われた技能五輪大会を10月21日(土)・22日(日)に見学した。技能五輪とは国内の22歳以下の青年技能者が種目別に技能を競い合う大会で、当社から出場した機械組立て、電気溶接等5種目の他に建築大工、和裁、美容など45職種がある。

開催地の高松市は、どこに行っても技能五輪ムードで盛り上げられていた。うどん屋さんのおかみさんにも、技能五輪に来たんでしょ、と声を掛けられた。今まで気にもしていなかった技能でも、競技として競われているのを見て、引き込まれるように立ち尽くして観た。昨年からひそかに応援していた選手を競技後に捕まえて、記念写真を一緒に撮らせてもらったが、それはもう現地に行つて良かった思い出の一つだ。競技中緊張感で張り詰める雰囲気の中、彼の真剣な眼差しは素敵だった。結果は銀メダルで残念ながら金には届かなかったが、「自分の実力を知り、改善すべき点などが見えた。この経験を、コーチとして後輩に伝えていくという新たな目標に向けて生かしていきたい」と、言葉は力強かった。過大評価はせず、過小評価でもない。自分の現状と課題をしっかりと受け止めて、次の

目標を目指している。また、別の種目にて昨年まで選手として活躍し、今年からコーチを努める彼は「アドバイスを受けたら一度はやってみて、やり易かったら取り入れる。でも、納得できないものは自分なりに変えてみる」とのこと。助言を聞く謙虚さと、自分で判断を下すことが技能をあげるのに必要ということだ。情報を取り入れつつ自分で選択し、納得して進んでいくのは、どの分野でも大切なことなのだと教えられた。彼らが今後どのように後輩に腕を伝えていくのか、自らがどのような活躍の場を広げるのかに注目して応援していきたい。

●節目へ未来へ▽

一ヶ月に1回、たった半年間の会合ではあったが、思う存分自分の個性を出して参加させていた。17期生で一番社会人経験の浅い私に、皆様本当に良くしてくださり、お世話になるばかりだった。見かけから入ったお笑い、キャンプで迷子事件など、様々な思い出をつくったが、今回の文集作成にあたっては、産政塾の会合で語る機会が無かったものを中心に述べてきた。皆様には「元気さ」を感じていただけたら、とても嬉しい。時代や季節や、人との出会いによる変化を楽しみながら、今後とも元気に過ごしていきたい。

「産政塾を通じて感じたこと」



豊田自動織機労働組合

長谷川 真次

<プロフィール>

- はせがわ しんじ (38歳)
- 1968年9月 名古屋生まれ
 - 1992年4月 株式会社 豊田自動織機に入社、1年間の工場実習(自動車の製造)
 - 1993年4月 情報システム部へ配属
 - 1994年1月 妻と結婚
 - 1994年4月 トヨタ自動車(株) 情報システム部門に異動(実習)
 - 1997年1月 情報システム部へ異動
 - 1999年10月 エスティ・エルシーディ(株) (ソニー(株)と(株)豊田自動織機との合弁会社) 情報システム部門に異動(出向)
 - 2003年4月 グローバルIT部へ異動
 - 2004年9月 豊田自動織機労働組合(専従執行委員)
 - 2006年9月 労働組合役員を退任し、グローバルIT部へ異動

<家族>

香織(かおり)、友香(ゆうか) 小学校5年生、
寛治(かんじ) 小学校2年生

<趣味>

散歩、パチンコ、音楽鑑賞(クラシック)

1、はじめに

楽しかった産政塾も、いよいよこの塾誌用原稿を書くだけとなった。産政塾が終わることをとても残念に思う反面、今、この目の前にある原稿を書くことに大変苦労している。いやゝ、ホント文章を書くのって難しい！

さて、私は産政塾への入塾に際し、「多種多様な価値観、考え方を受容・理解し、人間としての器を大きくする」ということを目標に掲げて臨んだ。閉塾式を終えた今、当初の目標を達成できたかどうか、自問自答してみたが、「よく分からない」というのが正直なところで、現時点では目に見える結果はない。しかし、産政塾に参加したことは、この先の私の人生において、プラスになると確信している。いろいろな人達との出会いがあり、話をした。その中で多種多様な価値観や考え方を受容したり理解したりすることは十分にできたとはいえないが、少なくとも、それらにふれる機会には恵まれた。加えて、各グループが企画したイベントの中から、普段忘れかけていた大事なものを思い出し、また、普段の生活では感じ得ないことを感じる事ができた。そういう意味でも産政塾に参加して良かったと思う。

2、企画への参加

私の場合、産政塾全7回のイベントに対し、開塾式、閉塾式と、各グループの企画2回、合計4回

参加することができた。全てのイベントに参加しなかったが、時間のつくり方が下手な私らしく、3回のイベントは欠席となった。大変残念に思うが、今後、非公式の「補習」があると思うので、そういう場を通して欠席分を補っていききたいと思っている。

△第2回…漫才を通し、ユーモア・笑いについて学ぶ▽

「笑い」についての企画は、私にとつて、気づきの場となった。笑わせることの難しさ、笑うことの大切さ、そして、近頃、心から笑っていなかった自分に気づいた。

【笑わせることの難しさ】

今回漫才に挑戦したが、見ているのとやるのでは随分違い、なかなか難しかった。塾生の皆さんがとても上手に漫才をすることを羨ましく思い、半面、自分の漫才には足りないものがあり、何が違い、どうすれば笑いがとれるのか：難しい!! パートナーとの息の合わせ方や、「間」の取り方がキモであり、これらが大切であるとのこと。頭では理解できるが、実際、具体的にどうすれば良いか？このあたりがまだ分からない。とはいえ、こういう技は、身につけていきたいと思うので、今後もしろいろな場面で試行錯誤しながら、自分の中に取り込んでいきたいと思う。

【笑うことの大切さ】

笑いのもたらす幅広い効果、「笑いは健康につながる」という発想が、今までの私には無かった。

非常に興味深い内容だった。先生から「笑う顔をするだけでも違う」というお話をいただいたので、今は、とりあえず一日一回笑う顔をするようにしている。この先、「笑いが健康につながる」ということが実感出来たらいいと思う一方で、健康を考えるなら、その前に禁煙が先かもしれない。

△第3回…命の尊さ・平和維持の重要性について学ぼう

この企画は、私の所属するグループで企画したテーマである。酒を酌み交わしながら、非公式な会合を重ね、メンバー全員がそれぞれの持ち味を活かし、力を合わせて作り上げた。結果、とても良い内容になったと思っている。

テーマの選定はすんなり決まった。私自身は、この「平和」についての企画内容説明を聞いたとき、「ビビビッ」ときた。自分の考えてきたテーマ案をすぐさま取り下げ、この案に賛成した。他のメンバーも同じような感じだったように思う。具体的な検討をする断面では、予算面が一番気になるころだったが、他のグループの協力もあり、何とか枠内におさめることが出来た。工程としては、第二次大戦当時、特攻隊に在籍されていた外園様の講演を皮切りに、知覧にある特攻平和会館、翌日、海上自衛隊鹿屋航空基地へ訪れるという内容。鹿児島県を反時計回りに巡る一泊二日の強行スケジュールだったが、心に刻むことの多いイベントとなった。また、各所へはバスで移動したが、このバスの運転をしていたいただいた中間様との出会いがあったことで、このイベントが更に良いものになった。

【外園様の講演、特攻平和会館】

かつて特攻隊に所属されていた外園様の講演を聴き、その後、知覧の特攻平和会館を訪れたが、そこには、特攻隊として飛び立ち、命を落とされた方々のいろいろな想いがあった。今、我々が当たり前のように感じている「平和」は、この特攻隊員の方々をはじめ、戦争で亡くなった方々の上にあるということ強く感じた。また一方では、命の尊さ、誰もがいつかは必ず訪れる「死」と向き合う勇氣、生きている間に出来ること、自分の役割など、普段忘れかけていたものを思い出し、自分を振り返る良い機会となった。

【海上自衛隊鹿屋航空基地】

特別に基地の中に入れていただき、普段は見ることが出来ない部分まで見せていただいた。自衛隊に対しては、いろいろな視点から賛否両論あると思うが、少なくとも今、我々は、見えないところで自衛隊の方々に守られている、ということがよく分かった。

【スーパー運転手・中間さん】

最後に、この企画を語る上で忘れてはならないのが、今回バスの運転をしていたのだ、中間さんではないかと思う。今回の企画では、予算上の都合でバスガイドがつけられなかった。そのため、我々は事前に下見をし、手作りのガイド冊子（力作!!）を作って、当日に備えた。当日のガイド&トークもバッチリ。これはいいぞ、と思っていたときに中間さんのガイド&トークが始まった。詳しく楽しいガイドをしながら、大型バスの運転もする。その姿を見て、最初は少々びっくりしたが、結

果、今回の企画がより充実し、楽しく、そして中身の濃い内容になった。中間さん、ありがとうございました！

3、私にとつての「殻の外へ踏み出す」とは

私にとつての「殻の外へ踏み出す」とは、「高い目標に向かって、まずは勇氣を持って挑戦する」ことだと考えている。結果、その目標が達成できれば更に良いが、仮に達成できなかつても、挑戦した分だけ自分が磨かれ、やがてその挑戦は自分の身となり骨になると信じている。そして、挑戦する資格を得るために、日頃から自らを少しずつでも磨いていく努力も必要だと考えている。

【過去の振り返り】

自分自身が今までどういう形で殻の外に踏み出してきたかどうかを振り返ってみると、残念ながら、自らの強い意志によって踏み出したというよりは、踏み出さざるを得ない状況があつて、ある意味仕方なく踏み出したものが多いように感じる。それはそれで、踏み出さないよりはマシだと思ふし、また、全てに渡つて踏み出すよりも、必要な時に踏み出す方が良い場合も多いと思つている。（ちよつと後ろ向きかも？）

そんな私でも今までを振り返ると、自らの強い意志を持つて踏み出した、他の人にはあまりないと思われる経験が二つある。その一つは、社会人になってから学校（大学院）に通つたことである。

(ちなみに、もう一つは、労働組合の専従執行委員選挙に立候補したしたこと。) IT部門の中ではあるが、いろいろな職場で経験を積み、また、他の会社の人と一緒に仕事をする機会に恵まれたことで、私は(当然といえば当然だが)社内では通用しても社外では通用しないものが多いことを痛感した。そして、自分の目指す「どこでも通用するシステム屋」になるには、仕事が一と通りこなせるようになったタイミングで、社内でも得られる知識・情報に加え、外からも多くのことを取り入れたいと思うようになり、結果、自分の?を解決するための勉強の場として、私は大学院へ通うことを選んだ。

【大学院】

大学院では、自分の選択した研究テーマ(事業部制と情報システム部門をキーワードにした経営組織論からのアプローチ)や、いろいろな講義(難しい講義もあるが、トヨタ生産方式という講義もある)の受講など、本来学校で学ぶべきものの他に、産政塾と共通する部分であるが、いろいろな人との出会いを通して、多種多様な価値観、考え方を受け止める場にもなった。海外からの留学生と話す中で、「ハングリーさに欠ける日本人」を痛感したことを今でも覚えている。

学校に通うために、結構なお金を使い、家族に迷惑をかけ、時間をつくる難しさをいやというほど味わった二年間だったが、私にとっては、使ったお金や時間以上に大きな財産を得られたと思う。

5、最後に

今、会社の中は、自由な職場に向かっているというよりは、コンプライアンス、内部統制、ISO などなど、今後ますます制度化、マニュアル化が進み、規則や基準で縛られるようになっていきそうな雰囲気がある。規則や基準をつくる人にとっては、この機会がプラスになると思うが、それらが制定された後は、作ったマニュアルに沿って、何も考えずにこなしていく人が増えるであろう。私自身もそうなる可能性がある。そうならないためにも、今後も産政塾で出会った塾生のみなさんとながりをもち、いろいろな面で刺激をもらいながら、自分自身を成長させていきたい。より多くの発想を持ち合わせ、挑戦する心を持ち、人の上に立ったときには、いろいろな人を活かすことができるようになることを目指して、今後やっていければ良いと思っている。

最後に、今回、産政塾に参加する機会に恵まれ、いろいろな経験をする事が出来たことは、とても幸せなことだと思ふと同時に、今後も良い経験が出来る場として、産政塾が続いていくことを切に望みます。小田桐塾長、事務局の松井さん、塾生の皆さん、私を産政塾に送り出してくれた労働組合、私を労働組合に送り出してくれた組合員の皆さん、そして、私を支えてくれている人皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございます。

以上

『殻』ドコドコ？



東邦ガス株式会社

樋山卓造

<プロフィール>

- ひやま たくぞう (31歳)
- 1974年12月 愛知県蒲郡市生まれ
 - 1997年4月 東邦ガス株式会社入社
 - 2002年4月 人事部へ異動
現在に至る

<家族> 妻、娘

■はじめに

私には娘がいる。産政塾に入塾した時はちょうど1歳になったばかりだった。同じぐらいの年代が集まっているせいかもしれないが、私の所属したDグループのメンバーには全員子供がいた。打ち合わせ中や移動時間によく子供の話をしたことを覚えている。参考になる話、反省させられる話、いろいろな話を聞くことができた。

塾誌を書いている今、娘は1歳半を過ぎ、最近の意味の通じる言葉をよくしゃべるようになった。そんな娘の言葉の中から、私が産政塾を振り返るにあたってびつたり言葉を見つけた。それは人や物をさがすときに言う言葉　「ドコドコ」。

産政塾を今振り返ってみると、私の産政塾は最初から最後まで「『塾』ドコドコ？」だったのではないかと思う。

娘の話を冒頭に書ける文章は、会社では後先これ限りかなと思いつつ、「『塾』の外へ踏み出す気持ちで、この言葉をタイトルに塾誌を書いてみようと思う。

■『塾』ドコドコ？

産政塾のテーマ「塾の外へ踏み出そう」。

最初にこのテーマを塾生募集の案内で見たとき、聞いたことがあるような言葉だけど、前向きでい

言葉だなど思った。またそれと同時に、『殻の外へ踏み出そう』と言われても『殻』が何なのか具体的にイメージできず、『殻』って何?という感じであった。逆に『殻』が何なのか分かれれば、外へ踏み出すことができるのではないかと考えた。開塾式の自己紹介の中で、「産政塾の企画を通じて、自分にとって『殻』が何なのかを見つけない」と言ったのもそんな気持ちからだった。

『殻』については、開塾式から閉塾式までの7回の企画に参加する中で、他の塾生といろいろ議論することができた。ここで簡単ではあるが、各グループの企画で印象に残ったことを書いてみようと思う。いずれの企画も、私に『殻』が何なのか考えるヒントをくれるとともに、とても貴重な体験となった。

【Aグループ企画 明るく・楽しく・元気よく 笑って職場を明るくしよう】

円滑な人間関係づくりにおいて、「ユーモア・笑い」を活用することが、いかに効果的かということ学ぶことができた。

金城学院大学の森下先生が講演の中で、「笑いは、神様から人間だけに与えられた素晴らしいプレゼント。他人に笑いを与えることで、自分に笑いが戻ってくる。明るい人間関係作りに積極的に活用して欲しい」と言われたのがとても印象に残った。

また、漫才の実演では、松坂屋労働組合の松井さんとコンビを組んで、警察官のネタを披露した。松井さんのキャラクターのおかげで、賞をもらうことができたが、普段と違う自分を演じるということとは、非常に難しく、少し勇気があるものだと感じた。

【Bグループ企画】 日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ】

技能伝承に携わる先生方の講演や瑞光窯での陶芸体験実習を通じて、技能伝承への取り組みやその難しさ、人材育成の大切さについて学ぶことができた。

この企画の前までは、技能伝承と聞くと、正確な技能をいかに教えていくかという点が重要だと思っていたが、それよりも教わる側の人間性をきちんと教育・育成していくことが重要であるということを感じさせてもらった。

特に、京都伝統専門学校の工藤教授が言われた「教えるときは、最初の印象が最も大事。些細な事でも理由をきちんと説明し、徹底的にやらせ、定着させること。最初にいい加減なイメージをつけてしまうと後からはなかなか修正できない」「先生は見本、決して手を抜いてはいけない。見本は生徒の目指すレベルになる」という言葉は、会社の人材育成においてもあてはまることで、非常に納得できるとともに、今後の自分自身にも活かしたいと思った。

【Cグループ企画】 挑戦者たちの横顔 ～見えない気流に打ち勝つ翼を求めて～】

中部国際空港の民間ノウハウを活かした取り組みを学ぶことで、既成概念に捉われないことの大切さ、現状に満足せず絶えず挑戦しつづけることの大切さを実感することができた。

中部国際空港の尾頭営業部長の話聞いて、既成概念に捉われないようにするためには、従来のやり方を是とせず、本来あるべき姿や最も望ましい姿を目指して、新しい視点を大切に工夫・改善することが重要だと再認識した。また、新しいことに挑戦する場合は、好意的な関係者ばかりではない

ので、確固たる信念を持って取り組むことが重要であることを教わった。

【Dグループ企画 命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ】

私の所属するDグループの企画であり、企画段階から計画、事前調査、実施に至るまで、メンバー一丸となって楽しく取り組むことができた。豊田自動織機労働組合の長谷川リーダーを始め、Dグループのメンバーには本当に感謝している。

この企画では、太平洋戦争末期に特攻隊の基地であった知覧と海上自衛隊鹿屋航空基地（ともに鹿児島県）を訪問する中で、命の尊さ・平和維持の重要性、そして過去を知ることの大切さについて学ぶことができた。

知覧では、平和会館で特攻隊員の遺書や関係資料を見学するとともに、実際に特攻隊員であった外園徹さんから、当時の体験について聞くことができた。外園さんが講演の最初に、「特攻隊員を可哀想と思わないで欲しい、ありがとうと言って欲しい」と言われたのがとても印象的だった。いろいろな意味が込められている言葉だと思うが、恵まれた時代に生きている私たちは、特攻隊を過去の歴史としてではなく、現在に繋がる自分の身近な出来事ごととして捉えていく必要があると思った。

また、鹿屋航空基地では、日本や世界の安定のために、24時間体制で監視活動を行なわなければならない現実を知り、平和維持の難しさと防衛力の必要性について考えさせられた。

「Eグループ企画 豊かな生活とは く心豊かなライフスタイルを創造・体験しよう」

定光寺キャンプ場で最高の料理を作りながら、心豊かな生活やワークライフバランスについて考える企画であった。

グループ間での料理対決、キャンプファイヤー、花火大会。日付が変わっても夜空の下でビールを片手にいろいろな話で盛り、普段とは違う姿を見せる塾生も現れたり、「童心に帰る」という言葉がびつたりの本当に楽しい2日間であった。「童心に帰る」ことで、子供の頃は好奇心の塊で、先入観を持たず、何事にも積極的に取り組んでいた自分を思い出すことができた。

この企画は塾生の一体感をととても感じることができ、今後の交流を考えると、最後の企画として本当によい企画だったと思う。

■私にとっての『殻』とは

産政塾を終えた今、『殻』とは何かと聞かれれば、『殻』とは自分自身と答える。そして、人間誰もが『殻』であり、『殻』の違いがそれぞれの個性だと思う。

『殻』は、年齢を重ねれば重ねるほど大きくなっていくが、それだけでは限界があり、成長は鈍化していく。表面は硬くなり、形も決まってしまう。

もう一回り『殻』を成長させるためには、自分の『殻』を破り外へ踏み出さなければいけないが、厚くなってしまった『殻』を内側から自分の力だけで破るのは困難であるため、他人の『殻』と接触

し、外側の力を借りる必要がでてくる。そして、接触する他人の『殻』の形や大きさが、自分の『殻』と異なれば異なるほど、『殻』を破れる確率が上がるのだと思う。

自分の『殻』と大きく異なる他人の『殻』と接触するためには、先入観を持たず何事にも好奇心と向上心をもって行動することが重要であることを、産政塾の活動を通して感じることができた。そのことを絶えず意識していくことが、今後の自分を成長させる鍵だと思っている。

■最後に

小田桐塾長はじめ産政塾事務局の皆さん、そして17期生の皆さん大変お世話になりました。とても楽しく・貴重な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

また、産政塾に参加できる機会を与えてくれました会社、上司の方、職場の皆さんに感謝いたします。

産政塾に参画して



トヨタ車体株式会社

益 田 寛

<プロフィール>

- ますだ ひろし
- 1970年 豊田市生まれ
 - 1993年 アラコ(株)入社
 - 2004年 アラコ(株)会社分割→車両部門 トヨタ車体に統合

<家族> 妻

<趣味> ドライブ、お酒

△はじめに▽

産政塾に参加するにあたって、一つ明確な目標をたててみた。

『塾活動はもちろんグループ会合を含め「皆勤賞」を目指す…』

単純で幼稚な目標にみえるかもしれないね。しかし自分なりに熟慮して定めた目標です。目標をたてる際に考えたことは、①明確であり、②無理ではないが努力を要するものであること。

産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう。」という非常に難しいテーマです。抽象的なものであり、産政塾の活動が終わった後に「殻をやぶったかどうか」わからない、言いようによっては何とでも言える曖昧なものでないでしょうか。（意志の弱い自分にとつては…）また、皆勤賞は簡単に見えて非常に難しい。業務の都合をつけるというのも大変だが、実は2月から三重県に転勤したばかり。土地勘がない為、近くに駅もない僻地に住居を構えた結果、産政塾の集まりがある日はいつも終電にギリギリ滑り込み、乗り遅れ午前様になったことも度々。幸いグループの会合（飲み会？）は配慮いただき、名古屋近辺で開催いただいた為、助かったが終電に乗り遅れた時のタクシー代は痛かった…

なんとも志が低く思えたが、開塾式に向かう途中で自分が思い掲げたのは、そんな目標でした。

△殻とは▽ 初めての顔合わせ▽

殻とはなんだろう… 自分のイメージとしては「殻を破る」↓「(いい意味で) 変わること」。何

かをきっかけに生まれ変わる、そんなイメージがあるが、最近自分は変わったのだろうか？結婚、転職、新しい職場、新しい人間関係。自分としては変わったつもりでいたが、果たしてどうだろうか？社会人を10年以上もやっていけば、転職・転職なんて世間では当たり前のことで、友人の中には離婚↓再婚という輩もいる。世間的にみればあまり変わり映えしない方ではないかとふと思う。10年来の仲のいい友人は転職10回以上。旧同僚（会社が分割・統合となったので別会社で離ればなれ）の同じ部署だった同期・後輩は皆海外に転勤している。「三重県なんて近いもんだよね」というコメント。そもそも自分が変わったのではなく、自分を取り巻く環境が変わっただけではないだろうか。人間そう簡単に変わるものではない。死にそうな目にも合わない限り、この年で急に変わるものではないだろう。

初めて参加した産政塾で、テーマの「殻の外へ踏み出そう。」を聞きながらそんなことを考えながら、自分のグループメンバーと初顔合わせをした。塾生の中でも特に濃いメンバーといった印象。産政塾に参加するまでもなく既に「殻」を1つも2つも破っけいそう。だが、堅苦しいところはなく、皆飲みに行くのが大好きといった感じで、第1印象としては、いいメンバーに巡り合えたなと思った。正直、塾生全員の名前と顔が覚えられたのは、2回目の企画の時です。同じグループの人事・組合の方が多いということで、見知った顔もみえました。2年前まで同じ会社（会社が分割）だった塩谷さんと再会できたのも嬉しかった。

△各グループ企画で感じ取ったこと▽

第1回 A班企画 『明るく・楽しく・元氣よく』

∴『ユーモア学の講演（森下教授）』と『漫才の実演（ワッハ上方）』

案内を見た時から楽しみな企画だったが、残念ながら1時間ばかりの遅刻。森下教授の講演は殆ど聞けなかった。2人1組で壇上にあがり、漫才を実演。一番バッターで、緊張してしどろもどろに。笑いは健康にいいという話だったが、自分にとっては「笑い」よりも「緊張」の半日であった。「テンプがよく、天然で笑いを取れる人」OR「見てて痛々しい」の2つに別れる。アドリブがきく人、マイペースで相方を引き摺り回す人、立っているだけで笑いがとれる人、この企画で塾生の個性がおおよそわかった気がした。そういう意味でも非常に有意義な企画でした。

第2回 D班企画 『命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ』

∴『元特攻隊員の講演↓知覧特攻記念館見学』と『鹿屋航空基地（自衛隊）見学』

九州の鹿児島ということで久々に飛行機に乗ることに。平日に戦争の記念館ということなので来館者もほとんどいないのではないかと思っていたが、老人の団体、修学旅行か社会見学といった感じの小中高生でかなりの込み具合。恥ずかしながら「知覧」と初めて聞いた時は、どういうところか全然イメージがわかなかったです。特攻記念館で見た数々の遺書。『おかーさん。おかーさん。おかーさん。（継母にあてた手紙）』お国の為の特攻だが、母親に宛てた手紙が多かった。こういう記念館と

か交通安全の映画をみたあと、しばらくは神妙な気持ちになる。この時の気持ちを忘れないことが大切ですね。

翌日は、自衛隊基地を見学。飛行機やヘリコプターに触れ（コクピットにも乗れた）、皆少年の様に（男性陣は）楽しんでいました。宿泊のホテルで砂風呂に入り、そのまま懇親会に： 帰りの飛行機の中で特攻で死んだ人の犠牲があつて、今の平和・繁栄があるんだなとふと実感しました。

第3回 B班企画 『日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ』

：『瑞光窯で陶芸チャレンジ（「ろくろ」体験）』と『京都工芸専門学校見学』

予想通り「意外と難しかった」ろくろでの陶芸。力をちよつと入れ損なうと予想外の形に：「殻の外へ踏み出そう」と言っているが、基本ができていないと個性など出しようがないことを実感。結局できあがったのは無難なできの小さな茶碗。ホテルで昼食をとった後、「京都工芸専門学校」で学校の先生や生徒・卒業生がつくった工芸品を見学。すばらしいできでちゃんと「製品」としてなりたっていることに感心した。

見学の後、京都工芸専門学校の工藤教授から、学校の教育理念・方針を伺ったが、きつと塾生の多くの人が共感したと思います。「個性なんてくそくらえ。」「手に職を持たせてきちんとか就職先させるのが学校の役目。」温和ながらしつかりとした口調で話される内容は学校への生徒への愛情に溢れていると感じました。社会人になると学校で教わったことと現実とのギャップを知り、「個性をのばそう」「ゆとり教育」そういったことに少々疑問を感じていたが、綺麗ごとではない本当の教育論を聞

いたと思いました。

第4回 C班企画 『挑戦者達の横顔―見えない気流に打ち勝つ翼を求めて―』

：『セントレア』を見学、空港立上げの体験談、空港内見学

官民が協力して1つのプロジェクトに挑戦。「規制」「前例」が大きな壁、いかに官民協力して壁を乗り越えるかを聞いているとちよつとしたプロジェクトXみたいな感じだった。「開港日の厳守」と「事業費の削減」の2つの大きな目標。面白かった（興味深かった）話は、業界の慣例から費用が高くなってしまう土砂の購入価格を「中間搾取」を抜き直接買い取ることにした時の話。「物騒な脅しがあり、本当に電車に乗る時は後ろに気をつけて乗っていた。」という話。命がけの空港づくり。

第5回 E班企画 『豊かな生活とは一心豊かなライフスタイルを創造・体験しよう―』

：『スローライフ・スローフードの実践』↓週末も使って、アウトドア体験↓創作料理
究極のカレーを作る

最後の企画であり、我がEグループの企画。事前に現地に行き（土曜日）、快晴の中、家族同伴でバーベキューをしました。子供同士の交流もあり、和やかな雰囲気。細部の分担も決まり、心配は当日の天気のみ：企画日当日、一番心配していた天気は快晴。どのグループも色々工夫して、印象に残ったのは「ホイール焼き」と「バームクーヘン」特にホイール焼きはビールにあつたな。採点・コメントを担当したけど、甲乙つけがたく順位をつけるのが大変だった。カレーが美味かった。

ビールも美味かった。花火が綺麗だった。手前味噌ながら最後の企画に相応しい、塾生が最もエンジョイした企画でした。また10年・20年後に同じメンバーでキャンプをやってみたいですね。「ちなみに、定光寺のキャンプ場より、自宅（三重県いなべ）近辺の方が田舎です。」

△最後に▽

産政塾の活動を通じて「殻を破れた」とか聞かれると、胸を張って「殻を破れた」とは言えないのが正直なところ。ただ、自分が今後、殻を乗り越えていく「きっかけ」作りはできたのではないかと思います。閉塾式の際に事務局長も「人の繋がり」ことを話しておりましたが、産政塾でできた人の繋がりが、この活動の中で一番大切な財産であり、また「参加（＝体験）する」ことが一番重要だったのでは（皆勤賞を目指すという当初の目標もあながち的外れではなかったのでは）、と思っています。

〔事務局の皆さんの調整や、グループ内の会合日時の調整、職場の協力 e t c もあり、おかげさまで、閉塾式の際に「皆勤賞」を貰うことができました。〕

知 行 合 一



中部電力株式会社
増 田 裕 介

<プロフィール>

- ますだ ゆうすけ (32歳)
- 1973年 和歌山県伊都郡九度山町生まれ
 - 1996年 中部電力(株)入社 三重支店 四日市営業所 お客さまセンター 配属
 - 1998年 長野支店用地部用地管理課
 - 2000年 本店 人事部システムグループ
 - 2003年 本店 給与・厚生サービスセンター
現在に至る

<家族> 愛妻1人、愛息2人(5歳・2歳)

<趣味> 傍図書館の書物を濫読すること。
(特に歴史小説)

はじめに

産政塾への入塾契機は、「中部産政研というところが主催するセミナーに参加しないか。」という上司からの何気ない（と思われる）打診からでした。

そのときは、さほど深く「目的・ねらい」等を考えもせず、「受講させてください」と意向を伝えたいような記憶があります。しかし、後日送付されてきた開催の案内通知をみて、「?????…」

問題提起のテーマが「殻の外へ踏み出そう」となっており、自分自身を見つめ直す機会提供の体験セミナー。そして、「組織の枠を超えて本音の議論」を交わすなかで、切磋琢磨し、自らを磨き、個人の成長と企業の成長をねらいとしているではありませんか。

運営方法や実施内容に少し戸惑いを感じましたが、「入社してから、早10年」が経過した現在もお、異業種の同世代の方との満足な交流もあまりできていなかった自分を見つめ直す絶好の機会と捉え、また見識と視野拡大が得られるよう前向きに、この産政塾に取り組もうと決意いたしました。

第1回 開塾式（平成18年1月23日）

思い起こせば、『次回以降の「テーマ」と「企画内容」を決定してください』と「短時間に関わらず無理難題なミッションを課す事務局運営だな」と始めは感じました（私自身、グループメンバー、そして塾生全員、初対面でした。）が、議論や検討を重ねるにつれ、「なんとかなるさ」という雰囲気となり、その後懇親会で、さらに次回以降の展開や繋がりが「楽しみ」と「期待」に変わってゆき

ました。

第2回 「明るく・楽しく・元気よく」笑って職場を明るくしよう（平成18年4月20日）

「笑い」の効用と有用性を講座で学び、続いて笑いの専門家（「漫才師」と「落語家」）に「テクニク」と「ツボ」を理論的に教えていただきました。（結構、笑いも計算された「パターン」があるのは驚きでしたが…）

その後、実際に塾生の前でコンビ漫才を披露することとなりましたが、貴重な経験をさせていただきました。これまで職場の中では、「ユーモア」や「笑い」を取り入れながら仕事を進めること自体意識したことはありませんでしたが、今後は「笑う顔に矢立たず」を意識して実践していこうと思いましたが。

でも、今振り返ってみると初回企画としては、漫才のネタ合わせや漫才披露は、メンバーとより親交が深められ、ベストなテーマ企画だったのではないかと思います。

第3回 「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」（平成18年5月17、18日）

現在、メディアでも話題となっている「靖国問題」や「憲法改正」、「戦争責任の総括」等、戦後日本が築いてきた「平和」が如何にして成立し、そして維持していくのかを考えるうえで、非常によい機会提供の場であったと思います。「知覧」の平和記念館や、さらに自衛隊の活動を見学できて、平

和の尊さと大切さを実体感でき、これまでの生涯でも特に印象に残る2日間となりました。

特に「知覧」に展示品となっている「遺書」や妻子への「手紙」の内容は、約半年経過した今でも私の心底に重いメッセージが残っており、鮮烈に思い起こされます。恐らくこの先ずつと、この重いメッセージは消えることはないと思います。

遠くて近い将来、愛息2人がもう少し大きくなり、自分で物事の分別がつくようになったときには、一緒に知覧の平和記念館を訪れ、同じ体験・想い・平和の尊さ・命の貴さを伝えてゆきたいと思いません。

第4回 「伝統工芸の技能伝承について学ぶ」(平成18年6月10日)

B班のメンバーとともに、企画し、実施したテーマです。自己評価として企画の「ねらい」と「成果」は、まずまず合格点以上のものに仕上がったのではないかとこの所感です。

昨今「技術継承」は、どの職場でも共通課題となっています。しかし、「伝承」を实践する立場となるとなかなか容易にはできないのが現状です。

これまでの自分の仕事内容を振り返ってみると、その殆どが「教え」を受け、その範囲内のものだけを実践する立場にありました。つまり、『守(しゅ)』・『破(は)』・『離(り)』の三段階で、『守』の終盤の局面にあたると思います。

『守』・『破』・『離』とは、指導者から何かを学び始めてから、ひとり立ちしていくまでに人は、『守』・『破』・『離』という順に段階を進んでいくことです。

『守』…最初の段階で、指導者の「教え」を守っていきます。できるだけ多くの話を聞き、指導者の行動を見習って、指導者の価値観をも自分のものにしていきます。学ぶ人は、すべてを習得できたと感じるまでは、指導者の指導通りの行動をします。そして、指導者が「疑問に対して自分で考えろ」と言うことが多くなったら、次の段階に移っていきます。

『破』…次の段階では、指導者の教えを守るだけでなく、破る行為をしてみます。自分独自に工夫して、指導者の教えになかった方法を試してみます。そして、うまくいけば、自分なりの発展を試みていきます。

『離』…最後の段階では、指導者のもとから離れて、自分自身で学んだ内容を発展させていきます。どの道にも必ず型というものがある。そして、繰り返し繰り返し、型の稽古をしなければならぬ。型は昔から代々受け継がれてきているが、実は少しずつ工夫が加わって次第に良いものだけが残されてきている。型は常に同じものではなく、変化しています。

受け継いだものを守り、現代に合わなくなったものを捨て去る。そこに新しく、独自の創意工夫を加え、それを繰り返し反復する。そして今までの型を越える、独自の世界や「オリジナリティ」を創り出していくことが大変難しいことであるが必要なことだと思えます。

でも、工藤講師の話にもありましたが、『技能伝承』は、日々『反復練習』・『基本の徹底』・『情

熱』…のあるのみですが、ホントに継続して実践することは難しいと実感するばかりです。(指導者と弟子それぞれの双方の立場においても…)

第5回 民間ノウハウをいかした空港のチャレンジから「殻を破る」秘訣を学ぶ

(平成18年6月27日)

ビックプロジェクトの内幕に従事された当事者から直接、お話をさせていただいたことが非常に印象的で、リーダー像のあるべき姿が「まさにそこにある」という感じがしました。

私もこれから先、会社(職場)における課題や問題解決に、様々なスキルやアイデアを要求(必要)され続けることになると思います。その際には、絶えず「情熱」を持って取り組むことができるリーダーでありたいと思いました。

第6回 「豊かさとは？」

諸事情のため不参加となりましたが、メンバーから作品の写メールをいただきました。優秀賞(?) バームクーヘンとカレーが大変美味しそうでした。人間の最低限度生活の基盤は、「衣・食・住」が足りて、まずはそこからだと思います。豊かな生活とは何なのか。また機会があれば、メンバーと意見交換を試みたいものです。

最終回 閉塾式。そして、果たして「殻の外に踏み出す」ことができたのか？

閉塾式では、全体の振り返りをメンバーとも致しましたが、個人的な総括所感は、産政塾に入塾でき、素晴らしい仲間と貴重な体験と時間を共有できたことは「本当に良かった」と実感しています。これまでの各企画・テーマを通して、実体験し、体感したことを再度まとめて直すとともに、趣旨である「殻の外に踏み出す」ことができたのか？について考察してみました。

◆「インプット（入力）」的な作業と「アウトプット（出力）」的な作業

このセミナーの特徴は、『体験』や『実践』を通して、多様な『発想』や『価値観』、『考え方』などに触れ、いかに自分が「殻（境界・壁・常識・未体験に対する不安：エトセトラ）」を纏って生きているのかを再認識（確認）できることにあると思います

たとえば、ある状況から得られる情報量が「一定」だと仮定し、その情報量をいかに自分の中にインプットできるかは、人それぞれ「感じ方」や「感度」によって違ってきます。また、その相対な質量も異なると思います。

さらに、それをアウトプットする作業（量）においては、違いが明確となり「個性」や「嗜好」、「体力（エネルギー）格差」などによって、「仕上がり」や「完成度」等もばらつき、一様同じ「結果」や「成果」になるとは限りません。

このインプットとアウトプットの間には、必ず「処理」という工程が存在しますが、この処理能力をいかに最大限、または高性能なものに高められるのが、今の自分に問われています。私は、この

問いの答えとして、常に「人と人とのコミュニケーション」を通して高めてゆくしかないのではと考えています。

天才や達人の入出力は、潜在意識（能力）と顕在意識（能力）の境界はなく、自由に潜在部分から「答え」を取って来ることができませんが、一般人はふつう「思い込み」でこり固まっていて、自分だけでは潜在部分までも到達できず、顕在部分のなかでぐるぐるすると堂々巡りをしてしまいます。

ところが、他人とのコミュニケーション（対話）や共同作業という外的刺激にさらされると、一般人でも思い込みを離れて潜在部分から「答え」を取って来ることができ易くなり、外的刺激によって「ひらめき」や、「ソリューション」が引き出されてくることができやすくなります。また、引き出された「ソリューション」は強制されたソリューションとは全く異なり、本人が積極的に『実行・実践』することができると思います。

そのため、より一層成長を続け、進化をするためには、絶えず多種多様な考えや価値観に触れるとともに、その中で実体験や対話を繰り返しながら、気付き（つまりやる気）を引き出してもらったり、支援を受けることで『自己革新』・『自己変革』することが、『殻』の外に踏み出す」ということではないかと、自分のいまのところの結論にしたいと思います。

◆果たして、「殻の外に踏み出す」ことができたのか？

陽明学に「知行合一（ちこうごういつ）」という言葉があります。

〈知はこれ行の始め、行はこれ知の成るなり〉（『伝習録』上）、〈知の真切篤実の虚、即ちこれ行、行の明覚精察の虚、即ちこれ知、知行の工夫、もと離るべからず〉（『伝習録』中）。

陽明学において、知_二心（心は人間を主宰するもの）と捉えられており、知が良知であり得るためには、人間のなかにある程度の実践的姿勢が必要であつて、知が何らかの実践的契機と結びついて、始めて真に良知たり得る、というのが、「知行合一（ちこうごういつ）」の含意であります。

つまり、「知行合一」とは、「学んだことは実践しなければ何の意味がない。」という考え方です。

現況、どちらかと言えば、インプット（学ぶ）を重視する傾向が強く、アウトプット（実践）の仕上がり、落第点すれすれのところを行ったり来たりしている状態で、とても合格・安全圏内のレベルには到達していません。

今後は、自分の「想い」や「情熱」、そして「実行力」を他人に対して、どれだけの影響（発信する側としての作用と反作用）を与えることができるのか、また、人間関係の「結びつき」をどれ程強固な関係を築き上げられているのかを、今以上に意識して取り組んでゆきたいと思えます。

最後に、小田桐塾長をはじめ、事務局の河原事務局長、松井さん。本当にお世話になりました。また、産政塾への入塾する機会とその活動の支援していただきました職場のみなさん。誠にありがとうございました。ございました。そして、第17回産政塾の塾生のみなさん。特に、B班のメンバー。今後とも、末永いお付き合い程お願い申し上げます。

「感謝」



松坂屋労働組合

松井 正 和

<プロフィール>

- まつい まさかず (37歳)
- 1969年 6月 愛知県生まれ
 - 1992年 4月 (株)松坂屋入社
岡崎店 服飾雑貨売場配属
 - 2005年 9月 松坂屋労働組合岡崎分会書記長
(非専従)となる

<家族> 妻、長女、長男 (2006年12月2日誕生!!)

<趣味> 一人旅

産政塾への参加

産政塾に参加してみたら、と声がかかったとき、産政塾というその名前からして「一体なにをする集まりなのか」と一瞬不安に思ったし戸惑いも感じた。産政塾発足以来、我が労組から塾生として何回か参加しているので、「塾の先輩達」に産政塾というものについていろいろ尋ねてみたところ、尋ねたどの先輩からも羨ましがられた。出来ることなら自分が再度塾生として参加したい、とも誰もが言っていた。「会合を通じていろんな所に行ける」という言葉には旅行好きの自分にとっては魅力的であったし、「他業種の同世代の友人がたくさんできる」という言葉には期待でいっぱいになった。

今までの自分

自分の過去を振り返ると、この愛知県に生まれ、真面目で堅実な両親に育てられ、楽しく悩みも無い学生生活を送ってきた。就職活動の時はバブル経済のさなかであり、苦労も無く希望の会社に就職した。妻と出会い、お互いの両親からも喜ばれつつ結婚して子供にも恵まれた。上を見ればキリが無いが家族仲良く暮らしていることにこの上ない喜びや幸せを感じている。しかし、ふと淋しくなることがある。何かが足りないのである。それは「いろいろなことを語り合える友人」である。デパートという職業柄、職場は女性中心であり休日も不定。そんなこともあり同世代の仲間と知り合える機会もあまりないので、そういう機会を欲していた。まさにこの産政塾こそが自分の待ち望んでいた場所

だ！とも思えた。そんなわけで他の塾生は当初どう思っていたのか本音は分からないが、自分は最初の開塾式が待ちどうしかった。

産政塾での活動

開塾式から8月の閉塾式までの7ヶ月間はあつという間だった。最初の企画は「ユーモア・笑いについて学ぶ」がテーマであった。いろいろな場所へ行けることを楽しみにしていた自分であったが皮肉なことに開催場所は自分の住む市内であり、電車でひと駅、という近さであった。しかも企画の内容が「漫才の実践」であり、なぜそんなことをしなければいけないのか、と一瞬戸惑いもした。もちろん今まで漫才をしたことはなく、経験してもいけないことを人前でする、ということに抵抗を感じた。ともかくにも△相方▽と練習をしていざ本番となった。順番は決まっていなく、やりたいコンビから演じていった。最初は面倒くさく抵抗を感じていたし戸惑っていたものだったが、次第に「ここで格好つけても、人の目を気にしても仕方ない。何事も言わなきゃ損だしやらなきゃ損だ！」と腹をくくった。相方と小声で「次に行こうか」とささやきあつて次の指名時に「はい！」と手を上げた。このときはまだ△殻▽とは何かがわかっていなかったが、今思えばこのときに殻を半分破っていたかもしれない。漫才は自分で言うのもなんだがまあ上手く出来て、審査員の特別賞をもらうことができた。そのとき賞品としていただいた色紙は今も部屋に飾つてある。

次の企画のテーマは「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」であった。これは我がDグループの主催であり、自分が発案したものであった。この企画で感じたことに關しては産政研のホームページに掲載していただいているので、この場では割愛する。下見の際や企画当日、Dグループのリーダーはじめ（自分以外の）メンバーが黙々と役割をこなすのを間近に見て感心しきりだった。Dグループのメンバーにしか分からない話で恐縮だが、下見先のフェリーの甲板で昼食のパンをかじりながらたくさん話をしたこと、帰路の鹿児島空港で芋の地ビールを飲んでさつま揚げを食べたことが印象深い。

6月には2回の会合があった。京都ではものづくりの素晴らしさを認識したし、中部国際空港ではコスト削減の重要性を学んだ。サービス業に従事する自分にとつては普段あまり聞くことの無いジャンルのテーマだったのでとても参考になった。就職活動の際、自分自身の性格やポリシー、夢や目標を考えに考えたうえサービス業（百貨店）こそ自分にふさわしいという答えを出した。それから10年以上が経ち、いろんな経験・苦勞をし、最近はサービス業の難しさを痛感するようになった。やや大袈裟に言えば「自分が夢見ていたサービス業とはなんだったのだろうか」「もつと他の道があったのではないか」「自分の選択は間違っていたのだろうか」という気持ちになっていた。しかし、他業種のメンバーの話聞いていて、それぞれどんな業種も仕事も素晴らしいが、サービス業の素晴らしさを再認識できた（もちろん他業種のことを否定するわけではない）。コスト削減や利益意識も大切だが、今後の課題となる環境問題や高齢化・少子化問題は経済的な側面だけでは解決はできない。そういう面ではハードよりソフト面がこの先重要視されていくのではないだろうか。

産政塾とは

今日は産政塾の会合だ、と妻に言う。「行くのが楽しそうだね」と言われたことがある。そのとき「みんなが自由に意見を交わせるし、変なしがらみも遠慮も無い場所だ」ととっさに答えたのだが、自分にとって産政塾とはまさにそういう場所であった。利害関係もなく、塾全体やグループ、という括り・組織はあるものの個人個人の考え方で行動し発言できる場所であった。とは言っても、そこは大人の集団であるからお互いが相手や周囲を尊重し協力する場所であった。

殻とはなんだろう

この17期産政塾には開塾式から閉塾式までの計7回、全てに参加することができた。産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」であるが、そもそもこの「殻」の定義が難しかった。自分なりの解釈では殻とは「自分の考え、やり方、価値観を守るもの（こと）」である。ポリシーを持っていると言えば聞こえはいいが、社会人になって10年以上も経つと情性に流され、固定観念というか諦め、チャレンジすることへの意欲が薄れつつある。自分に甘く、何かしらの言い訳を探し、周囲を頼ってしまう。しかしこの産政塾では新たな自分を発見することが出来たし、チャレンジ精神も芽生えてきた。各企画とも良い経験をしたし、毎回いろんなことを考えさせられた。企画そのものだけでなく、他のメンバーといろんな話をしたことが自分にとって大きな財産になった。業種も製造業、サービス業、公務

員と幅広かったし、人事担当から組合役員とバラエティーに富んでいた。もちろん一概には言えないが不思議と出身母体によってパーソナリティーも決まってくるような印象を受けた。自分が勝手に抱いたイメージで言えば製造業は意思決定が早い、迷いが無い。組合は人の意見を重視、まとめる。生まれながらの性格や自己分析をしたうえで、それぞれの会社・職業を選んだという面もあろうが、良くも悪くも組織によって人はつくられていくのだなと実感したりもした。

最後に　　くまわりの人たちへの感謝

最後にこのような素晴らしい場所を与えてくれた事務局の皆様、塾生のみなさん、ありがとうございます。大変感謝しております。自分は「非専従」の組合役員なので産政塾への参加も休暇を取つてのものであり、ついつい家族サービスもおろそかになってしまった。自分の行動をよく理解し毎回快く送り出してくれた妻に感謝したい。

「産政塾を振り返って」



株式会社デンソー

松本 雄一郎

<プロフィール>

- まつもと ゆういちろう (32歳)
- 1974年 8月13日 大阪府生まれ
 - 1998年 4月 (株)デンソー入社
現在に至る

<家族> 妻、長女(7歳)、次女(5歳)、
三女(4歳)

<趣味> 特になし

1、はじめに

入社して8年間、入社時と同様の気持ちで、熱心に仕事に取り組んできたつもりであった。しかし、がむしゃらになんでもやってみようとの意欲は、知らない間に無くしてしまっており、打算的に物事を判断する自分になっていったようである。それを証拠に、今回の産政塾に参加させていただくことになった時の自分の正直な気持ちは、真っ先に「面倒」との意識が浮かび、さらに「参加して自分にとって何かプラスになることはあるのか」というものであった。このように消極的な気持ちのまま、無理やり「会社の代表として参加することに意義がある」などと理由をつけ参加することにした。もちろん「殻の外へ飛び出そう」とのテーマすら、深く認識しないままに。こうして産政塾がスタートすることとなったが、参加するにつれて新しいことを体験・発見できることへの純粹な期待が芽生え始め、自分の中で失っていた好奇心やチャレンジする気持ちがよみがえってくる気がしていた。

テーマである「殻の外へ飛び出そう」に対して、自分なりに明確に答えらしきものが見つかったのではないが、少なくとも今の自分が失っていたものについては、はっきりと認識できた。そのことを振り返りながら、活動を通じて学んだこと、また、そこから自分が得たものについて述べたいと思う。

2、テーマ…漫才を通し、ユーモア・笑いについて学ぶ

(1) 企画段階

私が所属していたA班のテーマ「笑いを学ぶ」について、企画段階から振り返ってみたい。そもそも

も、このテーマはメンバーから「心の健康について学ぼう」との意見から始まったものであった。近年、メンタルヘルスケアが必要とされる従業員の増加傾向からも、職場において円滑な人間関係を実現していく手法を学ぶことが必要ではないかとの意見で一致し、簡単に効果が高いコミュニケーション手法である「笑い」について体系的に学ぶことを企画することとなった。

打ち合わせを重ね、次第に企画の全体像が見えてきた。笑いに関する講義を受けた後に、笑いのプロの指導のもと実践を行う二部構成で行うことにした。講義では、笑いを学問として研究している金城学院大学の森下教授に依頼を行い、実践編は名古屋に笑い道場を開講している吉本興業に依頼することにした。

私は、あまり深く考えずに吉本興業に依頼する担当を引き受けた。しかし、これが試練の幕開けであった。後日、吉本興業の営業担当に連絡したところ、謝礼金の金額提示が一桁違うとの理由で、わずか数分で電話を切られてしまったのだ。産政塾のテーマ「殻を破る」を今回の企画で実現するためには、実践の場が不可欠であった。

時間的な制約から企画案を見直しする余裕もなく、予備案であったワッハ上方という団体が主催しているお笑い体験教室に望みを託すこととなった。担当者に電話したところ、このお笑い体験教室は大阪府が伝統芸能の継承を行うために毎月1回演芸場で開催されていること、また過去に演芸場以外では教室を開催したことはないとの説明を受けた。やんわり断られていることがわかったが、私は電話で食い下がった。担当者から見れば、屁理屈に聞こえることはわかっていたが、ワッハ上方の設立の趣旨からして大阪地区以外での開催が求められていること、今後企業のメンタルヘルスケアなどで需要が見込まれるため出張教室が事業化されれば十分採算に合うことなど、何の根拠もないことをも

とに説得を行った。すると後日、直々に副館長の方から試験的にやってみるとの返事をいただいた。私達の思いを受け入れてくれたワッハ上方の皆様には心から感謝したとともに、仕事とは違った感覚の達成感を味わうことができた。そして、森下教授への依頼は他のメンバーが行い、何とか思いに沿った企画が実現できることとなった。

(2) 当日

森下教授の講義は、驚きの連続であった。ユーモアという言葉の語源が医学用語であったことや、笑いによりガン細胞を攻撃するリンパ球が活性化化したこと、糖尿病の治療効果を高める作用があるとの研究結果などを教えていただいた。偶然とは言いつれもない内容に、笑いは百薬の長であるとの言葉にも非常に説得力があった。また、笑うと脳内モルヒネとも言われる物質が生まれるため、これが気分を抑揚させストレスを取ることも教えていただいた。笑いに対して幅広い効果を学ぶことができた。実践編では、お笑い教室の講師を担当していた吉本興業所属の西川まさと氏、林家そめすけ氏の指導のもと、塾生二人一組で台本をもとに、全員の前で漫才を行った。塾生が台本をアレンジしながら積極的に漫才に取り組んでくれたおかげで、大いに盛り上がった企画となった。

(3) まとめ

塾生同士が会うのはこれが2回目であったが、笑いを通じて円滑な人間関係が構築できたことを肌で実感できた。つまり、笑いというものがもたらすコミュニケーション効果を目の当たりにさせられたわけである。私も含めてこれからリーダーとなっていく塾生にとって、職場活性化の一つの手法

を学べたことは貴重な経験であった。今後も笑いの効果を取り入れながら、活力のある職場作りを実践していきたいと思う。

また、ワッハ上方では病院を中心とした医療の場での出張お笑い教室の開催が決まったとのことである。ぜひ、笑いの効能を全国にひろげていただきたい。

3、テーマ…日本の伝統工芸の技能伝承について学ぶ

(1) 瑞光窯を訪ねて

06年6月10日、まず、午前中に京都にある瑞光窯を訪れ、インストラクターの方に指導頂きながら人生初の陶芸を行った。テレビでは幾度となく見たことのある光景であったが、土の柔らかさやろくろ操作の難しさなど、見るとやるのとは大違いであった。もちろん、作品は情けない出来栄であったが、陶芸の世界の一端に触れることができ、陶芸を趣味とする人の気持ち理解了。やはり、自分の手で実際にやってみる（つまり現地現物現認）が、とても重要なことだと改めて気づかされた。

(2) 京都伝統工芸会館を訪ねて

まず初めに、京都伝統工芸専門学校の工藤教授にお話を伺うことができた。伝統工芸文化継承のために心がけていることとして、技の継承だけでなく人づくりに力を入れていると語っておられた。教える側と学ぶ側双方の思いがなければ、継承はうまくいかないと話されていたのが印象的であった。

次に、京都大学大学院で技能伝承を研究している塩瀬氏から、研究内容を聞くことができた。特に興味深かったのが、なぜマニュアルや定量的なデータといった形式知では技能伝承が十分ではないのかという話であった。現代では、熟練者が持っている経験やノウハウを形式知化により伝承できると考えているように思われる。しかし、それだけでは足りないものがあり、それが暗黙知だとおっしゃっていた。例えば、徒弟制や同じ窯の飯を食うことがそれにあたるそうだ。伝統伝承においては、この暗黙知の伝承（＝価値観の共有）が非常に重要な役割を担っているとのことであった。

今回学んだ二つの考え方は、我々企業が抱えている問題に非常に有効なものではないだろうか。現在、2007年問題と絡めて技能の伝承が大きな問題となっている。技能伝承を行うためには、伝統技能と同様に、学ぶ側のモノづくりに対する思いが重要であるとともに、形式知化の力を過信せず、暗黙知とされているものの存在を認識し価値観の共有も含めて伝えていくことが重要ということだ。形式知と暗黙知、この二つが車の両輪として技能伝承に活かすことができれば、円滑な伝承を実現できるのではないかと感じた。

4、テーマ・・民間ノウハウを活かした空港でのチャレンジから学ぶ

06年6月27日、中部国際空港を訪ねて、空港立ち上げに携わってこられた尾藤様から「民間のノウハウを活かした中部国際空港から目標達成への取り組み」と題したお話を伺うことができた。もちろん、中部国際空港が官民合同のプロジェクトとして、紆余曲折を経て05年2月に開港したことは知っていた。また、予算超過・遅れが常識との認識があった公共事業において、予定よりも低予算・短期

間で空港建設を実現したことにとっても興味を持っていた。そのため、その今回のお話は、どれも興味深いものであった。特に、印象に残ったことは、官と民との立場を超えたプロジェクト運営の話であった。私は、官と民とでは立場の違いから、対立のようなものがあつたのではないかと思ひ込んでいた。しかし、実際はそれぞれ出身母体の文化の違いと考へたほうがよいとのことであつた。例えば、民間出身者がスピード重視の観点から80点の時点で企画を実行に移そうとした時には、官庁出向者は100点を取ることにこだわっていたそうである。また、事業の採算性からコストを切りつめることを実施しようとした際には、取得予算の使用を優先させようとしたこともあつたそうである。

尾藤様は、こうした考え方の違いに遭遇したときには、まずこれはビジネスであることを徹底的に意識させたそうである。リーダーの思いがメンバー全員を同じ方向に向かわせることにつながつていたように思う。思いを伝えその思いを共有することがプロジェクト推進の大きな力になっていることを改めて気づかされた。

企業においても同じことが言えるのではないだろうか。昨今のグローバル競争や技術開発競争において、グループ横断的にプロジェクトを進めることが非常に多くなつてきたように思う。一つの部署・一人の社員にできることは限られている。だが、それぞれが同じ思いのもと、知恵を集め助け合いながらプロジェクトに取り組む。こうした取り組み姿勢が壮大なプロジェクトを成し遂げる力になるのではないだろうかと感じた。

5、テーマ…新しいライフスタイルの創造・体験

06年7月14日・15日に、定光寺キャンプ場にてスローライフ・スローフードの実践というテーマで、各チーム料理作りに没頭した。条件は、究極のカレーを作ることに、一品以上の料理を作ることだけであった。チームごとに分かれて、創作料理に取り組んだ結果、各チーム個性的な料理が出来上がった。味も申し分なく、存分に各チームの料理を堪能することができた。そして、夜はキャンプファイヤーに花火と童心に返ってはしゃぐ塾生が見えていて非常に楽しい気持ちになった。また、その夜にはお酒を飲みながら、仕事の話を中心に夜が更けるのを忘れて話に夢中になった。話した内容は今となってはまったく覚えていないが、他メンバーからよい意味で刺激を大いに受けた一日であった。

7、やぶさけ

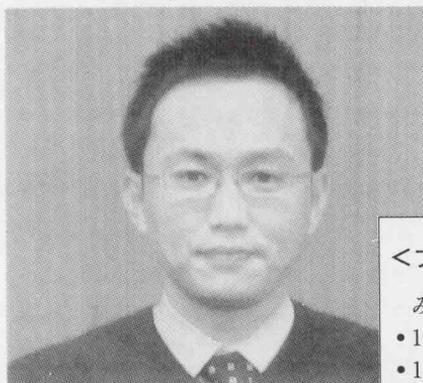
このように参加できた全4回の企画を体験させていただき、通常では得ることのできない様々なことを学ばせていただいた。

17期の活動を通して学んだことを、凝り固まった価値観や考え方をもう一度採みほぐす材料として有効に利用していきたい。そして、自らの可能性を伸ばすために、できることを最大限に頑張り、また次の目標に向けてひたむきにチャレンジする姿勢を常に意識していきたいと思う。何分、殻は必ずできてしまうものであるのだから。

最後になりましたが、小田桐塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また、塾生の方々、そして品川リーダーはじめAグループの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

以上

産政塾で学んだもの



豊田合成株式会社

水谷 雄一郎

<プロフィール>

- みずたに ゆういちろう
- 1973年8月6日生まれ
 - 1997年4月 セガエンタープライゼス 入社
 - 2001年3月 豊田合成株式会社人事部 入社

<趣味> 読書・ゴルフ・競馬

<特技> 9番アイアンでのノックダウン
ショット
血統予想による馬券術

◆はじめに

時の経つのは早いもので、上司からの「行つてこい」との指示のもと、訳もわからず開塾式に出向いてから早くも1年が経とうとしている。

各グループが趣向をこらしたそれぞれの企画は、通常の仕事や生活ではなかなか体験できないことばかりで、自分にとつて様々なことを感じる事ができた貴重な時間であつたと思う。そんな中でも私が活動を通じて、あらためて重要性を確認したことは、「グループでのまとまり」である。

我々、Bグループはよく言えば個性の強い人、悪くいえばわがままな人の集まりであつたと思う（失礼）。そんなわがままな人たちが集まつて何かやるといつても、普通はまとまるはずがない。というか、この活動がなければ、まとまろうとも思つてなかつたかもしれない人たちばかりだつたであらう（言いすぎか？）。

故あつて、グループのリーダーに指名されてしまった自分にとって、「このグループをどうやってまとめていったらよいのだろうか？」ということは常に悩みのタネであつた。しかし、今、グループでの活動を振り返つてみると、企画が進むにつれ、または会合を重ねるにつれて、いろいろな場面でそれぞれのメンバーが、自分の良いところ（時には悪いところも…）を存分に発揮し、結果としてグループでの一体感をメンバーとの間で共有できたのではないかと考えているし、自負もしている。

この産政塾のテーマは「殻の外に踏み出そう」である。自分にとつての「殻」とはなんだつたか、その外に「踏み出す」ためのポイントは何であつたのだろうか、我々のグループがまとまつていくプロセスの中で、私が考えたこと、感じたことを今回の学びとして整理してみたい。

◆「殻」とは何だったか？

「殻」とは何か。それはそれぞれの自分の考え方や行動そのものであったと思う。言い換えればそれはカラーであり、個性であり、価値観であり、その人「らしさ」でもあると考える。

我々のグループは個性が強い「殻」が固い集団であったと思う。グループでの活動で、まずぶつかったのが、意見の食い違いや葛藤である。それこそ、大きなことから小さなことまで。例えば、グループでの活動テーマを決めるとき、その内容を具体的につめていくとき、あるいは、セントレアの改善案を考えたととき、キャンプでどんなカラーをつくるかを決めるとき、砂風呂に入るかどうか迷ったとき、ガンダム好きかで採めたとき（これはちよつと違うか）…。

こうした意見の相違、考え方の相違というものは、いままで培ってきた考え方や価値観によるものだと思われる。メンバーは、当然、会社も違えば、仕事も違うし、趣味・趣向も違う。遡れば、誰一人として、いままで生まれ育ってきた環境が同じで、経てきた経験も同じという人（達）はいないのである。そうした中で培ってきた考え方や価値観が違えば、でてくる意見が食い違うのも当然なことである。

「殻」というものをそう定義すれば、「殻」をむやみやたらに破ろうとすることは、下手すると、安易な妥協、同調、ただ乗り、モチベーションダウンを招くということがわかる。活動を通じて、「殻」についてはネガティブな意見が多かったが、それは違うと私は思う。殻は殻で大事にしながら、外に踏み出すことが必要なのである。自分が自分に帰る場所を持っていないといけない。

私はグループの議論において、そうした場に直面するたびに、リーダーであるということもあり、無理に議論をまとめようと焦ることが多かった。しかし、結局のところ、自分の意見を押し通そうと

躍起になっているだけであつて、まとめることまで至らなかつたことが多かったのが現実である。今になって思えば、そうした各メンバーの意見の食い違いの根底にある、これまでの経験からの「考え方」や「思い込み」を理解しようとしなかつたからであり、またその背景にまでおよぶ「殻」に対する観察・洞察が不足していたのであろう。ただ単にあつまつて議論しただけではなかなかよい知恵はでてこないものだ。

では、うまく殻の外に踏み出して、よい知恵を引き出すには、グループとして最大限に力を発揮するためには、どうすればよいのか。そのヒントは、我々のグループ活動におけるメンバーの行動にあつたと考える。

◆「殻」の外に踏み出す3つの着眼点

① 「殻」を知ること

まず一つ目は、私が不足していた点として前述した「殻」を知ることである。その人の個性やキャラクター、良いところ、悪いところなど、その人のことをよく知ることだ。知ろうとすることだ。もっと言えば、その背景となつていゝ出身地からはじまつて、生い立ち、血液型、趣味や仕事、今の困り事、悩み事など、その人の背景にどんなものがあるのかを考えながら、その人の意見に耳を傾けることが大切である。

グループでのテーマ設定の打合せの際、我々はなぜか全て飲み会であつた。飲み会であるが故（かどうかはわからないが）、話の中心はメンバーの仕事の話、身の上話などが多く、本題のテーマについてはなかなか進まなかつた。私はリーダーとして、遅々として進まない議論に焦りを感じたことも

あったが、後から考えると、こうしたことがあったから、メンバー同士、「この人はこういう人で、今はこういう状態でこんなことに困っている」ということが自然に共有できていたのであろう。

こうした点で話を聴くのが抜群に秀でていたのが、メンバーの志岐さんである。ある種天才的な相植は、つい関係のない話まで引き出されてしまうのである。飄々とした感じで話かけられ、「ほう、なるほど」と言われてしまうと、「いや実はね・」などとまた話をしたくなってしまうのである。

コーチングなるものを勉強したての私も、志岐さんを真似て「ほうほう、なるほど」といったところで、今ひとつ相手の反応は鈍い。(というか、家庭で試したところ、妻に「なにがなるほどだ」と怒られる始末だ。真似る際は注意されたし。)志岐さんだからその話の引き出しなのかもしれないが、打合せ(飲み会)の席での志岐さんの静かな活躍により、我々はより一層、互いの「殻」について知ることができたのではないかと考える。

② イメージを描き切り、共有すること

殻の外にでるための2つ目の着眼点は、イメージを描き、共有することだ。段取りをイメージし切る。頭の中のイメージは共有しにくいので、紙に書く、絵で書いて議論する。こうしたイメージを土台に議論することで、それぞれの「殻」の違いを認識することができ、そこをどうするかという議論ができる。つまり、意見の食い違いが今度は論点として整理できるのである。

ここで光ったのは、サブリーダーである増田さんの交通整理術である。増田さんは話を元に戻す天才であると思う。話を元に戻せるということは、話の目的、流れ、位置付け、が見えているということであり、それは自分の中で、テーマに対するイメージが鮮明にあるということの表れだろう。よく

「何の話をしていたっけ」ということがあるが、増田さんに関してはそんなことは一切なかった。

我々の企画の打合せ、最初は発散しつ放しであった。「ものづくりのDNA」というアバウトなテーマは決まっていたが、議論はそれこそ、「そもそも何のためにやるのか」という目的にこだわるメンバーもいれば、「やっぱり伝統工芸は陶芸、陶芸は常滑だろう」という方法論に走る意見、はたまた「懇親会は飲み放題にしなければならぬ」など飲み会重視の意見など、どこの位置付けの何を話しているのか、さっぱりわからないまま議論をしていた。リーダーとして、私はできるかぎり議論の整理をしようと試みたが、結局自分も「いや常滑じゃなくて瀬戸だろう」などと巻き込まれてしまっていたのが悲しい限りだ。

そうしたとき、脱線した話を、「ところでさっきの話だけ」と、常に元に戻すのは増田さんであった。私は増田さんの描いているイメージを紙に落とすだけであった。そうして段取りのイメージを描き、議論を通じて共有することで、更に論点が明確になり、議論が活発になっていったのである。最終打合せでの激論は今でも忘れられない。（ちなみに脱線させるのは必ず井戸田さんであった。）

③ ユーモアとこだわり

3つ目は、ユーモアとこだわりである。議論をしてもなかなか結論がでないときがある。

ユーモアは柔軟な発想やアイデアをもたらし、こだわりは「らしさ」のある皆の共通の判断軸を生み出す。合理性や論理性も必要だ。ただし、単純な○と×だけで現実は動かない。もっと感性に、情感に訴えることが必要なのだ。自分達の想いを形にしていくなプロセスにおいて、周りを腹落ちさせるためには、こだわりの感性への訴えとユーモアによる独特のアイデアが必要である。

この点では前川さんのアイデア力はすばらしいものがあった。事実我々のテーマの原点は前川さん

のアイデアであった。また、その遊び心あるイタズラと言動は、メンバー全員に笑いと安らぎをもたらした。次のアイデアを生む土壌となっていた。また、加藤さんはグループに論理性をもたらした。その鋭いロジックは、我々の企画にストーリーリーとしての整合性に大きく影響した。一番、話を脱線させ、そして独特の空気を出したのは、井戸田さんである。あえて不親切にした案内や、品評会などのグループとしてのオリジナリティは、井戸田さんのキャラクターがなければ実行にいたらなかったであろう。わがグループにとってかけがえのない人であった。

こうしたメンバーの個性と行動が発揮され、我々のグループは数々のミッションをクリアしていった。このメンバーの一連の個性とその行動は、グループとしての成果に結びついただけでなく、リーダーである私にとっても、「殻の外へ踏み出す」大なる刺激となったことは間違いないことである。

◆「3人寄れば文殊の知恵」というまぼろし

「3人寄れば文殊の知恵」と言う言葉は、個人で何かをするより、集団でした方が平均的にすぐれた結果を生むということと、一人でやっていたときにはなかったものが、新しく生まれるということの意味している。

しかし、単に3人が寄り集まって仕事をともにするだけでは、その効果は期待できず、逆に個人で見れば、一人一人の依存をつくり、モチベーションが落ちるということを招く危険性の方が高くなってしまうことが多い。何もせずに、単に集まればよい知恵が浮かぶというのは幻想であることをまず、認識すべきである。

我々は、これからリーダーとして、自分の想いを形にしていく道を進むこととなる。しかし、どの

仕事をとってみても、一人で仕事をするということはほとんどなく、たくさんの方が関わり、協力しあいながら進めていくことになる。そんなときに、チームで、グループでよい知恵がでるか否か、その組織の力を最大限に発揮できるか否か、幻想を現実に変えることができるかどうかは、これからのリーダーである我々の行動次第であることがわかる。

この塾で各メンバーが自ら示してくれた考え方や行動からの殻の外に飛び出すための着眼点を胸に、明日からの自らの行動を律していきたい。

えっ、私はメンバーに対して、どういう影響を与えたかつて？

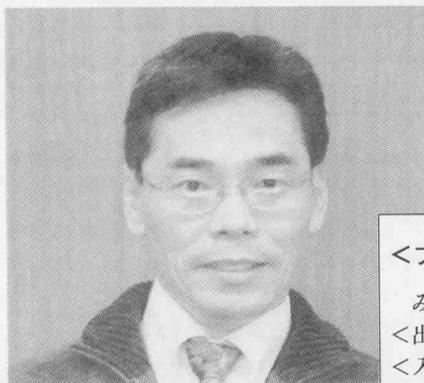
それはリーダーシップそのもの（という名の飲み会設定係）の体現かな…。

最後に

事務局の松井さんはじめ、今回の活動にご協力いただいた皆様には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。そしてBグループメンバーはじめ、塾生の皆様、また会う日を楽しみにしています。

以上

「産政塾に学んだこと」



トヨタ自動車労働組合
三谷 勝行

<プロフィール>

みに かつゆき (45歳)
<出身> 広島県
<入社> 1979年
<結婚> 1992年
<長男誕生> 1994年
<星座> おとめ座

<家族> 保味 (愛妻) 竜也 (長男)
チョコ (ハムスター♀)

<趣味> テレビを見ながらビールを“ちびちび”飲むこと! (うまいんだな!これが…)

今から1年ほど前、勉強嫌いの私が『塾』って聞いて「げえ〜！何で今更塾なの？」と思ったのが、つい昨日の様に思い出されます。その頃、私の長男も小学校5年生。誰に似たのか大の勉強嫌い。女房からは毎日のように「勉強しなさい〜！塾に行きなさい〜！」が息子への口癖になっていました。そんなある日、どうしても嫌がる息子に冗談半分で、「お父さんも塾に行くから、おまえも塾に行かないか？」と言ってみたところ、これが功を奏したのか、翌月から私も息子も『塾』に通うことになりました。

第1回会合　〜開塾式〜

緊張と不安の中、「開塾式」の日がやって来ました。「殻の外へ踏み出そう」と銘打ったテーマに「修行をしている僧侶」のイメージや、「青春ドラマの1シーン」のようなものを想像しながら臨んだ初めての会合、錚々たるメンバーが顔を揃えており、自己紹介では、皆やる気が全面に出ている感じで圧倒されました。しかし、その日の懇談会では一転、うち解けた雰囲気の中、以外に本音トークも聞けたりして、その距離は一気に縮みました。

第2回会合　「明るく・楽しく・元気よく」〜笑って職場を明るくしよう〜

よ〜し頑張るぞ！と氣勢を上げるも束の間、何と〜いきなり業務の都合ではあったが、参加出来ず（チッククショ〜！）『お笑いの神髄』を追求する事は私にとっては、とても興味深いものであっただ

けに非常に残念でなりませんでした。職場などで「コミュニケーション」の重要性が注目されている昨今、笑いのある職場づくりにも苦労している人も多いと思います。笑いの神髄を追求出来れば、きっと職場や家庭に生かせると思います。会合には参加出来なかったものの、その後の反省会には、
「ちゃっかり」参加させていただき、体験の雰囲気だけでしたが、参加したメンバーの心底楽しそうな話を聞いていると、参加できなかった悔しさが改めてこみ上げてきました。(チックショー！ぱーと2)

第3回会合　　命の尊さ、平和維持の重要性について学ぶ

私事ですが、私の出身は広島で、『戦争』については幼い頃から祖父母に体験談などをよく聞かされ、戦争に対する憎悪の念や、平和の尊さについて人一倍思い入れの強いものがありました。

この年の正月に田舎(広島)に一家で帰省したとき、「うちの息子にもそろそろ戦争の怖さや、平和のありがたさを教えてろうかな」と思い、広島『平和公園』にある原爆資料館を訪ねる事にしました。実は私もここを訪れるのは十数年ぶり、久々の訪問に何か感慨深いものを感じました。私を含め、戦争を知らない世代が圧倒的に多くなりつつある中、ふと私の脳裏をよぎったものは、「これから先、いったい誰が戦争の悲惨さを訴えて行くんだろう？」あと40年も経てば戦後100年。恐らく戦争経験者は一人もいなくなると思います。あの悲惨な出来事が、遠い歴史となってしまう、またいつか同じ過ちを犯してしまうのかなあ。私は資料館を拝観しながら、感慨深げに見回っている息子を横目に、そんな事を考えていました。それから数日後、産政塾の企画でこのテーマを聞いた時、なに

かとても嬉しい気持ちになりました。「若い世代の人でも、『戦争と平和』について真剣に考えているんだ」と思ったと同時に、改めて産政塾の参加者の前向きさみたいなものを感じました。

訪問先は、「鹿児島を知覧特攻平和会館」などで、そこには当時の貴重なものが数多く展示されていました。『お国』のために命を犠牲にして戦った若者たちの、出撃前の葛藤を物語るものや、最後の夜に両親や、友人に宛てた遺書は、今思い出しても涙が止まらないほど衝撃的で、やり場のない悲しい内容のものでした。死への恐怖、愛する人への惜別の思い、などなど、平和な時代に生きている我々には到底想像出来ないことです。『母へ』と宛てられた遺書。短い人生を思い浮かべながら、母親との想い出を綴った文面に「お母さん！お母さん！お母さん！」と幾度も連呼されていました。しかし、どの遺書にも一様に「お国のため」とか、「荣誉である」といったことも書かれてありました。今で思えば、尊い命に代えてまで、守るものや、荣誉などあるはずもないが、当時10代や20代の若者が、愛する国を守ろうとし、多くの人が犠牲になりました。その尊い命と引き替えに、今の平和があるという事も、私たちは決して忘れてはいけないことであります。

戦争体験者の講演会では、講師の深園さんのお話に改めて当時の様子を垣間見ることが出来、特攻隊の訓練など、実体験された方ではないと語れない貴重なご講話を頂きました。

我々は『戦争』を遠い過去の歴史として風化させることなく、未来へきちんと語り継ぎ、二度と過ちを繰り返さないことが、『平和』な時代を生きている私たちの使命だと強く感じました。

日本のものづくりの原点とも言うべき「伝統工芸」の奥深い技能と、それ故に、その技能伝承の難しさについて学ぼうというものであります。

まずは実体験ということで、陶芸工房『瑞光窯』にて、轆轤（ろくろ）での陶芸づくりに挑戦。慣れない手つきで粘土に触れ、ビール好きの私は『ぐい飲みコップ』にチャレンジする事にしました。イメージする作品づくりに向け努力するも、出来上がった作品は「なんじゃこりゃ！」ってものでした。何度か挑戦するうち、＼それらしい？（でも限りなくあやしいしい）＼ものが出来たときは、何だか感動ものでした。（ちなみに、閉塾式の後の反省会では、この＼ぐい飲みコップもどき＼でおいしいビールを頂きました。）

その後『京都伝統工芸館』では色々な展示品を見学し、『日本の伝統工芸』の素晴らしさや、匠な技の数々に改めて感動させられました。

その後、『技の伝承』についての講演会では、講師の塩瀬先生、工藤先生より、様々な方面からの技能伝承方法についてのご説明をいただき、「技を受け継ぐことの大切さや、教えることの大変さ」それ故の努力や苦労があることなど、少し立場は違いますが、私も同じ『ものづくり』に携わる者として相通ずるものが多く、よりよいものを造ろうという信念が＼ものづくりの原点＼であるということとを、大いに勉強させられた1日でした。

第5回会合 ～中部国際空港を訪ねて～

いよいよ我がCグループの企画である、中部国際空港「セントレア」の取材であるが、あろうこと

か自グループの企画行事に欠席という事態になってしまいました。開港間もない空港で、そこに働く人たちの人間模様や、現在抱えている問題、今後の課題などについて、これからの経営方針や人材育成など、巨大空港を運営する上での苦労や、努力等、『夢のある空港づくり』について個人的にもとても興味があったが、業務の都合とはいえ、参加できなくて本当に残念で、また、Cグループのメンバーに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。私的に、中部国際空港の将来あるべき姿に描いたものは、ただ単なる空港というイメージから、テーマパーク的な存在で、訪れる人が何度も来てみたくなるような、夢のある空港になればいいなと思っています。

今回、取材企画には参加は出来ませんでした。反省会等でのメンバーの話や、活動のフォーラムを拝見したところ、とても楽しい行事の風景や、有意義で実のある企画であった事を知り、改めてCグループのメンバーの凄さに敬服しました。常に物事を前向きに考え、情報の流れを的確に捉える事が、未来に躍進する原動力になると、強く感じました。

第6回会合　　自然とふれあい、自然に学ぶ

グループの企画行事としては最後の行事。真夏の野外行事といえはキャンプです。場所は定光寺キャンプ場。今回の課題は、夕食で各グループが限られた予算内で、いかに個性があり、かつおいしいものを時間内で作って、全員で品評会をして順位を決めるといふ、いわば各グループのコンビネーションや、創作力を競う、いわば『料理の鉄人』であります。各グループともアイデアを駆使した創作料理が、品評会のテーブルにずらり並び、どの料理もそれぞれに創意と工夫が凝らされており、最

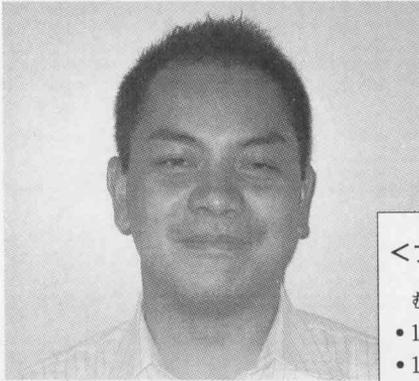
高においしかったです。夕食後は仲間と囲んだキャンプファイヤー。その後は童心にかえって花火をみんなで楽しみました。自然とふれあい、仲間と過ごす楽しいひととき。時間を忘れて深夜まで街灯の下で蚊に刺されながらも、ビールを片手に話し込みました。

ここでは、自然との共生、仲間の団結、友情の絆、というものを改めて実感しました。

第7回会合　　～閉塾式～

「殻の外へ踏み出そう」を合い言葉に会した産政塾。「殻って何だろう？」「どうやって打ち破るんだろう？」…などと思いながら臨んだ開塾式から、あつという間の8ヶ月間でした。正直、*「殻の外へ踏み出せたかどうかは分からないが、少なくとも色んな意味で『自信』はついたと思います。また、多くの人と知り合え、色んな話が出来たことは何にも代え難い大きな財産になりました。これからも『大きな壁』は幾つも立ちばだかると思います。そんな時、『産政塾で学んだこと』をこれからの『心の糧』として、仕事に、人生に役立てていきたいと思えます。最後に、事務局でお世話いただいた方々。また、色々な話をした17回生の皆さん、本当にありがとうございます。今回出会えた事を『絆』として、いつまでも忘れないでいきましょうね！*

簡単なこと



中部電力労働組合
村井 真一

<プロフィール>

- むらい しんいち (33歳)
- 1973年 2月 岐阜県美濃加茂市生まれ
 - 1996年 4月 中部電力(株) 入社
浜松電力センター電子通信課 配属
 - 1997年 8月 本店制御通信部 配属
 - 1998年 8月 長野支店工務部電子通信課 配属
 - 2000年 8月 静岡支店工務部電子通信課 配属
 - 2002年 8月 本店制御通信部 配属
 - 2005年 7月 中部電力労働組合 本部常任執行委員
現在に至る

何を書くかと思ひ悩んでいるうちに、ずいぶんと月日が経ってしまった。これ以上考えてみても直木賞作家になれるような作品は到底できそうにもないので、経験したこと、感じたことをとりとめもなく書くことにする。

いきなりつまずいた

開塾式ではグループの中の役割決めをするということから、前回の産政塾に参加した先輩からどの係がいいか、そしてどの係は避けたほうが良いかを事前に聞いていた。フォーラム係だけは避けるべきと。自信はあつた。自分が意見を言える場であれば、決して自分に不利になるようには事を進めることをしないからだ。しかし、いくら策を練つても策を打つ機会がなくなつてしまった。そう欠席してしまつたのである。前日からの高熱のため、とても出席できる状態ではなく、やむなく開塾式を欠席せざるをえなかつた。せめて、布団の中からお願いだけはしてみよう。フォーラム係には他の人に清き一票を！

後日、グループ割りとグループ内の役割を事務局から聞いた。見事にフォーラム係に当選した。やはり、布団の中からは願いが届かないらしい。世知辛い世の中である。おかげさまで、きつと生まれて初めてであろう、代表して物を書く係を受けることとなつた。さて、どのようにフォーラムを書こうか。少なくとも、フォーラム係になつたことの動揺、不満(?)だけは他の人に悟られないようにしよう、そう心に決めた。

ただではころばない

出席できなかった開塾式から2ヶ月ほどたったある日、グループの企画打ち合わせに参加した。自分にとって初めての産政塾の活動である。グループの他のメンバーは既に開塾式で、顔合わせもしていれば、企画の検討もしている。あきらかに出遅れている。とは言え、臆することは何も無い。事務局から送られてきたメンバーの顔写真を見る限り、明るそうな人たちばかりだ。逆に自分の写真があれば、自分が一番に要注意人物に挙げられるであろう。しかも国際指名手配されそうなの。企画の内容はどうか。これも問題はない。自分が納得できない内容には今後取り組むことはできない。言うべきことは言う。それが自分の信条でもある。

さて、いざ勝負。しかし、何を話したかさっぱり覚えていない。いつもは2、3杯でビールから焼酎に変えるのに、ひたすらビールを飲み続けたことは覚えている。緊張していたのだと思う、きつとそれ以外にも覚えていることがある。打ち合わせに同席してくれた事務局の松井さんも含め、非常に話しやすいメンバーだと感じたこと、笑いもあつて楽しく、それでいて真面目に話し合えたい打ち合わせだったことである。自分の意見も十分に言えた。もう出遅れてはいない。このメンバーであれば、きつといい経験ができる、そう思えたのも確かであった。そして、フォーラム係に対する迷いは一切なくなっていた。

はじめまして

第17期の初めての企画。そして、みんなと会う初めての場。事前に企画の内容を聞いていたので、いくら気持ちには楽だった。企画のテーマが「漫才を通し、ユーモア・笑いについて学ぶ」であり、漫才を実践する内容であったからである。笑い・芸は、得意分野である。限られた時間で、自分をアピールすることができる。初めてみんなと会う場としては申し分のない環境である。

笑いについては、昔から好きで、公私の場を問わず常に笑いがある環境を自然に体が欲している。学生時代には先輩の結婚式の二次会に出張で芸をしにいったくらいで、ピン芸、コンビ芸、団体芸、コンパでの盛り上げ役なんでもござれであった。しかし、社会人になってからは、友人の結婚式を除いては、芸をすることは無くなってしまっていた。芸をする機会がなくなったのも確かではあるが、学生時代のキレがなくなったからと自ら封印してきたのも事実であった。

この企画のなかで、漫才をすることができた。相手は、同期入社で新入社員研修の時に同じグループだった増田君だ。申し分ない。あとはどんなネタ作りをするかだ。吉本興業の芸人さんたちの漫才をVTRで見ながら、限られた時間で作ることができるネタを考える。もちろん笑いをとることが必須である。芸人さんと同じネタをそのままやっても笑いとはとれない。なぜなら本人がやっているのを見ながら見てしまっているから、笑いは起きない。申し分ない相手であっても一緒に芸をするのは初めてだ。即席コンビでも笑いがとれるネタ、増田君との掛け合いで笑いがとれるネタを考えた。ネタ合わせはスムーズなものだった。結果は優秀賞。学生時代のキレがなく若干不満に感じたが、久しぶりに笑いをとるためのネタ作りをし、相手とネタ合わせをし芸をしたことは、非常に楽しく充実した時間であった。社会人になってから閉ざしていた殻の中から、外の世界を見ることができた時間でもあった。

その日の懇親会で、遅ればせながら自己紹介をした。しかし、もう「はじめまして」は必要なかった。

ねがいかなわず

次なる企画「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」は都合により欠席することとなり、再びみんなと会うのは京都での「日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ」という企画であった。

まずは工房での陶芸体験。自分にとっては初めての陶芸体験。テーマを持って臨んだ。それは先生がお手本で作られる姿を、指使いから手の形、足の置き方、姿勢まであらゆるものを自分の目で見て学び、陶芸の基本となる作品を作ること、これに心がけた。しかし、残念ながら、過ちをしてしまった。自分の目で見て学ぶことに重きを置きすぎて、先生の話を聞き逃したために、焼き上がりになく碗を作ったのだが、小さすぎて下の子の茶碗になってしまった。ただ、作っている時に先生から「経験があるのでですか」と聞かれた時に、非常にうれしく感じた。なぜなら、先生の姿を見て学んだことを実践しようとしている時にそのような言葉をいただけたのだから、うれしくないはずがない。短い時間ながらに技能伝承の一部分を体験できたのである。自分が掲げたテーマは間違っただけでなかったと感じた瞬間だった。

その後の京都伝統工芸専門学校での講演においては、自分の日頃の姿勢について証明することができ、また、伝統工芸でなくても他の経験によっても、同じような姿勢・考え方は十分に身に付けることができることも証明され、逆に日々の生活をどのようにして過ごしていくかが非常に重要であること

とを再認識させられた。

あとにもひけず

とうとう自分たちの企画（民間ノウハウを活かした空港でのチャレンジから「殻を破る」秘訣を学ぶ）の番になってしまった。いや、正確には、フォーラムを書く時が来てしまった、である。しかし、先にも書いたが、フォーラムを書くことの迷いは既になく、企画の内容が固まるにつれ、これだけの企画を考え、いろいろと調整してくれたメンバーのためにも、何とかフォーラムで貢献できるように思うようになっていた。

フォーラムを書くのにあたって考えたこと。まず、他にはないフォーラムの書き方とすること。次に、メンバーの思いが伝わること。そして、メンバーに見せた時に文句を言わせないこと。

できあがったフォーラムは、自分なりに満足している。それは、今まで経験したことのない、代表して物を書くということに対し、自分の役割を認識し、書くための目標を持ち、それを成し遂げることでできたと思うからである。加えて、そこに自分らしさも表現できたことが、より充実さを増しているのだと考える。

いずれにしろ、題材が良くなければ、納得のいくフォーラムも書けなかったはずである。良い題材を提供してくれたメンバーに感謝したい。そして、他人からすればとてもちっちゃな殻かもしれないが、自分にとっては大きな殻を破ることを経験させてくれたことに対し、重ねて感謝したい。ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。でも、次はフォーラム係は勘弁してください。

たちかえる

最後の企画は「豊かな生活とは」であった。閉塾式に出席できなかった自分にとっては、最後の産政塾となった。

キャンプ場で究極のカレーとプラス1品以上を創るという企画。単においしいカレーであれば、得意とするところなので、普段どおりに作れば作ることができる。メニューを考える時に、最初に考えたのは普段どおりのおいしいカレー。でもそれでは、決して「殻を破る」ことはない。作ったカレーはパエリア風シーフードカレー。自分にとっては、初めてのパエリア。そして根っからの肉好きが作るシーフードカレー。もうこれだけで十分「殻を破る」に値する。だから味についてはあえて書かない。何よりも感じたのは、社会人になって相当の時間が経ち、それなりの地位にもなり、年齢も加え、家族もでき、何かと社会的に要求された考え方、行動になつていゝ中で、そういった一切の服を脱ぎ捨て、人間らしい時間を過ごせたことである。若い頃に簡単にできていたことが、簡単ではなくなつていゝることに気がつかされた。これからの過程で同じような状況を作り出すことは容易ではないだろうが、同じ気持ちになれる状況を作り出していければと思う。

おもうつころ

「殻を破る」とは何か。自分ではそんなに重く考えていない。自分が考えることと違うこと、人が考えることと違うこと、自分で考えては見たがやめてしまったこと、そんなことだと思ふ。所詮、自

分がまだ経験したことがないことが殻の外にあるだけで、殻の外にあるから計り知れないものとなり、そこに手を出そうとしないだけである。殻なんて本当はないのであつて、ただ経験したことがあるのかないのか、経験したことに満足するのかわからないのか、それだけのように思う。殻がもし本当にあるとしたら、いつになったら最後の殻にたどり着くのだろうか。そんな宇宙をさまようような旅は、ほとんどの人は好き好んで選ばない。だから、殻があるように思えて、それが大きな殻に感じてしまうのであろう。

簡単なことである。いつもとちよつと違うことをしてみる。それだけで人は何歩でも進むことができる。自分はそう信じている。

おわりに

事務局的松井さんには本当にお世話になりました。すばらしい運営です。松井さんの存在なくしては、少なくとも第17期の産政塾はなかつたと思います。各企画でもいろいろと学ばさせていただきましたが、松井さんの姿勢から学んだことも多かつたです。

本当にありがとうございます。今後ともよろしく願ひします。

「17期産政塾の感想」

産政塾事務局

松 井 英 治

第17期産政塾が終了しました。今年も、月1回の会合を通し、お互いが打ち解けながら、あっという間に8月の閉塾式を迎えることになりました。私にとっては、2年目の産政塾の運営となりました。思い返すと、不安一色からスタートした1年目に比べ、今年は『17期産政塾生との出会いと今後の取り組み』を楽しみに、開塾式を迎えられました。

今年の運営にあたり、昨年度の塾生から、もつと塾生間で議論できる場を増やして欲しいという率直な要望もあり、その反省をいかし、今年には『塾生間の論議を重視する』ことをキーワードに取り組みました。(このように、私にとっては、1年目の経験が今期の活動に向け大きなプラスに作用しました。)

さて、産政塾は、入社して10年前後。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力もつきつつあり、異業種30代前半の若者を中心に集い、『殻の外へ踏み出そう』をテーマに、人材交流する場です。今期の企画を振り返ってみますと、

【第1回】

『殻の外へ踏み出そう』とする同じ目的を持った総勢27名が、初めて顔を合わせ、心なしか緊張した面持ちの中で、開塾式を開催しました。

そんな中で、企画立案において、他のグループの案に対しても、積極的な発言が見られるなど17期産政塾生の主体性と意欲を垣間見ることができました。今年も意欲溢れる人材が集まり、活動のスタートを切りました。

【第2回】

この会合では、職場の円滑な人間関係の実現に向け、『ユーモア・笑い』といった一つのコミュニケーション手法を学ぶことを目的に開催しました。

金城学院大学の森下先生に、笑いのもたらす幅広い効果をユーモアたっぷりに語っていただき、笑いと健康への理解と関心を深めました。その後、吉本興業に所属する西川まさと氏、林家そめすけ氏をお招きし、実際に『笑い』を伝授して頂きました。塾生それぞれが漫才に挑戦し、パートナーとの意気のあわせ方や間の取り方など漫才の難しさを感じつつも、臆することなく自分の持ち味をいかした独創的な漫才を披露し、笑いの耐えない一日となりました。

また、この笑いは、産政塾生の緊張をほぐし、自らの自己アピールの場ともなり、塾生間の距離を縮めることができました。たった1日でお互いを知ることがは不可能なのかもしれませんが、今後本音の議論をする上でも、この企画は大変意義あるものであったと改めて感じます。

学んだ事…本音を語れる仲間になる為には、まず相手を知ることが大事である。

【第3回】

次に第3回では、ほとんどの塾生は、戦争を知らない時代に生まれ、平和ということが当たり前に育ってきた。そこで、特攻隊が飛び立っていった知覧を訪ね、隊員や残された家族の思いに触れ、命の尊さを知り、その上で鹿屋航空自衛隊を訪ね、過去の経験が現在にどう活かされたのかを現地現物現認で確認してきました。知覧では、特攻隊員であった外園徹さんから、われわれより若い青年達が

恐怖心を押し込め、並々ならぬ思いを持って、上空に飛び立っていったその思いを当時の経験から語って頂きました。また、そのような歴史背景の中から今の平和な日本があり、それを維持するために、更なる技術革新、そして何よりも相互を尊重する心が必要であることを伝えて頂きました。鹿屋航空自衛隊では、防衛という視点で、世界と平和の安定に向けて、24時間の監視活動や災害活動など自衛隊の任務に触れ、その重要性を認識しました。

その夜、この体験で感じたことに対し、塾生みなで語り合い、平和のありがたみを痛感しました。また、ほとんどの塾生が家族や両親に対し、感謝の言葉を述べていたことを思い出します。

そして、心の誓いとして、『いかなる理由があるにせよ、戦争は決してしてはならないこと、平和があつてこそ、今の生活を持続することができるし、夢・希望を求めることができる。』この時に感じた思いは、決して忘れてはいけない大切なことであろう。

学んだこと…自分の感情・利害を考える前に、思いやりの心、お互いを尊重する気持ちを持ちつつけることが大切である。そして、戦争は2度と起こしてはならない。平和のありがたみを痛感。

【第4回】

この会合では、『日本の伝統工芸の技能伝承に学ぶ』というテーマで開催しました。当日は、指導者の助言のもとに、陶芸づくりに挑戦しました。その後、京都伝統工芸専門学校を訪ね、伝統工芸の継承に携わる先生方にご講演いただきました。その中で、「技能伝承とは、形式知だけでは伝わるこ

とはできない。やはり人から人への人伝いが重要であり、そこには教える側と学ぶ側の情熱があつてこそ実現する。そうしたプロセスを通じて『人間力』が形成されていく。」という言葉を頂き、『ものづくりは、人づくり』であり、かつ『人づくりの大切さ』を実感しました。塾生皆で今回の活動を通しお互いを感じたことを論議し、この会合を気付きの場に終わらず、職場で実践することを塾生皆で確認しました。おそらく、今頃、実践するためには何をすれば良いのか塾生それぞれが自らで考え、情熱を持って職場で実践しているのではないでしょうか。

職場での実践を考えると、製造業の場合、納期に間に合わせるためには、できる人が対応するしかないという現実もあろう。このように、時間という制約の面で、技能伝承の難しさがある。ただ、このこと疎かにすれば、企業の将来は衰退してしまう。そうなると、どうすればよいのか？やはりOJTになるのかなと思う。OJTにしても、そんな人材の余裕がない。これが現場の本音だろう。それでは、どうすればよいのか？私の経験から、やはり問題発生時への対応時に若手も含めて、議論させることでなからうか。課題解決に向けたベテランの必死さが伝わり、若手にとっては大きな刺激になる。若手を含めたワイワイガヤガヤそのような場がどれだけあるのがポイントになるのではないだろうか、と私は思います。

学んだこと…何事も情熱を持って取り組むことが大切である。

【第5回】

この会合では、中部国際空港での民間ノウハウを活かしたチャレンジングな取り組みから『殻を破

る』秘訣を学び、実践することを狙いとしました。当日は、中部国際空港（株）の尾頭様より、開港にあたり企業経営を強く意識して、前例踏襲でなく社員間で知恵を出し合いながらチャレンジしてきた取り組みについてお話を伺いました。

その実現にあたっては、紆余曲折があったものの、「開港日の厳守」と「事業費の削減」という2つの大きな目標を達成した時の喜び、またそれを乗り越えた自信が次への挑戦に繋がっていること。

今後の課題としては、目指すべき空港像をどう考えるべきか、その方向性を示すのはわれわれリーダーの役割であると語る尾頭様の横顔には、責任感と自信が漲っておりました。その後、塾生達が、顧客の視点で中部国際空港を現地・現物で確認し、課題を抽出し対応案を検討しました。議論では、既存概念を飛び出したユニークなアイデアもあり、広い視野で物事を考える面白さを実感しました。

どのグループも、自らの考えを主張しつつも、自分の考えの異なる人の意見も受入れながら理解を深め、アイデアをまとめました。これこそ、本当のコミュニケーションなのだろう。そして、このような積み重ねが、お互いのやる気と責任感を芽生えさせる。そして、自然に支えあう団結力が生まれ、どんなことでも成しとげてしまう大きな力となるのであろう。

学んだこと…広い心（視野）で接し、自分と考えの異なる人の意見も受入れると新たな発想が生まれ、団結も強まる。そして、自分の考えもさらに深められる。

【第6回】

この会合では、『豊かな生活とは〜心豊かなライフスタイルを創造・体験しよう〜』というテーマ

で、スローライフ・スローフードの実践を通し、心身のリフレッシュを図りながら、心豊かなワークライフバランスについて考える機会としました。

開放的な空間でゆっくりした時間の流れる中で、グループ毎に創意と工夫をしながら、最高級の料理（究極カレー&1品以上）を創り、グループ間での料理対決など工夫を凝らしたアトラクションを交え、塾生皆で味わいました。塾生からは、「自ら考え手間隙かけた料理は、どれほど高級な料理よりも美味しかった」との感想もありました。また、バンガローでは電気がつかず、シャワーではゴキブリがいるなどやや不便な面もありましたが、誰一人文句も言わず、塾生みな童心に返りワイワイガヤガヤと心から楽しみ盛り上がりしました。要は、心の持ちようによって、環境はよくもなりわるくもなる。心豊かな生活とは、楽しく生きようという心の持ちようかもしれせん。そういう気持ちさえ持ちつづけければ、結果も良い方向に行き、運も引き寄せることができるのかも。

産政塾のより一層の絆が深まった会合となり、すっかり皆で打ち解けていた第17期産政塾でありました。

学んだこと…豊かな生活とは、心の持ちようによって変わってくる。幸せに暮らそうと思えば、幸せを引き寄せる。

【第7回】

最後に、『殻とは何か』、『殻の外へ踏み出すためにはどうすればよいのか』、そして『今後の決意』を議論し、グループ毎に報告していただきました。

この議論の中で、私自身なるほどと気付かされる点がたくさんあり、新しい発見にワクワクさせられました。また、活き活きとハツラツに報告する塾生の姿に、自分もやらなきゃいかんと感化された次第です。

↳塾生による論議内容↳

○殻とは？

殻という言葉を使う時／自分の思い込みから来る既成概念／自分と他人との間にある壁／知らずに出来てしまうもの／面倒くさいとか嫌いだと思う気持ちや限界

など

○殻の外へ踏み出す為には？

発見を楽しむこと／面白いと思う気持ち／殻があることを認識すること／過去の自分の分析・整理／自分の気持ちに素直になる／アンテナを高く感度高く情報を受信＆発信する／個性やこだわりオリジナリティを認め合いながら同じプロセスを共有する／視点・見方を変える／相手の立場になる／動く・やる・行動する

など

○今後の決意

後退しないぞ!!／美しいハーモニーを奏でるぞ!!／この繋がりを大事にし継続して懇親会やるぞ!!

など

学んだこと：一人で考えるよりは、みんなで論議すれば、いろんな視点で物事を考えることができる。悩んだときは、神（17期産政塾）頼み。この繋がり大切にすること。

◎ 2年前の自分を振り返って

自らを振り返る意味で、この中部産政研に派遣された2年前の就任時の決意表明を読み返すと、そこには、『新たな発見を楽しみ・こだわりを持つことで、自らで考え・新たな情報を求め、自分の知恵として蓄え、人生の幅を広げていきたいです。』、『どうしても仕事は構えてしまう。趣味のように構えず自然に興味が持てるようになりたい。』とあった。その時期は、いままでとまったく経験したことがない分野への挑戦であり、未知の世界に踏み出した時である。果たして今自分はどのように変化しているのだろうか？『新たな発見を楽しみに』、いつの間にか、この気持ちが薄れてきている。では、なぜこの気持ちが薄れてきたのだろうか？今の自分は、何かと考えすぎて、発想まで小さくなっているような時がよくある。すなわち、大胆な行動ができない自分がいるかもしれない。これを見ると、こうなりそうなので、やめよう。本当は、やってみないとわからないのに…

2年前、殻を踏み出したのに、いつのまにか自分から殻を作っているじゃないか。結果をあせる分、失敗を恐れているかもしれない。いつのまにか、苦労から逃げ、我慢を忘れ、安直な方向に流れているのかもしれない。あの時の初々しい気持ちが、途中で途切れてしまっている。

今回の会合を通して感じたことだが、気持ちは、自分の意志の持ちようにある。そして、それは自

分から変えることもできるし、人により変えられることもある。今年も、この産政塾の事務局をやり、皆さんの真摯な取り組みとしっかりとした考え方に触れることで、失敗を恐れるより一步踏み出すことの大切さを改めて感じる事ができた。一步一歩前進することで、新たな発見を楽しんでいきたい。そして、この意志が途切れないよう、16期・17期産政塾で出会った51名の繋がりなどいろいろな人との出会う場を大切に、何かを感じ、多くの人と話し合いながら、自らの考えを深めていきたい。

◎17期産政塾とは？

意欲があるメンバーであった。特に今年は、グループ毎の結束力が非常に強かった。そういう面で、どの企画もかなり洗練された会合であった。当初は、グループの結束力があまりにも強く、うまくグループ間での融合が難しいのではないかと思われたが、人への感謝する気持ち・尊重する気持ちを塾生みなが持ちあわせていたことにより、よりよい人間関係が生まれていった。1名（個人）より5名（グループ）、そして5名（グループ）よりも27名（17期産政塾）うまく融合され、大きな力を発揮できた17期産政塾であった。

◎17期塾生の皆さんへ

この産政塾を通し、皆さんと接することで、いろいろな考え方に触れることもでき、改めて自分自

身を見つめ直すことができませんでした。まずもって、有り難うございます。きつと、この産政塾での皆さんの取り組む姿勢を見る限り、今後とも一歩一歩前へ進んでいくでしょう。前進すればするほど、ぶち当たる壁もどんどん大きくなっていくでしょう。それを乗り越えることが今回の本当の意味での狙いかと思います。そのための方策は何かというところ、やはりまじめにコツコツ取り組むことが一番大事なのでしょう。それが、いざとなったときに力を発揮する。このことは、能力・意欲ともにある皆さんのすでに実践している。ただ、一人でできることは限られてくる。そして、誰もがいつかは過酷な大きな壁がやってくるでしょう。その時に、ぜひこの産政塾の繋がりをうまく利用してください。17期の塾生だけでは難しければ、16期の塾生にも声を掛けます。きつと、集まってくれます。皆で論議すれば、広い視野にたつて物事を考えることもできるし、パワーも2倍・3倍となつてくる。そうすれば、おのずと壁が小さく見えてくるのではないのでしょうか。仕事も同じなのでしょう。一人のスーパーマンがいるより、たとえ未熟でもやる気がある人間が集まつていろいろな視野で話あった方が、幅が広がり底知れぬパワーがでる確率が高い。とくに昨今の仕事はかなり複雑になつてきており、いろいろな部署との連携が必要不可欠である。また、あるセミナーの中で講師が、『仕事は仲間と一緒に協力し合つてするものであり、仲間の孤立化を許してはいけない。』と言つていた。とくに、将来管理職になられる皆さんには、上司という立場になつた時、仕事への情熱と部下への思いやりを持つて取り組んで頂きたい。それが、部下の気持ちに大きな影響を与え、組織の成長にも繋がります。大きな成果に結びついていくのではないのでしょうか。もちろん、自らの考えもさらに深まり成長していくのでしよう。とはいえ、いままで述べたことは、言うは易し行ふは難しである。成果に結びつくまでには、

果てしなく長く険しい道のであることは容易に想像がつく。でも、昔の選択肢がなかった時代に比べれば、いまの僕らは恵まれている。僕らには、次への挑戦もできるし、選択肢もたくさんある。たしかに、選択肢がありすぎて困ることもあり、時には不安になることもある。だからこそ、人との触れ合い・話し合いを通しながら、互いの意見を尊重しそのとき考えられるベストな判断をし、自らの可能性を広げていくべきなのではないでしょうか。それでも、うまく行かなければ、皆でしっかり飲んで、笑ってスカッとしましょう!! 笑い門には福来る。やはり、心の持ちようなのです。心をリフレッシュして、また再チャレンジしましょう。そんな気楽さも必要なのではないでしょうか。自分も含めて萎縮している世の中にも感じることです。

いずれにせよ、この17期産政塾が無事成功したのも、多士済々たる塾生達がいたからこそであります。17期産政塾のこれまでの活動に感謝するとともに、それぞれの職場で、より一層ご活躍を楽しみにしております。

最後に、ご多忙の中、業務のスケジュールを調整し参加いただいた塾生の皆様、また送り出していたいただいた職場の皆様、そして企画を実行する上で大変お世話になった関係各位には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

期日：2006年1月23日（月）

場所：全労済豊田会館

内容：第17期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会



第17期産政塾に集った塾生



グループ討議では議論も関連に



各リーダー、企画への熱い思いを語る

《第2回会合》

期日：2006年4月20日（木）

場所：刈谷振興センター

内容：「漫才の実践を通し、ユーモア・笑いについて学ぶ」

講話、プロの技を見る、実践

懇親会



金城学院大学の森下教授による「笑い与健康」についての講演
神様より人間だけに与えられた“笑い”をたくさんの方に広げよう!!



パートナーとの意気合わせなど
漫才の練習を実施

吉本興業の西川まさと氏と林家
そめすけ氏から塾生にプロの技
を伝授



いざ、漫才を実践!!
臆することなく自分の持ち味を
いかした独創的な漫才を披露



《第3回会合》

期日：2006年5月17（金）・18日（土）

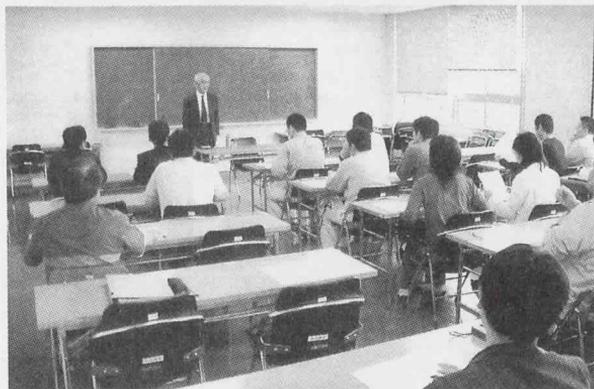
場所：知覧、鹿屋航空自衛隊

内容：「命の尊さ・平和維持の重要性について学ぶ」

施設見学、講話、討論、懇親会

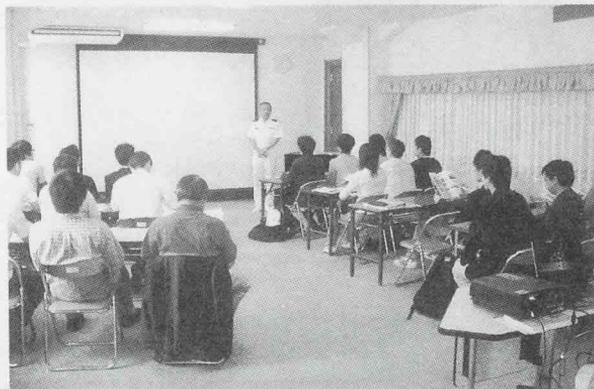


澄み渡る青空の中で、桜島バックに記念写真



ふかそのさんによる
「当時の戦争経験談と
平和について」の講演
互いを尊重する心が大事
であることを伝えて
いただきました。

知覧平和会館を見学



航空自衛隊による「自
衛隊の役割と責任」に
ついての講演
24時間体制での自衛隊
の任務に触れ、その重
要性を認識しました。

《第4回会合》

期日：2006年6月10日（土）

場所：京都工芸会館

内容：「伝統工芸の技能伝承を学ぶ」

陶芸体験、講和、討論

懇親会



京都伝統工芸専門学校の工藤教授による「人伝いによる技能伝承」についての講演
教える側の姿勢など熱く語っていただきました。



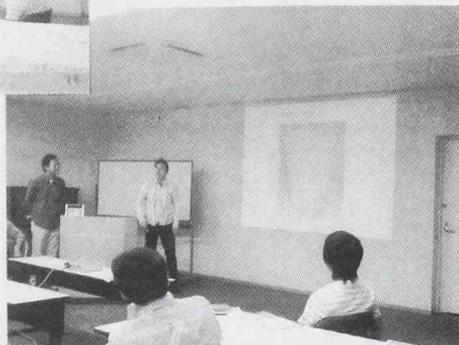
京都の瑞光釜で陶芸体験を実施

京都大学大学院の塩瀬さんによる「工学的分析での技能伝承」についての講演



塾生間で活発な議論

企画グループ主催の品評会



《第5回会合》

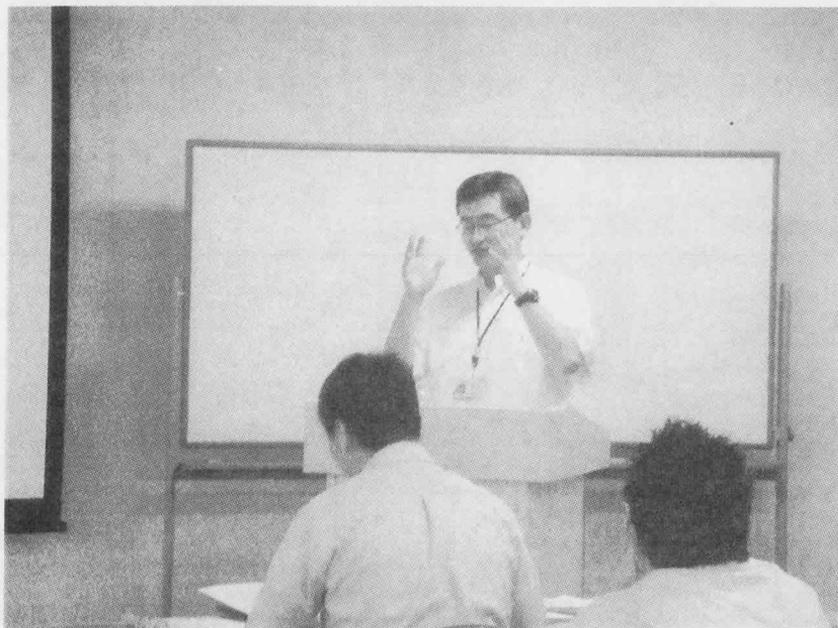
期日：2006年6月27日（火）

場所：中部国際空港

内容：民間ノウハウを活かした空港でのチャレンジから

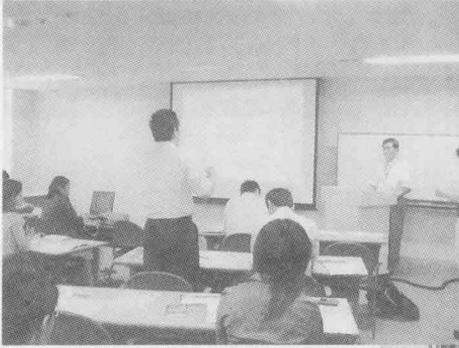
「殻を破る」秘訣を学び、実践する。

講話、施設視察、討論、懇親会



中部国際空港株式会社の尾頭さんによる「民間ノウハウを活かした空港での取り組み」についての講演

開港までの苦労話など本音も含めお話をいただきました。



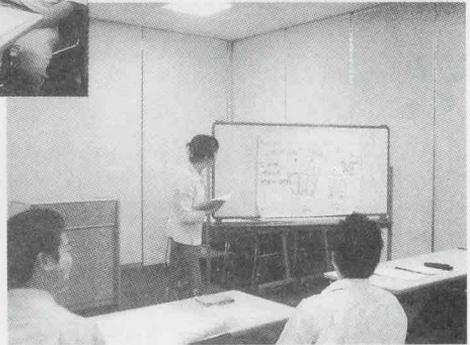
講師と塾生との意見交換を実施

塾生それぞれが、顧客の視点に
たち、現地現物現認による問題
点の抽出と課題出しを実施



課題に対する対応アイデアを塾
生間で議論

ユニークなアイデアをグループ
毎に披露



《第6回会合》

期日：2006年7月14日（金）

場所：定光寺キャンプ場

内容：ワークライフバランスの視点から

新しいライフスタイルを实践・体験



皆で工夫して作った料理に舌鼓しながら記念写真
本音が言える仲間になった17期産政塾生



ゆっくりとした時間の中で手作りを楽しむ

創作した料理を塾生それぞれがアピール



試食タイム、おいしい!!

後片付けもしっかりと実施



《第7回会合》

期日：2006年8月23日（水）

場所：カバハウス

内容：第17期産政塾閉塾式、
「殻の外に踏み出そう」について討論
懇親会

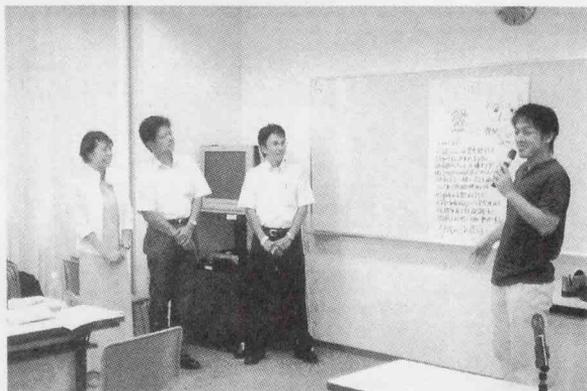


みなさんお疲れ様です。
今後のますますのご活躍を期待しております。



河原事務局長による贈
る言葉

今後の決意を語る



「殻の外に踏み出そ
うについて」塾生全
員で議論

産政塾歴代卒業生

※ 組織名は参加当時の名称

第2期生 (14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 小西 正晃 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株) ((株)デンソー)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生 (14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株) ((株)デンソー)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

竹内 順治 豊田合成労働組合

朝日 和寛 日本電装(株) (株)デンソー)

田中 義和 トヨタ自動車労働組合

村田 滋 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)

沢田大八郎 豊田自動織機労働組合

原 年幸 トヨタ自動車(株)

中村 武司 アイシン精機(株)

宮坂 和行 松坂屋労働組合

山田 法夫 名古屋鉄道(株)

秋葉 寛 中部電力(株)

駒沢 修 アイシン労働組合

岡 啓視 中部電力労働組合本部

加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合

松野景之介 トヨタ車体(株)

相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合

大島 一峰 アイシン精機(株)

大西 勝彦 豊田自動織機労働組合

神谷 直 アイシン労働組合

岸田 竜茂 中部電力(株)

雲井 浩 丸栄労働組合

近藤 郁也 トヨタ車体(株)

島川誠一郎 トヨタ自動車(株)

関谷 俊司 日本電装(株) (株)デンソー)

竹下 裕之 トヨタ車体労働組合

塚本 和宏 全松坂屋労働組合

遠山 泰弘 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

深谷 修 豊田合成(株)

宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株) (株デンソー)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 横田 晴充 (株東海銀行 (株UFJ 銀行))
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

齊藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株) (株デンソー)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株東海銀行 (株UFJ 銀行))

第8期生 (22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生 (17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株) (株)デンソー)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 白井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)

第10期生 (21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田 竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生 (21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第12期生 (22名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)UFJ銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第11期生 (25名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大嵐 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学大学院国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行 (株)UFJ銀行)
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第14期生 (22名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 (株)松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体(株)
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 (株)デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機(株)
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ(株)
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力(株)
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車(株)
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道(株)
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 (株)豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第13期生 (21名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 彗和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)UFJ銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第16期生 (24名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太一郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第15期生 (25名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

第17期生 (27名)

- 荒居 昭治 全ユニー労働組合
石田 保志 名古屋鉄道労働組合
伊藤 絃子 丸栄労働組合
井戸田章弘 トヨタ車体労働組合
岩田 将弘 アイシン精機株式会社
大澤 秀樹 東邦ガス労働組合
大橋 俊介 トヨタ自動車株式会社
加藤 章子 刈谷市役所
加藤 明人 全トヨタ労働組合連合会
木村 匡伸 デンソー労働組合
古賀 博義 アイシン労働組合
近藤 邦博 豊田市役所
佐々木澄和 東海理化労働組合
塩谷 武司 トヨタ紡織株式会社
志岐 宣浩 豊田工機労働組合
品川誠二郎 株式会社松坂屋
田中 光明 アスモ労働組合
野田 雅子 株式会社豊田自動織機
長谷川真次 豊田自動織機労働組合
樋山 卓造 東邦ガス株式会社
益田 寛 トヨタ車体株式会社
増田 裕介 中部電力株式会社
松井 正和 松坂屋労働組合
松本雄一郎 株式会社デンソー
水谷雄一郎 豊田合成株式会社
三谷 勝行 トヨタ自動車労働組合
村井 真一 中部電力労働組合

産 政 塾

2007年1月 第8刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3F

TEL 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本



塾 政 塾

塾 長 小田桐勝巳

塾 生

全ユニー労働組合	荒居 昭治
名古屋鉄道労働組合	石田 保志
丸栄労働組合	伊藤 絃子
トヨタ車体労働組合	井戸田章弘
アイシン精機株式会社	岩田 将弘
東邦ガス労働組合	大澤 秀樹
トヨタ自動車株式会社	大橋 俊介
刈谷市役所	加藤 章子
全トヨタ労働組合連合会	加藤 明人
デンソー労働組合	木村 匡伸
アイシン労働組合	古賀 博義
豊田市役所	近藤 邦博
東海理化労働組合	佐々木澄和
トヨタ紡織株式会社	塩谷 武司
豊田工機労働組合	志岐 宣浩
株式会社松坂屋	品川誠二郎
アスモ労働組合	田中 光明
株式会社豊田自動織機	野田 雅子
豊田自動織機労働組合	長谷川真次
東邦ガス株式会社	樋山 卓造
トヨタ車体株式会社	益田 寛
中部電力株式会社	増田 裕介
松坂屋労働組合	松井 正和
株式会社デンソー	松本雄一郎
豊田合成株式会社	水谷雄一郎
トヨタ自動車労働組合	三谷 勝行
中部電力労働組合	村井 真一

中 部 産 政 研 松井 英治